
GANTZfiction

kurogane

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GANTZ fiction

【Zコード】

Z3817E

【作者名】

kuroggane

【あらすじ】

それはかつて東京チームが強かつた時代

最強の男、最高の女、最狂の男さまざまな強者が揃っていた

その中には、和泉も西もいた

そんな中、異才を放つひとりの男が現れた

その男の名は西城智也

謎の過去をもつ西城

謎の死により黒い玉の部屋に導かれた西城があらゆる星人達と戦つていく

第一話 黒こべの部屋

「はあ・・はあ・・」
「うう」

男はあたりを見渡した

「ビルが・・建つて・・いるって・・事・・は・・戻つてこれ・・

男は全身血だらけで胸には死に至るほどの大好きな傷がついていた。
2、3歩ちどり足で歩き倒れ込んでしまった

「はあ・・俺死ぬ・のか」

そして男は死んだ。

ジジジジジジ

チーマー A

「おこー! 今度は、野武士みたいな奴が出てきたぜ!」

チーマーB

「そんな事よりここにどこよ？東京タワー見えるツー」とはやつぱ東京？」

そこにはマンションの一室だった。

部屋にはチーマーが4人、リーマンが3人、ギャルが2人、他に異質を放つた全身タイツを着た人達が15人いた。

ギャルA

「あたいら〜！確かにトラックにひかれたよね？」

ギャルB

「そりそりなんで生きてんの？」って天国？」

ギャル達は今おかれている状況を理解しようと必死だった

チーマーC

「なああんたらなんかわかんねえの？」

チーマーの一人が、スーツを着た長髪の男に聞いた

長髪の男はしばらく黙り込んで答えた。

長髪の男「いざれわかるだ……」

男は意味深な事をいい残した

チーマード

「はあ意味わからぬえし」

チーマードが喧嘩をふつかけよつとした時、黒い玉からある音楽が
流れてきた

あ～た～らし～いあ～さがきた
きぼ～うのあ～さ～が

その歌に氣づいた、男（野武士のよつな格好の奴）がゆつくつ起き上
がつた

野武士

「はあ・俺生きてる?」

野武士は自分の胸に手をあてた

野武士（心の声）

「確かに俺は死んだハズじゃ…それにこのラジオ体操の音楽、真ん中の黒い玉から鳴つてんのか？」

主人公も今おかれている状況を理解するのに必死だった

リーマンB

「てめえ達の命は無くなりました。

新しい命を

どう使おうと

わたしの勝手です。という理屈なわけだす。
なんだこれ？」

てめえ達は今からこの方をヤツつけに行って下さい

よろいむしゃ星人

特徴、つよい、ひっこい

好きなもの

かたな、よろい、つよい人

口癖

くせ者じゅーくせ者じゅー

スーツを着た男

「おいーおっさん達どいといた方がいいぞ！」

スーツを着た男が黒い玉の横にいたリーマン達に言った

リーマンA

「えつー？」

ガンッ

チーマーA

「すげえーなんだこれ おもちゃか？」

黒い玉が開きおびただしい量の銃が出てきた

野武士（心の声）「よくわからないが、このボロボロの服をどうとかしないと…」

すると野武士はスーツを着た人達を見た

野武士「あいつらがなじよくなัวを着てると、黒い玉の回りを物色すると、箱のよつなきを見つけた屋にあるのか?」

野武士は黒い玉の回りを物色すると、箱のよつなきを見つけた

西城ちゃん

箱にはそつかかれていた

西城

「……」

西城はおもむろに、スーツの入ったケースを持ち出した

チーマー

「あんたそれ着るの?」

チーマーが西城に言った

チーマー

「じゃおれも着替えようかな~」

チーマーB

「やめとけー。そんなダサいタイツ」

チーマーC

「だな~」

リーマンB

「私たちはどうしますか?」

リーマンA

「着てみますか。部長(リーマンC) はどうしますか?」

部長

「私はいいよ。君たちだけ着たまえ」

部長以外のリーマンは、他の部屋にスーツを持っていった
西城はスーツを持って他の部屋に移動する時に、スーツを着た数名
の人達が黒い玉の横の部屋に行くのを見た

西城「??。なんかあんのか?」

西城がスーツに着替えていると、黒い玉の部屋からギャル達の叫び

声が聞こえた

西城はいそいでスーツに着替えると、部屋に戻った
するとギヤルAは頭から少しづつ体がなくなつていった

西城「なんだー?どうなつてんだ?」

それに続いてスーツを着た人達やリーマン、チーマーなど次々と消
えていった
みんなが動搖する中、スーツを着た人達は冷静ですごく落ち着いて
いた
西城はそれを見て、死に直結するわけではないと悟った
西城は黒い玉に近づくと銃を取つてみた

西城

「とりあえず持つていくか。刀は…無いのか?」

西城は軽く刀を探してみたが、見あたらなかつた

西城

「んつ?」

すると西城はスーツの箱の中、「コントローラーがあるのに気付いた

西城

「なんだ?」
「これ?」

コントローラーを持つと、西城も転送されていった

第2話 西丈一郎

ジジジジジジ

西城

「ソレは... どこだ?」

そこは住宅が多く立ち並ぶ、住宅街であった
西城はあたりを見渡した

近くには部屋にいたチーマーや、ギャル、リーマンなどがいた。
スーツを着た人達は1人もいなかつた。

西城「あの黒いタイツを着てる人達、どこにいつたかわかりますか
?」

西城は部長に問いかけた

部長

「ああ、あの人達ならターゲットがどうとか言って、どっか走つて
いつたよ」

西城「そうですか。わかりました」

すると続けざまに部長が問いかけた

部長「それより君、部屋にいた時、奇妙な格好してたね。まるで…野武士のよつな。ビリしてあの格好をしていたのかね？」

西城（心の声）

「マズいな！本当の事言つても絶対信じないし…」

西城はとつせに嘘を思いついた

西城

「あつあれですか。実は学園祭の出し物の衣装なんですよ。学園祭が終つて、片付けの途中で階段で足を滑らしてしまつて、気づいたらあの部屋にいたんです」

部長

「やうなのかな。悪い事を聞いたね… すまない」

部長はそつ言つと西城に誤つた

西城「全然大丈夫ですよ」

西城は謙虚に言った

チームーB

「外出れたし、ラーメン食つて帰るか」

チームーA

「いいね～メンラ～をべた～するか

チームーD

「ね～ね～君たちもいかない？」

ギャル達に問いかけた

ギャルB

「ええ～どうじょうかな～」

チームー4人とギャル達は、話しながらどこかに歩いて行った

リーマンA

「部長、私達もこきますか？」

部長

「そうしますか。君はどうする?」

西城に問いかけた。

西城

「俺はいいですよ。まだ少し気なる事あるし……」

部長

「わかった。じゃあ私達は行くよ。気をつけろんだよ」

部長達はさう言つてチーマー達の方へ行つてしまつた
西城は部長達が行つたあと手に持つていたコントローラーに気づいた

西城「これなんに使うんだ?」

西城は適当にいじり始めた

西城

「よくわかんねえな。とりあえず黒いタイツの人を見つけて聞き出
してみるか」

西城「さつまつと部長達とは、反対方向へ走りだした

チーマーB

「携番教えてよ。」

ギャルA

「ええ、ラーメン屋いくだけっていつたじょん」

チーマーとギャル達は話をしながら歩いていた
リーマン達はその後ろを歩いていた

ピンポロパンポン
ピンポロパンポン
ピンポロパンポン

チーマーA

「なんだ?」「これ?」

チーマーC

「誰か携帯鳴つてつぞ」

チーマーB

「誰のだぶえ~」

チーマーBの頭がいきなり爆発すると、それに続いて残ったチーマー¹やギャル達の頭も爆発した

リーマンB

「うああああどひなつてんだ！？」

部長

「落ち着ぐんばあ

部長の頭も爆発した

リーマンB

「部長～～～～」

リーマンA

「ああ…早く…離れよ…」

リーマン2人は、急いでもときた道を走って行った

その頃、西城はコントローラーのあるボタンを押した
すると西城の体が消えた。

西城

「なんだ？ 消えたのか？」

西城はステルスマードになつていた
そのままステルスマードでいると、通常では見えなかつた人が見えた。
その何者かは、部屋のスーツを着た人達の中で唯一服を着ていた中
学生くらいの男だった

西城

「おい！ お前なにしてんだ？」

西城が中学生に問いかけると、中学生は一瞬ビックリしたが、すぐ
く冷静であつた

中学生

「あんた。俺が見えてんの？」

中学生が問いかけると、西城もすかさず答えた

西城

「ああ、見えてるよ」

中学生はチラッと西城の手元を見た

中学生

「へえ～。あんた新入りだなー。よくそれ使い方わかったな」

西城は中學生の口調にイラッとしたが、それを抑えすかさず答えた。

西城

「適当にやつたんだ。お前、今からなにが始まるか。わかってるだろー。」

中学生「狩りだよー」

西城「狩り??」

中学生

「まあ。あんたにはいいかな。スーツの重要性も、あんたが最初に気づいたみたいだし、ステルスマードにも勘づいたし、特別に説明してやるよ」

そう言つと中學生は今から宇宙人を狩りにいく
そして狩りをやり終えたら、また元の部屋にもどり、家に帰れるよ

「ついになる」と中学生は叫んだ

中学生
「まあ簡単にいうとこんな感じ、それと宇宙人は点数形式でGAN TZに採点されんだよ。」

西城「採点? GAN TZ? ?」

中学生「採点は tota 100てん形式で、100てんをとると、3つの選択肢が選べるんだよ。」

西城「100てん? となると何?」こののか?」

中学生「まあな。今のメンバーで何回も100てんとったやつがいるけどな。あとで紹介してやるよ。」

西城

「選択肢ってなに?」

中学生「それは100てんとつてみればわかるや。まあ一つだけ教えてやるよ。」

西城「ケチだな」

中学生「これでも出血大サービスなんだぜ。一つはこのゲームから解放されるんだ。記憶を消してな」

西城「記憶? 消す必要あるのか?」

中学生「この部屋での事は外ではタブーなんだよ。守らないと頭の爆弾が爆発するんだよ」

西城「爆弾!」

中学生「まあ馴れてこれば、自然といろいろわかつてくれる。あんた名前教えてよ」

西城「西城智也。お前は?」

中学生「西丈一郎」

第3話 よろいむじゅ星人

西城

「これからどうする?」

西に問い合わせた

西

「とりあえず。んッ！？」

西が前方からくる何かに気付いた
それはよろいむじゅ星人だつた
西はとつさにXショットガンを構えた
それを見て西城も、Xショットガンを構えた。

西城

「これどうやって撃つんだ？」

西城は小声でささやいた

西

「静かにしろ！ターゲットに気づかれる」

会話をしている内に、よろいむしゃ星人はすぐ近くまできていた
だがよろいむしゃ星人はそのまま通り過ぎて行つた。

西城

「あれ？ 気付いてない？」

西

「ステルスマードで見えてないんだ」

その時、よろいむしゃ星人のいた方向から、2人組のスーツをきた
男達がきた。

西城

「あいつら誰だよ？」

西

「よく知らん。前回のミッションから着た奴だから、対した事な
い」

西城
「ふうん」

スーツA

「あ！いたいた！よろいむしゃ星人！何でやる？」

スーツB

「そりや当然刀でしょ」

スーツを着た2人組の会話を聞いて、よろいむしゃ星人が気付いた。

よろいむしゃ星人

「か／＼／＼／＼／＼

くせものじや！…！くせものじや！…！」

よろいむしゃ星人は腰に差している刀を抜いた

シウン

シウン

スーツを着た2人組はガンツソードを伸ばした

よろいむしゃ星人は2人に刀を斬りつけた

2人がそれを避けると、スーツAがガンツソードを斬り上げた

そのガンツソードがよろいむしゃ星人の右肩に当たり、よろいむしや星人の右肩の鎧が取れた

よろいむしゃ星人「か／＼！－！」

よろいむしゃ星人が怒り始めた
するとスースBが背後から斬りかかつた
よろいむしゃ星人はそれを簡単に避けた
スースBはそれに続けて2、3太刀よろいむしゃ星人に斬りかかつた
だが簡単に避けられてしまった。

スースA

「さつきと動きが全然違う！」

そう言うとよろいむしゃ星人はスースBに刀を斬り上げた
スースBの両腕が宙を舞つた

スースB

「うあああ／＼」

スースA

「スースがきかない」

スースAは手がふるえ始めた
よろいむしゃ星人はすかさずスースAに斬りかかつた
それが偶然、ガンツソードにあたりまぬがれた
だが手がふるえていたせいで、ガンツソードを手放してしまった
スースAは完全に腰が抜けてしまった

よろいむしゃ星人はスーシBの首に刀を斬りつけ、跳ね飛ばした

そしてスーシAを斜め半分に斬った。

その時西が小声で言った

西

「今回ヤバいな。やり過げすつてのもありだな」

西城

「あれやつていいのか？」

西城は簡単に言い放った

西

「はあ？ マジでいつてんの？ 来たばっかのお前にやれるはずが

西がそう言つてゐる間に、西城はステルスマードを解除していく
そしておもむろに落ちていたガンツソードを拾つた

西

「手はかさねえへザ。勝手にやれよ」

西城はそのままよろいむしゃ星人に歩み寄つていった

よろいむしゃ星人
「か～～～くせ者じや！」

そう言つうとよろいむしゃ星人は、西城に斬りかかつた
よろいむしゃ星人の一太刀が西城を襲つた

西城はそれを簡単に避けた

そしてよろいむしゃ星人の刀が、強く地面に叩きつけられた
西城はその隙にガンツソードを、よろいむしゃ星人の首に斬りつけた
よろいむしゃ星人ね首が斬り飛ばされた

それは一瞬の出来事であつた

西はその一連を見て答えた

西

「あんたなにもん？」

西城

「サムライ」

第4話 ガンツチーム（前書き）

読んでる人いるのかな?
もしいたらなんでもいいんで感想ください。

第4話 ガンツチーム

西はステルスマードを解除した

西

「あんた強いね。簡単に倒しすぎ」

西城

「動きにパターンがあつただろ。さつきスースがきかないとか言ってたけど、このスースってなんなの?」

西

「ああそれ。あんたも無意識に使ってたけど、それはいわばスーパースースだな。常人以上のパワーや耐久力がある。スースの耐久力にも限界があつて、首の所にある丸いやつから黒い液体が出たら、スースが破壊された証拠だから気をつけな。それとさつきみただろ。時々スースの耐久力を無視する攻撃があるから、不用意に敵の攻撃に当たらない事だな」

西城「確かに。銃トリガーが2つあるけど、なにか違うのか?」

西

「上がロックオン、両方引けば打てるよ。これで質問は終わりな」

西城
「ああ、わかつた。」

歩きながらやりとりしている内に少し広めの道路に出た
西はコントローラーを見た

西
「「Jのあたりだな。」

西城
「なにかあるのか?」

西
「だいたいいるな」

そこには部屋にいたスーツを着た11人いた
すると前方から10体以上のよろいむしや星人が立ちはだかった
スーツを着た人達との戦闘が始まった

西
「おつ！始まつた」

西城

「あいつら、大丈夫か？」

西

「あすこにいる長髪の男いるだろ名前は、和泉紫音、2回クリア、今はチームのリーダー的存在だな。」

西はチームのメンバーの説明を始めた

西

「その後ろにいるメガネかけた男が、清水直也、1回クリア、あいつは基本的にいつも和泉と行動してる。それとあのスポーツ刈りの男が、小宮山徹男、3回クリア、小宮山はみんなの兄貴分、てきな存在だな。戦闘もハンパなく強いしな。外人みたいな男いるだろ、佐々木カオル、4回クリア、ブラジルと日本のハーフで、興奮するとかなりヤバイ。赤髪の女が、斎藤カレン、3回クリア、今まで部屋にきた女の中で一番強いし、ターゲットには容赦ない奴だな。あそここの3人組が、相川淳、相川亮、相川進、3人兄弟で相川淳は1回クリアしてたな。おとなしめな女子いるだろ。あれは和泉の彼女、確か名前は涼子って言つたかな？あと残りの2人は新入りでまだよく知らない。最後にもう1人、栗原隼人、7回クリアこのチームの中で一番強いな。最近はめんどくさいから戦闘に参加していない」

説明している内に10体以上いたよりむしゃ星人は全滅していた

和泉

「じゃあこいつから別れてターゲットを倒すか」

清水

「ああ、そうするか

和泉

「んつー!?

和泉が西に気付いた

和泉
「西ー!そいつ誰だ?」

西に問い合わせた

西

「ああこいつ?西城。部屋にいただろ」

和泉

「新入りか。珍しいな。お前が他の奴と一緒に行動してるのは」

西

「.....」

清水

「和泉いくぜーーー！」

和泉

「ああーじゃあな」

和泉が清水に応対した

そしてあたりにいたメンバーは、それぞれ別れてターゲットを倒しに行つた

西城

「どうすつかな」

西城が言った瞬間西が答えた

西

「今から別行動な。また部屋で会おうぜ。念えたらのはなしだけど

.....」

そういうと西はステルスマードになって消えて行った。
西城はコントローラーを出して、レーダーを見た。

西城

「とりあえず、敵と接触してみるか

第5話 騎馬星人

ある住宅街

和泉は、清水と相川3兄弟と行動をしていた

清水

「和泉、お前涼子と一緒にやなくていいの？」

和泉

「涼子はカレンさんと一緒にだから大丈夫」

会話をしていると前から星人がやつてきた。その星人はよろいむしや星人とは違い、忍者のような星人だった

淳

「おお！きたきた」

亮

「さつきとタイプが違うな

進

「さつさとやつちまうか」

戦闘が始まった。忍者のような星人の数は8体、相川3兄弟は後ろからXショットガンを撃ち、清水と和泉はガンツソードで忍者星人を斬りつけた

忍者星人はよろいむしゃより、素早くなかなか攻撃をあてる事はできなかつた

和泉

「意外に速いな。」

清水

「デカいの使うか?」

清水はZガン（100点メニューで手に入る銃、トリガーを引くと上から重力で圧力をかけ、敵を押しつぶす武器。形がアルファベットのZに似ている。ネットでHガンとも言われている）を和泉に使うか聞いた

和泉

「いらねえだろ!」

すると背後から忍者星人が襲いかかってきた

和泉はそれを軽々避けた

和泉はガンツソードを忍者星人に斬りつけた
その攻撃で忍者星人は真つ二つに斬られた

他のメンバーもだんだん忍者星人のスピードになれてきた

淳

「さつきの奴より速いけど、速いだけだな」

和泉達はその場の忍者星人を殲滅した

住宅街
ある街灯近辺

西城

「ん！？あれば？」

2人組のリーマンが走りながら逃げてきた

リーマンA

「なんだよ！あれ！ヤバいだろ！」

リーマンB

「速くしないとまたくるぞ！」

リーマン2人はなにかに怯えていた
するとリーマンの背後から馬に騎乗した、 よういむしや星人があら
われた

馬に騎乗したよろいむしや星人は、普通のよろいむしや星人とは雰
囲気が違い、右手に刀、左手に槍を持っており、馬も獰猛な野獸の
ように荒々しかつた

騎馬星人は右手の刀で、簡単にリーマン2人の首を跳ねた
騎馬星人はリーマン2人を倒すと西城の方を向いた

騎馬星人

「ぐー」おおおお

西城

「やる気満々だな！」

そういうと西城はガンツソードを構えた

第6話 新たな敵

騎馬星人は左手の槍を西城に突きつけた

キン

西城はそれをガンツソードで受け止めた

騎馬星人は続けざまに、右手の刀を斬りつけた

西城は受け止めた槍を即座に払いのけ、騎馬星人からの刀を避けた

ガチン

続けて騎馬星人の馬が噛みかかってきた

西城

「うおーー！」

西城は一瞬びっくりしたが、馬からの噛みつきを後ろに身を引いて避けた

すかさず騎馬星人は突進をしてきた

すると西城は突進してきた馬をスライディングして避けた

その動きに合わせて馬の足にガンツソードで斬りつけた

馬の足が斬り落ちると、その場に崩れ落ちた

騎馬星人は思わず地上に着地した

ヒュン

すると騎馬星人は刀を西城に投げつけた

キン

西城はそれをガンツソードで弾いた

騎馬星人は左手に持つていた槍を両手に持ち替えた
すると西城にするどい突きの一撃を突きつけた

西城はそれをガンツソードで受け止めた

ガツ

西城は騎馬星人の槍を押しのけた

騎馬星人にガンツソードを斬りつけた

西城の一太刀は騎馬星人の胸に斜めにあたつた

騎馬星人は後ろに少しよろめいた

続けざまに騎馬星人は西城に槍を突き立てた

西城はそれを避け騎馬星人の首を跳ねた

パチパチパチ

騎馬星人の首を跳ね
ると誰かが拍手する音が聞こえた

「いや～。すごいね君」

そこには西が知らない残りの2人がいた。

「あんた名前は？」

西城に問いかけた。

西城

「人に名前を聞くときはまず自分からだろ」

「そうだな。俺は永川 太郎」

「鈴木、鈴木 英二」

永川

「それであんたの名前は？」

西城

「西城 智也」

鈴木

「見てたぜ。あんたの戦ってる所 素人とは思えない動きだったな」

永川

「そりそり、こうズバズバって感じに倒しちゃてな」

そういうと永川は斬るマネをした。

西城

「なんか用か？」

西城は問い合わせた。

永川

「

「一緒に行動していいか?」

西城

「いいぜ。俺も聞きたいことがあるし」

ある住宅街

淳

「はあ~、俺たち今回まじめくらいでこーや

淳はタバコを吸いながら言つた

亮

「だりい~しな

進

「お前対して倒してねえだろ。ふ~」

進はタバコの煙を吐いた

亮

「はあ？てめえも対しておれとかわんねえだろー。」

進

「なんだとーー。」

淳

「お前ら静かにしろー。」

淳が言うと2人は静かになった

淳

「そういうことだから、あと任せたわ。和泉。」

和泉

「ああ

そう言って和泉がその場を立ち去ると、清水はそれを追った

清水

「いいのか？あいつら放つておいて。」

和泉

「いいんじゃね。俺たちは、俺たちの仕事をすればいい話だろ」

清水と和泉は話しながらレーダーにそつて歩いていた。

ある廃工事

和泉

「ついたぞ。」

2人は廃工場の前まで来ると、工場の扉の前で立ち止まつた

清水

「鍵がかかっている」

和泉

「任せろー。」

シウン

ズシャズシャズシャ

和泉はガンツソードを伸ばし扉を切り刻んだ。

清水

「やるねえ！」

和泉

「！」

すると工場の地面のから巨大な星人が姿をあらわした

第7話 将軍

ガガガガガガ

地面から大きなよろいむしゃ星人（将軍）が出てきた。

清水

「どうする？何でやる？」

和泉

「俺は刀で行く」

清水

「じゃあ俺も」

シウン
シウン

2人はガンツソードを伸ばした。

将軍は2人に気付いた

和泉は将軍に向かつて走りだすと、ガンツソードを斬りつけた

すると将軍は右手でガンツソードを受け止めた

そこにはかさず清水が将軍に飛びつくと、首目掛けてガンツソード

を斬りつけた

将軍は俊敏な動きで、それを避けた
同時に左手の平で清水を払い飛ばした。
清水は廃工場の壁に打ちつけられた。

清水

「ぐはあつ」

和泉

「なんてバカ力だ」

すると将軍はガンツソードをつかんだまま和泉を投げ飛ばした
和泉はそのまま廃工場の壁に打ちつけられた
将軍は腰につけていた長い刀を抜いた
和泉はガンツソードをさらに伸ばした

和泉

「ふううう」

和泉は深く深呼吸をすると再び将軍に向かって走り出した

キンキンキンキンキン

数秒間はげしい斬り合いになつた。

そこを清水は將軍の背後からガンツソードを斬りつけた
だがその前に將軍は左腕で清水を掴んだ
そして清水は將軍の左腕に捕まつてしまつた

清水

「ぐあああああ」

キュウウウ

清水はしばらくの間もがいたが、將軍の握力でスージが壊れてしまつた

和泉

「くそ～～～」

ガチャ

キュイイイイイン

ドン

誰かが將軍目掛けてZガンを打つた。

その攻撃は將軍にあたり、將軍は地面に強く叩きつけられた

その拍子に清水は將軍の左腕から解放された

「珍しいな～」

するとステルスマードを解除して何者かが近づいてきた
それは小富山徹男であった

小富山

「まさかお前がこんな手こずるとはな。な～。和泉」

和泉

「おひれご…ずしげ見てたのかよ」

小富山

「ずしげじゅねえよ。俺だつて今、来たばっかだよ」

すると將軍がゆっくり起き上がりはじめていた。

「じつひり無駄話してゐる場合ぢやないな

小富山

小富山は再びノガンを構えた。

キュイイイイイン

ンド

将軍は再び叩きつけられた

將軍

「ぐおおおおお」

将軍がうなつた

小富山

「らつこやつだな」

キュイイイイイン

ンド

ンド

将軍はなんども起き上がろうとした

小富山

「やあねえ～」

ゾン

小富山は弾びニガンを打った

だが一瞬のタイムラグをついて、將軍は右手で小富山を殴りつけた

小富山はとっさに避けたが、その拍子にニガンを落としてしまった

小富山

「へりゃー！」

將軍は小富山に襲いかかってきた
すでに將軍の鎧はボロボロであった

將軍

「ぐおおおおお」

將軍の強烈な右ストレートが炸裂した

ガン

廃工場の壁が一部吹き飛んだ

そのまま荒れ狂うように暴れ続けた

和泉は清水を抱えると、その場を一時離れた

小富山は将軍の荒れ狂つた、攻撃を避け続けた

將軍はZガンのダメージで背中が猫背になり、前傾姿勢をとった状態で暴れていた

すると小富山は将軍の腹に潜り込んだ

ホルスターからガンツソードを取り出した

シウン

瞬時に伸ばすと将軍の腹に思いつきり刺した
だが鎧に阻まれ少ししか刺さらなかつた

小富山

「うわやややや」

小富山はその刺さったガンツソードの柄を、おもいつきり殴った
その攻撃で将軍の鎧を貫通し、ガンツソードが突き刺さつた
その刺さったガンツソードをつかみそのまま斬り上げた。

すると将軍の上半身が真つ二つになつた

小富山はガンツソードについた血を払つた

小富山

「サレマリセヤガッテ」

小富山はタバコを取り出し火をつけた
すると和泉が小富山に近づいてきた

和泉

「やつたのか？」

小富山

「ああ。あの通りおねんねしてるぜ」

清水

「はあ。助かつたよ。おねん」

小富山

「よかつたな。俺がきてな

和泉

「ところでこいつボスか？」

小富山

「さあな。こいつが最後なら転送が始まつてもいいだろ」

清水

「まだみたいだな」

小富山

「和泉！レーダー見てみろ！」

和泉

「ああ。」

カシャン

和泉はコントローラーを開いた

和泉

「まだ一力所残つてるぞ」

清水
「ほんとか？」

和泉

「だけど近くに他の奴がいる」

小富山

「ボスじゃなきゃいいがな。まだ時間も残つてゐし、焦らず行くか」

清水

「そうだな。いざとなれば行けばいいしな。ここで少し休むか。和泉はどうする?」

和泉

「ああ……ただ涼子が近いかもしれない」

清水「カレンさんも一緒に死にはしないだろ」

和泉「だといいが……」

すると3人は地面に座り込んだ

第8話 姫

ある住宅街
閑静な通り

カレン

「あと何分残ってる?」

カレンは涼子に問いかけた

涼子

「あと40分くらいです」

カレン

「終わるまでなにしてる?」

話していると前方から馬車がやつってきた

涼子

「あれが…たぶん最後だと思います」

カレンはタバコを一本くわえ火をつけた

カレン

「涼子。下がつてな」

馬には騎馬星人が乗っていた

騎馬星人はカレン達に気づいた

騎馬星人は今にも襲つてきそうな様子だった

ガチャ

キュイイイイイイン

ドン

カレンはゴガンを打つた

騎馬星人は瞬く間にペシャンコになつた

カレン

「あたしめんどうくさいの嫌いなんだよね。」

カレンは面倒くさがりに言った

カレン

「涼子。これ持つてて。あとそれ貸して。」

カレンは涼子にXショットガンを渡した
そして涼子の持っていた、Xショットガンを借りた。

タタタ

カレンは軽快に馬車に歩み寄った
カレンは馬車の垂れ幕をまくつた
中には姫の着物を着た女がいた
カレンはそれを見た瞬間、Xショットガンを構えた。

ギョーンギョーンギョーンギョーンギョーンギョーンギョーン

カレンはXショットガンを打ちまくつた

カレンは打ち終わると、馬車を降り涼子の方へ悠然と歩いて行った

ボンボンボンボンボンボンボン

しばらくして×ショットガンのタイムラグがきた

カレン

「あれで死んだでしょ。」

カレンは涼子に言った

ガシャン

馬車が壊れる音がした
中から姫が出てきた

姫の着ていた着物はボロボロで半分全裸になっていた

姫

「ふふふふふふふふふふ

姫は不気味に笑っていた

姫

「わらわをいろこじみる」

そつと歩いて歩み寄ってきた

カレン

「涼子。離れて！」

カレンは再びメシヨットガンを構えた。

ギヨーンギヨーンギヨーン

60

タイムラグに合わせて、姫にメシヨットガンが被弾した
だが姫は体の内部にダメージを吸収してしまった

カレン

「ちッ。ついてないわね」

姫

「ふふふ つきわわらわのばんぢや」

そう言って姫の爪が刀並に伸びた。

カレンの吸っていたタバコの灰が地面に落ちた

第9話 ガンツバイク

姫の伸びた爪の数は両手合わせて10本

姫は左手を軽く振った

近くにあつたコンクリートの壁が、きれいに斬れた
カレンはすでに臨戦態勢をとっていた

斬れたコンクリートの壁が地面に落ちた瞬間、凄まじい速さで姫は
カレンに急接近した

気づくと姫は、カレンの顔の真ん前まで顔を近づけていた
姫は右手をひとふりした

カレンはとっさに身を引いた

あたりに切れたカレンの赤い髪が少し舞つた

カレン

「ツ」

姫

「ふふふ」

すると姫はカレンに襲いかかつた

激しい猛攻の中、カレンは攻撃に対応して、避けるのが精一杯であ
つた

ギヨーン

カレンは避けている中、×ショットガンで反撃した
姫はそれを軽々避けた
避けてからも姫の攻撃が、やむことがなかつた

カレン
「くッ」

それでもカレンは姫の猛攻を避け続けていた
カレンは、とっさに×ショットガンを地面に構えた

ギョーン

ギョーン

ギョーン

猛攻を避けつつ×ショットガンを3発地面に打つた。

ボン

ボン

ボン

しばらくしてタイムラグがきて、地面が爆発した
あたりにコンクリート片が飛ぶと、姫が怯んだ
それを見るやカレンは反転し、涼子の元へ向かつた

カレン「涼子！」

カレンが涼子を呼んだ

涼子は反応しカレンの行動を察すると、エガンを渡そうとした
その瞬間、姫はその場から飛び上がった
飛びながらカレンに右爪を斬りつけた

カレン「！」

カレンはとっさにそれに反応した
その攻撃は、カレンの持っていたエショットガンにあたつた
その拍子にエショットガンを手放してしまった
続けざまに姫は右足を蹴り上げた

涼子「きやあ！」

涼子の持つている「ガン」を弾き飛ばした

姫

「ふふふ、ふふふ」

姫は不適に笑みを浮かべていた

ヒュイィイイイン

するとどこからか、何らかのエンジン音が聞こえてきた

姫の後ろからガンツバイクが現れた

姫はそれにとっさ気づいた

ガンツバイクは姫に体当たりをした

姫はそのまま引き飛ばされた

姫は5~6メートル先まで吹き飛ばされた

すると運転席から誰かが降りてきた

それは西城であった

そして後部席からは永川が降りてきた。

数分前
ある住宅街

西城

「あと10分かかる」

西城は「ノットローラーのレーダーを見ながら言った

鈴木

「10分からだと10分の方が近いね」

鈴木が西城の「ノットローラーを、のぞき込んで言った

永川

「移動するならいいものあるぜ」

西城

「いいもの?」

永川

「10分先においてあるからそれで行くか」

やうしてしづらへ歩くと、あるものの前にきた

それはガンツバイクだった

西城 「どうしてあつた? どうやって持ってきた?」

永川 「秘密」

西城は運転席に座つてみた

西城 「運転していいか?」

永川 「できるの? まあ簡単だからいいけど」

鈴木

「それ2人乗りだろ?俺、走つてくから先に行つてろよ」

西城

「いいのか。じゃあ行くか」

西城はガンツバイクを走らせ、目的地に向かった

ある住宅街
閑静な通り

西城はガンツバイクから降りるとガンツソードを取り出した

シウン

西城

「大丈夫か？」

西城はガンツソードをのばすと、カレンに問いかけた

カレン

「ええ…助かったわ」

西城はゆっくりと姫に歩み寄つて行つた

第10話 狂い姫

姫は吹っ飛ばされた場所から起き上がった

タタタタタタ

西城は、姫が起きあがるのを確認すると走り出した
そして姫に向かって、ガンツソードを斬りつけた
姫はそれにとつさに反応し、右手の爪で受け止めた
すると左手の爪を西城に斬りつけた

西城はそれをしゃがんで避けた

すぐさま立ちあがると、姫にガンツソードを斬りつけた
すると姫の左腕が斬られ宙を舞つた
姫は動じずに、右手の爪を斬りつけた

西城はそれを避けると、ガンツソードを右手に片手でもつと、姫の
左足を斬り落とした
そして姫を左手でおもいつきり殴り飛ばした

永川

「やるね~」

カレン

「やるわね。あの子。今回が始めてなのに、やけになれてるわね」

すると姫が起き上がつた

右手の爪を縮めると、近くに落ちていた自分の右足を拾うと、切り口にくつつけた

立ち上がると、近くの左手を右足の時と、同じようにくつつけた

姫
「ふふ。はは。」

いきなり笑い始めると踊り始めた
しばらく踊っていたが急に立ち止まつた

姫
「わぐじょへへ」

今まで高かつた声が、いきなり図太くなり、顔も今まで落ち着いた
顔だったのが、鬼のような顔になつていて

姫はその場を飛び上がつた

すると永川の真ん前に着地した

顔からは考えられないくらい、口を大きくあけると、歯が牙のよう
に鋭利になつた

すると永川の頭を噛みちぎつた
永川の亡骸はゆっくり倒れ込んだ

姫

「ふつつ」

噛みちぎった永川の頭を吐き出した

姫の顔が再び元に戻った

姫は右手で口についた血を拭つた

姫
「ふふ」

不適に笑い西城の方を見た

姫
「はあああ」

同じように口を開くと、西城に襲いかかつた
それはあまりに速く、西城も反応があくれた
だが姫の口をどうにかガンツソードで受け止めた
西城は近くの壁に押しつけられた

西城
「くッ。ツ」

姫

「がああああ」

涼子

「カレンさん！」

涼子は飛ばされた乙ガソを拾いにいった
そして乙ガソをカレンに向かつて投げた

カレン

「ありがとっう。涼子」

カレンは乙ガソをキャッチすると構えた

カレン

「そいつから離れて！」

カレンは西城に言った

西城

「ツーべツー」

西城はガンツソードをはずすと、すぐさま姫の足の間からその場を
離脱した

キュイイイイイイ

ドン

カレンが西城が離脱するのを確認するとスガソを打つた
姫はその場に崩れ落ちるようになり、打ちつけられた

姫
「う、おおお」

姫はかなり荒れ狂っていた
そしてその場から起きあがめりとした

カレン

「なかなかタフね」

キュイイイイ

ドン

ドン

姫は再び打ちつけられる間に、長い髪をカレンの足に絡みつけた

カレン「さやあ！」

絡みついた髪でカレンを逆さ吊りにした

姫は口から強力な酸を、髪もろともカレンにかけよつとした
西城はとっさにこれに気づいた

すると絡みついた髪を斬ると、カレンを抱えて強力な酸を避けた
カレンを下ろすと西城は姫に向かって歩き出した

姫は両爪を再び伸ばした

すると西城に襲いかかってきた

西城は綺麗に避けると、ガンツソードを下から斬り上げた
姫の両腕が斬れた

腕が宙を舞う間に西城は姫の首を斬り飛ばした

姫の体は力なくその場に倒れた

西城

「はあ…はあ」

涼子

「すゞい」

カレン

「……」

すると西城は2人に近づいてきた

カレン

「あなた名前なんて言うの？」

西城

「西城智也」

カレン

「私は斎藤カレン、こっちが涼子」

西城

「知ってる。西から聞いた」

カレンが言つたら涼子は軽く西城にお辞儀した

カレン

「西ー?嘘でしょ?あいつそんな事する子じゃないよ」

カレンは驚いた感じに言つた

涼子

「西城…さんでしたっけ？ほんと助かりました」

涼子はお礼を言った

西城

「いや…ありがどわ」

西城は照れながら頭を下げた

カレン

「今のがボスみたいだけど。転送始まるかしら」

第11話 若

鈴木
「おおーい」

遠くから鈴木が走つてやってきた

西城

「遅かつたな」

鈴木

「あれ？ 永川は」

西城

「それが……」

西城が言つた瞬間鈴木は近くにある永川の亡骸を見つけた。

鈴木
「そんな。 永川」

カレン

「人の心配より自分達が生き残る事を考えな」

涼子

「まだ転送が始まらないの」

カレン

「まだどこかのところのかしら」

カレンはそう言ってレーダーを見た

レーダーにはターゲットの位置は1カ所しかなかった。

そのターゲットの位置は、今いるカレン達がいる位置だった

カレン

「あれ？壊れてるのかしら？」

?

「ほん、やあああああ」

姫の腹が破れ、赤子が出てきた
それにカレン達は気づいた

鈴木

「なんだ！赤ん坊じやないか」

鈴木は不用意に赤子に近づいた
そして赤子を抱きかかえた

西城

「今すぐそいつを離すんだ！」

鈴木

「何をそんなあわてて」

鈴木が話している途中に、赤子は鈴木の頭を丸かじりにした
鈴木は瞬く間に全身を食べられてしまった
赤子（若）は鈴木を食べて少年の姿になつた
するとカレン達へ歩み寄ってきた
カレンと西城は臨戦態勢を取つた

カレン「！」

西城「！？」

だが若是カレンと西城の横を素通りした
そして騎馬星人の亡骸に近づいていった
亡骸の前に来るにしゃがみ込んだ

グシャムシャグシャ

騎馬星人の「骸」を食べ始めた

涼子

「ううッ」

涼子はそのあまりにおぞましい光景に口を抑えた

カレン

「大丈夫?」

カレンは涼子に心配そうに言った

涼子

「大丈夫…です」

その間に、西城は若に向かつて走り出した

シウン

ガンツソードを伸ばすと若に斬りかかった

若はその場を飛び上がりそれを避けた

若は騎馬星人を食べたせいか長身の青年になっていた

西城は若が着地したと、同時に再び斬りつけた

若はそれを避けなかつた

すると近くに落ちていた騎馬星人の槍を足で蹴り上げた
両手で持つとガンツソードをを受け止めた

つばぜり合いになると、西城は槍を押し上げた

そしてガンツソードを斬りつけた

若はそれを軽く避けた

カレン

「邪魔よー。」

西城はとつたに若から距離をとつた

キュイイイイイン

ドン

カレンは西城が離れた瞬間に乙ガンを打つた
だが打つた場所に若はいなかつた

西城

「あぶない……」

カレン

「えつ……？」

若は避けたと同時にカレンの背後に着地していた
そしてカレンに向けて槍を一振りした
カレンは西城の声に反応すると、とっさに避けた
続けざまに若は右腕でカレンに殴りかかった
カレンはとっさに両手でガードした
だがガードと吹つ飛ばされた

ギヨーン

バン

近くにいた涼子が若に向けてXガンを打った
その攻撃で若の背中の肉片が少し飛んだ
若はすました顔で涼子に近づいていった
涼子は続けてXガンを打とうとしたが、その前に若に首を捕まれて
しまった

涼子

「ツー、ツツツー……」

そこを西城が背後からガンツソードを斬りつけた

若是それを軽く避けると、西城のガンツソードを持っている手を蹴り上げた

西城はガンツソードを弾き飛ばされた

だが怯まずに両手で右腕につかみかかった

チュイイン

スーツのパワーを全開にだと右腕をへし折った

すると涼子が若の右腕から解放され、その場に倒れ込んだ

キュウウウウン

同時に涼子のスーツが破壊された

若是左腕で西城を殴り飛ばした

西城はとっさにガードすると吹き飛ばされた

若

「ふふ…」

するとおられた右腕を左腕でもとに戻すと、おられた右腕が完治しますと若是おもむりこじこじに向かって歩き出した

第1-2話 若撃破!?

住宅街

ある自動販売機前

進

「おやくなー?」

進は自動販売機で缶コーラーを買いながら言った

淳

「まだ手にすつてんだろ。亮ー。レーダー見てみる」

亮

「ああ」

亮はそいついでコントローラーを開くとレーダーを見た

亮
「あと一体。ここから近いぞ」

それを聞いて淳が立ち上がった

淳は亮のコントローラーを覗き込んだ

淳

「これマズくね!?

亮

「あ…あ…

進

「ちゅうと俺にも見せてくれ!..」

進も亮のコントローラーを覗いた

進

「近いことづか

亮

「俺たちの後ろから来てる

すると後方からターゲットが近づいてきた
それは若だった

進

「マズくねーあれ！」

亮

「ヤバい…な

進

「でもやっちゃん

淳「やっちゃんですか…」

亮、進「おうー..」

すると3人はステルスマードになった

住宅街

姫、戦闘跡地

西城

「いッ…なんつづばか力だよーあいつー

そう言つて西城は起き上がつた
西城は歩き出すと涼子に近づいた

西城

「大丈夫か？」

涼子

「ええ…なんとか」

西城

「手かそうちか？」

そう言つてカレンに手を差し伸べた

カレン

「ええ…ありがと」

そう言つて西城の手をつかんで起き上がつた
そして涼子の方へ2人は歩いていった

カレン

「奴はどいつへ..」

涼子

「どいつかいつちゃいました..あは..」

やつまつて涼子は頭に手をあてた

カレン「逃げたのかしら?..」

西城「わからんねえ..他に目的があるんじゃないかな?..」

カレン「目的?..」

西城「奴は補食行為から形態を変化するみたいだし」

カレン「じゃあ、補食対象を探しに行つたって事?..」

西城「かもな」

カレン（心の声）「すごい洞察力ね。私にもそれは読みとれたけど、

「この子の場合今回が初めてなのに、素人とは思えないくらい冷静ね
…完全に戦闘になれるわね」

涼子「じゃあ、なぜ私たちは補食されなかつたのかな？」

カレン「これは私の推測だけど、最初鈴木って子が補食された時、赤子から少年に変化した。そこから今度は星人の亡骸を食べて大きく成長した。この意味わかるかしら？」

西城「つまり同族の肉を食べると、飛躍的成長を遂げるのか」

カレン「そう！私の読みではそれが有力だと思うのね」

西城「てことは」

涼子「より成長するために、同族の肉を探しに行つたつてこと？？」

カレン「たぶんね」

西城「それなら俺たちを見逃しだのも納得がいく」

するとカレンは近くに横たわったガンツバイクを起しした

涼子

「どうするですか？」

カレン

「決まってるじゃない。今の内に倒して行くのよ」

涼子

「そんなむちやですよ」

カレン

「やられっぱなしさやなの」

そう言つてガンツバイクに乗つた

カレン

「あなたも行く？」

西城

「ああ。俺もやられっぱなしさやだから」

カレン

「それなら後ろ乗りなよ」

涼子

「それなら私も」

涼子がそう言つた瞬間カレンは涼子の手をつかんだ

カレン

「これじゃあ死に行くようなもんよ。ここに残りなさい」

カレンは涼子を説得した

涼子

「わかつた…カレンさん…」

カレン

「なに?」

涼子

「死なないで…」

カレン

「ええ。 ありがとう…」

ポン

カレンは涼子の頭を軽く触った

カレン「行くよ」

ヒュイィイイン

するとガンツバイクが動き始めた
走り出すと西城がカレンに問いかけた

西城

「いい子だな」

カレン

「ええ。 和泉にはもつたといないわね」

住宅街

ある自販機前

タツ

タツ

タツ

若「！」

若はなにかの気配を感じた

その間3人は、メシヨットガンを若に向けた

ギョーン

ギョーン

ギヨーン

ボン

ボンボン

それは若の背中に被弾した
あたりに若の肉片が飛んだ
若はあたりを見渡したが、なにもいなかつた

若「！－！」

ギヨーン

若は気配を感じると、Xショットガンの攻撃を避けた

ギヨーン
ギヨーン
ギヨーン

3人はステルスマードのままXショットガンを打つた

若は神経を尖らせ、それを避け続けた

ザッ

すると淳が若の背後に回り込んだ

シウン

ホルスターからガンツソードを取り出し伸ばした
淳は若にガンツソードを横に斬りつけた

若は腰から綺麗に斬られたが、かるうじて腹の皮一枚で、上半身と
下半身がくつづいていた
若の体はその場に崩れ落ちた

淳

「終わったか」

淳は加えていたタバコを取ると、煙を吐いた

第13話 懇願

進 「決まつたな」

淳 「「」のあと飲みやな」

進 「いいねえ～」

亮 「兄貴のお「」りだろ？」

淳 「そこはワリカンだろ。甘えんな」

亮 「ケチ」

進 「ケチ兄貴」

淳 「うるせえー。」

3人が話してること若が立ち上がった
上半身と下半身は薄皮一枚でギリギリつながっていた

淳

「マジかよー。」

淳はくわえていたタバコを思わず落としてしまった
すると若の上半身が起き上がり、斬られた箇所がくつついた

若

「ユダんシタ

淳は持っていたガンツソードをホルスターにしました
そしてメショットガンに持ち替えた

淳

「打ちまくれ

ギョーンギョーンギョーンギョーンギョーンギョーンギョーンギョーン

3人はXショットガンを構えると、若に向かって打ちまくつた

それを若は凄まじい速さで避けた

避けながら若は左手の小指を右手で引っ張り抜くと爪が伸びた（爪刀）
若は飛び上ると3人の真ん中に着地した

3人は取り囲む形でXショットガンを構えた

3人は同士討ちを恐れ躊躇していた

若
「フフフフ」

若はそれを予期しているのか、余裕の表情を浮かべていた

進
「くっそ！なめやがって」

そう言つてゐる間に、若は右手に持つてゐる爪刀で進の両腕を斬り飛ばした

進

「いッ！」

淳はXショットガンを投げ捨てる、ホルスターからガンツソードを取り出した

ギヨーンギヨーン

その間に亮は×ショットガンを打つた

シュン

淳はガンツソードを伸ばした

若は亮の攻撃を避けると右手の爪刀で亮の両脚を斬りとばした
淳はガンツソードを若に斬りつけた

それを若は爪刀で弾いた

すると左手の人差し指を淳に向けた

淳「ぐッ！」

爪を伸ばすと淳の左肩を貫いた

貫くと若は爪を元に戻した

淳は左肩を抑えながらその場に倒れ込んだ

若は右手の爪刀（左手の小指）を左手に戻した

若は淳の首を右手で持ち上げた

淳

「ぐッ…たのむ」

淳はかすれた声で言った

「若
？」

淳

「たのむ……せめて弟たちには見逃してくれ

「ホウ
若

若はいきなり左手の爪を伸ばした
そして淳の右足を刺した

淳

「べッああ

若は右手を淳の首からはなした

「フフン
若

すると若はその場を去つていった

第1-4話 終盤戦（前書き）

「ハハハん評価ありがとうござります。少しずつ更新していくでこれからもよろしくお願いします。

第14話 終盤戦

ショイイイイイ

カレンのガンツバイクは若にいる方向へ向かつっていた

カレン

「ん！？」

カレンの前方に倒れている3人がいた
それは相川兄弟だった

カレンは相川兄弟の近くにガンツバイクを止めた
西城とカレンはガンツバイクから下りた

カレン

「あんた達、どうしたの？」

そこにはその場に倒れ込む相川兄弟がいた

淳

「ボスに…やられた」

淳は少しかすれた声で言つた

淳

「カレン……頼みがある……弟達をたすけてくれ……あのままじゃ死んじまつ」

カレン

「淳。あなたも止血しないとヤバいわよ」

淳

「頼む……弟を……」

カレン

「わかつた」

そう言つとカレンが弟たちの止血を始めた

西城

「止血しても助からないだろ！腕とか足を斬られてる。助かつても腕と足がないと普通の生活はできないだろ」

カレン

「……。ちょっと黙つてー。」

西城「……」

カレンは相川兄弟を止血し終えると立ち上がった

カレン「簡単に言つわよ。これはゲームでゲームをクリアすると、元の姿に戻れる。意味わかつた」

西城

「それは敵をすべて倒せば、5体満足で帰れる…のか??」

カレン「正解。頭いいわね」

カレンは緊張した顔からふつと笑顔になつた

西城「西のやつ。黙つてたのか」

カレン

「あの子。意地が悪いから肝心な」とは教えないのよ

住宅街

ある廃工場

和泉

「まだか?」

小富山

「手にぎゅうってんな

清水

「じゃあいくか?」

すると清水が立ち上がった

小富山

「まあ待て。ターゲットは今どこよ?」

小富山は清水に聞いた

清水はコントローラーを出すとレーダーを見た

清水

「おー!」

和泉

若は廃工場にたどり着いた

タ タ タ タ

そつまうじと小富山と和泉は立ち上がった

「マジか?」

「こいつに来てるぜ!」

和泉
「どうしたー?」

清水

「ヤバそうだな

清水「俺はキツいから離れてるわ

清水はその場を少し離れた

小富山

「はあ……やるか！――！」

小富山はノガンを持った

シュン

すると和泉はガンツソードを伸ばした

第15話 ノガン炸裂

若の両腕には忍者星人の亡骸を持つていた

和泉「あれは俺たちが倒した…」

若「……」

小富山「何する気だ？？」

グシャグシャグシャグシャ

すると忍者星人を捕食した

小富山「わあああ

和泉「キツいな

若は2体の捕食によつて全裸だつた体に鎧をまとい、腰には長刀と脇差しが現れた

和泉「……」

小富山「これはまたまたヤバそつだな」

若はゆりくつと和泉と小富山に歩み寄つてきた

和泉「俺が隙を作る。おっさん頼んだぜ」

和泉は小富山に田で合図した

小富山「おう

和泉は若に近づくと飛び上がつた

ヒュン

和泉は若に向かってガンツソードを思いつき振りきつた

若はそれを軽く避けた

ガツ

すると若は長刀の柄に手をかけた

和泉「かツ！あ！」

和泉はとっさにガンツソードを構えた

シユツ

カーン

若は腰にある長刀を和泉に斬りつけた
それはガンツソードにあたり和泉は被弾を免れた
だがガンツソードは弾き飛ばされた

和泉「ぐツ」

和泉はすぐさま距離をとった

キュイイイイン

すると小富山がノガンのトリガーを引いた

ドン

若はそれを簡単に避けた

その間に和泉はガンツソードを拾つた

避けると若は長刀を鞘にしまった

キュイイイイン

するとノガンのチャージ音がなつた

それは清水によるものだった

ドン

だが若はそれを簡単に避けた

すると和泉はガンツソードをさらに長くのばした
和泉はしゃがむとガンツソードを思いつきり振り切つた
若はそれを飛んで避けた

和泉「空中なら避けられないだろ！」

キュイイイイン

小富山はノガンのトリガーを引いた

小富山「つぶれな」

ドン

若はノガンの攻撃で地面にたたきつけられた

キュイイイイン

すると清水がノガンのトリガーを引いた

ドン

再び若は地面にたたきつけられた

キュイイイイン

キュイイイイン

和泉はガンツソードからノガンに持ち替えた
和泉と小富山はノガンのトリガーを引いた

ドン

ドン

再び若は地面にたたきつけられた

第16話 若武者

カレン
「じゃあ、それから行こうか」

西城
「ああ」

そつとカレンはガソリンバイクに乗り込んだ

西城
「あなたは残るんだ」

西城はガソリンバイクに乗り込んだカレンの肩を掴んだ

カレン
「えッー！」

西城
「これは俺が乗つてく

カレン

「あんたじゃ無理よ」

西城

「俺は大丈夫だから…」

カレン

「もしかしてあたしが死ぬと思ってんの？ははは、舐めないでよ！…あたしは何回も死線をくぐってきた…ただじゃ死なないわよ」

西城

「死なない保証はないだろ」

カレン

「じゃあ。ここで少し待つてあげる。時間がかかるようなら私も行くわ。いいわね」

西城

「ああ。それまでには終わらせる」

そう言つてガンツバイクに乗つた
その間にその場に落ちていたXショットガンを拾つた
そして西城はガンツバイクで若のもとへ向かつた

あるとカレンはゼロに向かって歩を出した

淳

「カレン。どこに行くんだ？」

カレン

「回り込んでくの」

住宅街
ある廃工場

キュイイイイイイン

キュイイイイイイン

ドン

ドン

和泉と小富山のゾガンが若に炸裂した
そして若は地面に叩きつけられた
若はどうにかゾガンの呪縛から逃げだそうとした

キュイイイイイイ

ドン

すかさず清水がゾガンを打つた

3人は交互にゾガンを打ち若を逃がさない

小富山

「なかなかやるじゃん」

再び小富山はゾガンのトリガーを引いた

キュイイイイイイ

キュイイイイイイン

ドン

ドン

若はだんだんニガンになれてきたのか少し動きがよくなつてきた

若

「カツカツカツカツ」

若は不適に笑い始めた

清水

「おい！やばくね！」

小富山

「いいから打ち続ける」

その隙に若は腰にある長刀と脇差しに手をかけた

スパー——ン

凄まじい速さで2本を抜いた
そして清水の両腕、両脚を斬り飛ばした

小富山

「ちッ！離れるぞ！」

小富山は和泉に言った

和泉

「ああ」

和泉はZガンを構えながら両腕両脚のない清水を抱えた

キュイイイイイイン

キュイイイイイイン

ドン

ドン

2人の攻撃を若は避けた

その間に2人はその場を飛び、若から距離を取つた
距離をとると和泉は清水の両腕両脚を急いで止血した

キュイイイイイイン

ドン

その間に小宮山はノガンを打つた
若はそれを簡単に避けた
すると若の両腕が刀と同化をした
腕が鞭のような形状になった
若の鎧はノガンのせいでボロボロだった

若

「コロス！－！」

若は鬼の形相で和泉たちを見た

第17話 狙撃

シユパパパパパパパパ

若は刀と同化した鞭のよつな腕（鞭腕）を無差別にしならせ始めた

小富山

「はええ～なー」「いや

若は小富山の方へ顔を向けた

ザツ

すると凄まじい速さで小富山の背後に移動した

シユ

若は小富山に向けて鞭腕を伸ばした

小富山
「痛ツ」

若の鞭腕は小富山の右肩を貫いた

その間に小富山は右腕のノガンを落としてしまった
すると小富山は怯むことなく、ホルスターからガンツソードを左手
で取り出した

シユン

とつやに伸ばすと若に振り回されまにガンツソードを斬りつけた

ザツ

だが若はそれを避け、再び小富山の背後に回り込んだ

シユパパパ

そして小富山に鞭腕をしなりらせながら斬りつけた

小富山は避けようとしたが、鞭の予想だにしない動きに避けられなかつた

小富山は両脚を斬られてしまった

小富山が地面に横たわると同時に、若の背後から和泉が両手でガンツソードを斬りつけた

若は簡単に避けると和泉の背後に回り込んだ

シユパパパパ

若は鞭腕を和泉に斬りつけた

和泉はとっさにガンツソードを構えた
偶然にもガンツソードにあたり致命傷は防いだが左手の小指、薬指、
中指が斬り飛ばされた

その鞭の腕の攻撃を受け止めた衝撃で遠くに飛ばされた

和泉

「ぐはあッ」

和泉は地面に叩きつけられた

そこを若は猛追した

シユイイイイイン

するとガンツバイクが現れた

それに乗っていたのは西城だった

ギヨーンギヨーンギヨーンギヨーンギヨーンギヨーン

若の姿を見ると西城は×ショットガンを打ちつけた
若はとつさに猛追をやめ、その場を退きそれを避けた
そして、ガンツバイクは若を通り過ぎ、工場の敷地内を旋回した
そして、若の方へ真正面に走つていった
ガンツバイクが若に近づくと、若是右手の鞭腕を地面に叩きつけた
その衝撃で、ガンツバイクは転げ回つた
だが、ガンツバイクに西城の姿はなかつた
西城は、ガンツバイクから飛び出ると、×ショットガンを構えた

ギョーンギョーンギョーンギョーン

それは、若に被弾したがダメージが吸収されてしまった
西城は、その場に着地した
着地すると、西城は×ショットガンを投げ捨て、ホルスターのガンツ
ソードを出した

シウン

和泉

「あいつは西と一緒にいた……」

若

「ギザマ~~~~~」

すると若が狂い始めた
両腕の鞭腕を無差別にしならせ、西城に攻撃し始めた
西城はそれを避け始めた
しばらくその攻撃を避け続け、若の隙を伺っていた

和泉

「なんだ。あいつあの攻撃を避け続けてやがる」

西城は隙を見つけるとガンツソードを両手斬りつけた
だが若の鞭腕に弾かれた

西城「ちッ！」

ギョーンギョーンギョーンギョーンギョーンギョーンギョーン

するとじどりから×ショットガンを打つ音がした

ポンポンポン

それは若にあたつた
そして若是最初のダメージは吸収したが、途中から吸収しきれず若
の体の一部が弾け飛んだ

ギョーンギョーンギョーンギョーンギョーン

すかさず何者かのXショットガンの攻撃が続いた

ボンボンボンボンボン

若にその攻撃があたると、若の左手が吹き飛んだ
若是その場に倒れ込んだ
西城は周りを模索した
そして西城は工場の屋根を見上げた

西城
「カレン」

その攻撃はカレンによるものだった

第17話 狙撃（後書き）

感想があつたらください。参考にわせてもらっています

第18話 若撃破！？

ギョーンギョーンギョーンギョーン

カレンは休む事なく×ショットガンを打ち続けた

ボンボンボンボン

それは若に命中した

ダメージを受けるたびにどんどん若の体が小さくなつていった

小富山

「遠距離でカレンに勝てる奴はない」

小富山が両脚を止血しながらボソッと言つた

若

「アーチャー・デビル・オル」

ギョーンギョーンギョーンギョーン

ボンボンボンボン

カレンの攻撃は再び若にあたった
若はダメージを受けすぎて少年の姿に戻ってしまった

若

「キエニエニエニエニエニエニエ」

若の顔がいきなり大きくなり目が激しく光った

西城

「くつ」

その光で若を見失つてしまつた

西城

「どこ行つた！？」

西城はあたりを見渡したが若の姿はなかつた

廃工場
屋根

カレン

「遠くにはいってないはず」

ガシャーーン

しばらくすると工場の屋根の一部が壊れた
そこには巨大な顔が出てきた

「ココニイタカ」

それは将軍を捕食し、巨大化した若だつた

カレン

「えつ！」

若是屋根の下からカレンに右腕を殴り上げた
カレンはその突然の攻撃に対応できなかつた
カレンは空高く舞い上がつた

すかさず若は右手を平手にし、宙に舞つたカレンに叩きつけた
落下するカレンを西城が両手で受け止めた

キュウウウ

カレンのスーツは若の攻撃で破壊された

西城

「カレン！カレン！」

カレンは若の攻撃で気絶していた

西城

「カレンを見ていてくれ」

小富山にいと近くに優しく置いた

小富山

「ああ。任せとけ」

ガシャーーン

若が工場を破壊しながら進行してきた
若は15メートルくらいの大きさになっていた

小富山

「お前、あいつとやるきか?」

西城

「ああ。俺以外まともに戦える奴はないだろ」

和泉

「俺がいる」

和泉は西城に歩み寄つてきた

西城

「お前。その手でやれるのか」

和泉

「ああ。任せろ」

そう言つて和泉は右手にガンツソードを持った
その間に若はこちらに近づいていた
若は右手を振り上げた

西城

「来るゾー。」

西城はとっさに小畠山とカレンを抱えてその場を飛んだ

ガン

和泉もその場を飛ぶと若の右腕が地面に炸裂した
和泉は着地すると若に向かっていった

若是和泉をとっさに左手で払いのけようとした
和泉は左手を避けると、若の足元へ潜り込んだ
そしてガンツソードをとっせに口に加えた

チュイイイン

和泉はスースのパワーをあげると、右腕を振りかぶった

ガン

和泉は思いつきり若の右足を殴りつけた
そして両手で右足を抱え込むと、激しく締め付け始めた

和泉

「う、おおおあ

メキメキメキ

若の右足がきしむ音がした

若は右手で和泉を払いのけようとした

和泉はそれにとっさに気づき、若の背後に退いた

西城はその間に小富山とカレンを離れた場所へ置いた

和泉は加えたガンツソードを右手に持ち、若の背中に斬りつけた

若の背中に切り傷がついたがすぐに修復してしまった

その間に与えた右足のダメージも修復してしまった

和泉

「もっと大きなダメージを与えない？」

そこへ西城がかけつけた

すると若は右手を西城へ叩きつけた

だが西城はそれを飛んで避けた

その間に若の右手に乗った

そして若の頭に向かって右腕を駆け上った

右腕の半分くらいに差し掛かると、若は左腕で西城を払いのけようとした

チュイイイン

だが西城は足のスースのパワーをあげると、思いつきり飛び上がりそれを避けた
そのまま若の頭めがけて飛ぶと、ホルスターからガンツソードを取り出した

シウン

刀身を通常以上に伸ばすとガンツソードを振りかぶった
すると若の髪の毛が無数の腕に変化した
そして西城を掴み取ろうとした
西城は空中で避けることができなかつた

西城

「やべ…！」

ガツ

すると西城は後ろから何者かに掴まれた
そのまま後ろに引っ張られ、手から回避できた

西城

「？？」

西城は空中を落ちていく間に、その何者かの姿を見た

それは和泉だった

和泉は左腕に乙ガンを抱えていた

和泉は西城を助けた間に手に巻き込まれ始めた

若の無数の腕が和泉の足に絡まる間に、乙ガンを右手に持ちかえた

キュイイイイイイン

和泉「くたばれ！」

ドン

若にあたると顔が少し潰れた

その間に和泉は無数の腕にドンドン引きずり込まれていった

キュイイイイイイン

ドン

和泉は休まず打ち続けた
その間若の動きが止まっていた

和泉
「今だ！やれ！！」

西城は地面に着地すると再び高く飛んだ
そして再び若の顔の前でガンツソードを振りかぶった

ズバーン

その攻撃が首に直撃すると、頭が地面に落ちた
西城は着地すると落ちた頭に向かつた
すると頭と一緒に和泉が倒れていた

西城

「大丈夫か！？」

西城が和泉に近づくと和泉はぐつたりしていた
西城はすぐに和泉の脈を調べた

西城
「死んでる」

第19話 最終戦

和泉は無数の腕に締め付けられて死んでいた

「終わつたか」

何者かの声がした

バチバチ

それは西だつた

西はステルスマードを解除した

西

「まさか、和泉がやられるとはな」

西城

「お前…いたのか？」

西

「ああ。お前がここについた時にな

西城

「いたなら戦えよー！」

西

「冗談！ボス相手じゃリスク高すぎ」

カレン

「西はいつもそんな感じだから気にしないの」

カレンは田覚めると西城に歩み寄つてきた

カレン

「転送。まだかしら……？」

西城

「転送？」

西

「元の部屋に戻るんだよ。最初きた時みたいに」

ガバッ

すると若の切斷された頭の口が開いた
口の中から青年の姿の若が出てきた

西城

「！？」

カレン「……」

西「やば……」

西はすぐさまステルスマードになつた

カレン「やれやれ？？」

西城「ああ……俺がしとめる」

カレン「手伝つてあげたいけどこれじゃね……」

カレンはスースが壊れているのを見て言つた

西城「いいから離れてな」

カレン「じゃあお皿葉に甘えて」

カレンはその場から距離をとつた

シヨン

西城はガンツソードの伸ばした
若は西城にゅうくづ歩みよつてきた

若「キサマ…ハコルサンダ」

西城「はながらそんな氣ねえよ」

若「ガアー！」

すると若の右腕が急激に伸びた
右腕は西城目掛けて向かつてきた
西城はそれを避けた

ダダダ

若はその場を走り出した

その間に西城は右腕のガンツソードで、右腕を斬り飛ばした
若は急激に西城と距離をつめると左腕を伸ばした

ガシツ

西城は右腕を掴まれた

西城「！…！」

若は距離をつめると右足を蹴り上げた

西城はとっさに左腕でガードした

若「ハツ！…！」

すると斬られた右腕を西城の首に巻き付けた

ググツグ

若は思い切り首を絞めると西城を持ち上げた

西城「ツ……ぐあ……」

西城は巻きついた腕を左腕で掴んだ

チユイイイン

西城のスースが呼応すると左腕に力を込めた

ググツ

若はさらに締め付ける力を強くした

若「ハハハ」

西城「くツ」

西城がいくら力を込めても、若の締め付けが強くなつていいく一方であつた
ガンツソードを斬りつけようにも、左腕に抑えられていた

西城「……」

ググツ

若はさらに強く締め付けた

若「シネ……！」

ヒコ

パシツ

すると西城はガンツソードを左腕に投げた
それを左腕で掘むと若の右腕を斬ると左腕も斬り飛ばした

若「グツあ！」

西城「ぐツまあ！まあはあはあ」

西城は首を抑えながら呼吸をした

西城「ざまあみろ！」

「

若はゆっくりと後退すると右腕と左腕が元に戻った

若「があ！！」

すると若是右腕の手の平から刀の柄が出てきた

若是それを思い切り抜いた

その刀の刀身は2～3メートル近くある長刀であった

若是その刀を抜刀のように構えた

西城

「はあはあ。次の攻撃で終わらせる気が」

西城はガンツソードを構えた

西城

「フウウ」

若は西城を待ち構えていた
すると西城は若に向かつて走りだした

第20話 決着

西城は飛び上るとガンツソードを振り上げた
若は向かってくる西城に渾身の一振りを斬りつけた
西城は思い切りガンツソードを振り下ろした

ガキ——ン

2つの刀がぶつかり合った

西城は腕を弾かれ体制を崩した

若は勢いを殺さずそのまま西城に斬りかかった
西城はそれを避けられなかつた

シユツ

すると西城は反射的にガンツソードを、若目掛けて斬りつけていた
すると若の両腕が宙を舞い地面に落ちた

西城

「はあはあ」

若は不適な笑みを浮かべた

若
「アッパレ」

若がそつと西城は若の首をガシソードで斬りとばした

西城

「はあ…はあ…お前もいい死に様だつたよ」

西城は若の亡骸に言った
緊張がとけるとその場に座り込んだ

カレン

「はあ、今回かなり疲れた」

バチバチ

西
「……」

西がステルスマードを解除した
すると転送が始まった
西はそのまま転送され始めた

次々と転送されていく中、カレンが西城に近づいてきた

カレン

「なんでそんな強いの？？」

西城「秘密」

カレン「生意氣な～」

するとカレンの転送が始まった

カレン

「まあいいわ。お先」

しばらくすると西城の転送された

ジジジジジジジジジジ

西城は黒い玉の部屋に転送された

西城が最後であった

涼子

「あれ紫音は？」

西城は下を向いた

カレン

「和泉は死んだよ」

淳

「マジかよー」

涼子「えッ……？ そんな……」

涼子は思わずその場に泣き崩れた

涼子「生きて帰るって言ったのに……」

それぢわ ちいてんを はじめる

無情にも採点が始まった

小富山

「はじめるね」

西城

「なにが?」

西

「採点だよ」

西城

「採点?」

話しているうちに黒い玉に浮かび上がってきた

あいつせん(相川淳)

14でん

total 33でん

あと67で
あと67で

終わり

じょくくん

11でん

total 18でん

あと82でん

終わり

ブリザー3回

3でん

あひやんめすが

total 9でん
あと91でん
終わり

亮

「おまえだけブロガー 3叩... 笑」

亮が進を笑つた

進

「ははは... なにがおかしいのかな。 亮君...」

亮 「はは。 気にすんな。 ブロガー 3叩」

進 「お前... 絶対許さん」

さよみゅうでり（笑）

6てん

t o t a l 1 3 てん
あと83てんで

終わり

じゅういちかん

0てん

よわすギ

total 42てん

あと58てんで
終わり

おっさん

21てん

total 48てん

あと52てんで
終わり

十七十八

24てん

total 62てん

あと38てんで

終わり

カレン

18てん

total 40てん

あと60てんで

終わり

にじくん

8てん

total 25てん

あと25てんで
終わり

はやと

0てん

やるやだせー

やればでれる」なんだから

total 31てん

あと69てんで

終わり

西

「あとせむ道だけか」

西は西城に言った

セニジョウ

118てん

t o t a l 118てん

100点めにゅーから選んで下さい

進

「はあーーー」

亮

「ありえねえー

小富山

「隼人以来だぞ。始めてきたやつで100点取ったの」

すると黒い玉の画面が消えた

第21話 100点めにゅー

100点めにゅー

- 1 記憶をけされて解放される
- 2 より強力な武器を与えられる

3 MEMORYの中から人間を再生できる

黒い玉の画面に100点めにゅーが浮かび上がってきた
それを見て西城は数分前の事が脳裏に浮かんだ

西城

「100点を取ると3つ選べるんだろ。3つ目ってなんなんだ？」

ガンツバイクを運転しながら西城は永川に聞いた

永川

「3つ目は確かMEMORYの中の人間を生き返らせるでしたよ」

西城

「MEMORY?なんだ、それ」

永川

「MEMORYは簡単に言うとあの部屋で死んだ人間をあの玉がデータとして残してるんだ」

西城

「じゃあ、例えば俺が死んだらそのMEMORYに載つて誰かが100点取つて俺を生き返らせる事ができるつていうことか」

永川

「そういうこと」

カレン

「どうすんの?」

淳

「2番だな」

亮

「2番だろ」

外野が騒ぎ初めている間に西城はどれにするかきめた
そして重い口を開いた

西城

「3番 和泉紫音」

すると泣き崩れていた涼子がびっくりした

涼子

「えつ」

西

「マジかよ

小富山

「いいんじやね」

亮

「後悔するだ

西城は外野の声をすべてシカトした
すると和泉が転送されてきた

和泉
「えっ！ なんで」

和泉はまだ状況を理解していなかつたが少しして気づいた

和泉
「もしかして俺死んだのか」

和泉がそう言つてゐる間に涼子が和泉に抱きついた

和泉
「心配かけて悪かった」

そう言つて和泉は涼子を抱きしめた

涼子

「もう絶対死なないで」

和泉

「ああ、約束する。もう絶対死なない」

いすみ

0てん

total 0てん

あと100てんで終わり

かこじょう

18てん

total 18てん

あと 82てんで終わり

黒い玉に浮かび上がった

和泉

「お前が生き返らせてくれたのか。なんでだ?」

西城

「これで仮は返したぞ」

和泉

「仮?なんのことだ?」

西城

「覚えてないのか」

西

「3番で転送されてきた奴は体にダメージを受ける前の状態で転送されるからダメージを受けていた間の記憶がないんだよ」

西城

「そうなのか」

亮

「採点も終わつたし帰ろうぜ」

淳

「ああ、そうするか」

そつとみんなぞろぞろ帰り始めた
そして西城がガンツスースで帰ろうとしたらカレンがそれを止めた

カレン

「ステッキはぬいで行つた方がいいわよ。それ一枚しかないから忘れたら次はステッキなしでやる事になるから」

西城

「次つていつですか?」

カレン

「わかんない。1ヶ月後かもしろないし半月後かもしけないしガンツが決める事だから。あつそれと」

そう言つてポケットから一枚の名刺を取り出した

カレン

「それにアドレスと携番が載つてるから。よかつたら連絡して」

名刺を渡すとカレンは部屋を後にした

西城

「これつて誘われてるのか?……そんなわけないか」

そう言つとステッキを脱ぎ今回の脱落者の残した服を着て部屋のドア

をあけて帰ろうとした

すると丁度ドアを出た横の壁に寄りかかっている西がいた

西

「いいで起きた事は外で喋らない方がいいぞ」

そつ言つて頭を指差した

西

「頭、ボンだから」

そつ言つてステルスマードになつてどこかいつてしまつた

西城

「これからどうするかな」

そうつぶやきながら西城はマンションから降りて道沿いを歩いていった

その間に西城はあるものに気づいた

それは映画のポスターだった

西城

「200X年3月1日絶賛公開中つて」

西城は驚いた

西城

「なんで2ヶ月しかたつてないんだ」

西城は考えながら横断歩道を渡った

西城（心の声）

「なんで2年が2ヶ月しかたつてないんだ」

ブーー

すると軽トラックのクラクションが鳴った

西城はそれに気づいて軽トラックがこっちに向かってくるのに気づき避けようとしたが間に合わず軽トラックに跳ねられてしまった

第22話 事故

ピー ポー ピー ポー ピー ポー ピー ポー

事故のあつた所に救急車が駆けつけた
すでにそこには何人かの取り巻きがいた救急隊員はすぐさま西城を
救急車に担架で搬送した

取り巻きA

「えつ 何かあつたの？」

取り巻きB

「軽トラックとの接触事故だつて」

取り巻きC

「それとなんか被害者の方は行方不明者だつたらしいよ」

救急車は事故現場から出発し近くの救急病院へ向かつた

次の日

プルルルルルルル

ガチャ

西城の母

「西城ですけどどうぞまでしょうか」

警察官

「警察署のものですけどそちらのお子さんと思わしき人が見つかりましてようしかつたら確認していただきたいんですけど」

西城の母

「見つかっただんですか！それで今どこにいるんですか？」

警察官

「○×病院です」

西城の母

「なんで病院なんかに」

警察官

「それが先日軽トラックとの接触事故がありまして目立った外傷は

ないそうですけど詳しいことは病院で聞いてください

西城の母

「わかりました」

電話を切ると母は病院に向かつた
病院につくとすぐさま受付に行って場所を聞き病室に向かつた
病室のドアの前に警官が立っていた

警官

「いらっしゃいです」

2人は病室に入った
母は顔を確認した

警官

「お子さんですか」

母

「そうです。うちの子です」

西城は目を閉じたままベットに横たわっていた

警官

「意識がまだ戻っていないので田覚めたら簡単な事情聴取をしてもらおうとしているのでしょうか?」

母

「ええ、かまいませんよ」

病室に医師が入ってきた

医師

「お母様でしょうか?」

母

「はい。そうですね」

医師

「診断結果を『』説明したいのですが」

病室を出て医師と診察室の方に行つた

医師

「どうぞ。おかげください」

母
「はー」

そつ音つて母はイスに座つた
医師も母が座るのを見て座つた

医師

「お子さんですが立った外傷もなく日常生活に支障はないと思いま
す。ただ」

母
「ただ?」

医師は頭部のレントゲン写真を張った

医師

「事故の際頭部を強打したと聞いたのでレントゲン写真を一応撮つ
たのですが全く異常は無かつたのですがもしかしたら記憶障害にな
つてはいるかもしれません」

母
「なんか根拠でもあるんですか」

医師

「前回にも同じような事故がありまして記憶障害になつたケースがあつたので、まあ用覚めてみないとわからないのでそれまで待ちましょう」

母

「わかりました」

母は診察室を出て病室に行つた

そしてベットの横にあるイスに座つた

母

「智也。あんた2ヶ月もどこでいたのよ?」

母はボソッとしゃべつた

だがなんの反応もなかつた

母は飲み物を買いに席を立つた

母が病室を出ると意識を失つていた西城の顔がゆっくり開いた

第23話 退院

西城

「んつんん、いじしま?ビードだ?」

西城はあたりを見渡した

西城

「なんで病院にいるんだ?」

すると西城は激しい頭痛に見まわれた

西城

「ぐうづぐあ」

西城は頭を手で抑えた

すると走馬灯のように昨日の記憶が戻ってきた

西城（心の声）

「そうだ。俺は昨日死んであの部屋にいたんだ。なんで俺は死んだんだ? だめだ思い出せない」

ガラララ

病室のドアをあける音がして西城の母が入ってきた

母

「智也おきたの？」

西城

「母さん」

母

「飲み物買つてきただけど飲む？」

西城

「ああ。 ありがとう」

西城は母親からお茶の入ったペットボトルを受け取った

ガラララ

警察官が病室に入ってきた

警察官

「息子さん田覓めたみたいですね」

西城

「なんで警官の人が…」

母

「警察官の人があんたが事故にあつた事を知らせてくれたのよ」

警察官

「簡単な事情聴取をしてよろしくでしょうか?」

母

「じゃああたしは」

そう言つて西城の母は席を立つとした

警察官

「奥さん、いいですよ。すぐ終わりますから」

母

「やつですか」

そういつて西城の母は再び座つた

警察官

「昨日の夜、事故現場の近くで何をしてたんだい」

西城は答えようとしたが西に黒い玉の部屋の事を話すと頭が爆発すると言われた事を思い出した
そして答えられそうな範囲は答えて答えられない所はわからないと
答えた

警察官

「最後に2ヶ月前から君はどういたんだい」

西城

「2ヶ月前? なんの事ですか?」

警察官

「2ヶ月前から君は行方不明だったんだ」

西城

「俺、行方不明だったんですか?」

警察官

「やはり一部的な記憶障害みたいですね」

母

「そうですか」

警察官はメモ帳に電話番号を書いて切り取り西城に渡した

警察官

「まあ。何か思い出したらここで連絡して」

西城

「わかりました」

警察官

「じゃあ、私はこれで」

そう言って警察官は病院をあとにした

その後西城は医師に呼ばれ軽い検診を受けてそのまま退院した
病院を出ると西城の母はタクシーを止めた
2人はタクシーに乗った

そのままタクシーは西城の家まで行つた
2人はタクシーを降りて自宅に入つた

西城の母はそのまま夕飯の支度をすると言つてキッチンの方へ行つた
西城は階段を登り自分の部屋に入るとベットに横になつた

西城

「何があつたんだ? 2ヶ月前に」

西城は必死で思いだそうとしたが思い出せなかつた
するとポケットの中に何か入つてゐるのに気づいた
それを取り出した

西城

「名刺? 確かこれは」

それはカレンの名刺だつた

西城はカレンに2ヶ月前の記憶の事のヒントが得られるかもしれない
と思い部屋にあつた携帯を取り電話をかけた

プルルルルル

プルルルルル

第24話 next mission

ガチャ

カレン
「もしもし」

西城
「あ、あの～」

カレン
「だれ？」

カレンが問いかけた

西城

「昨日名刺をもらつた西城ですけど」

カレン

「西城、ああ～昨日の。なんかよひ?」

西城

「聞きたいことがあるんですけど」

カレン
「なに?」

西城
「俺あのあと軽トラックと事故つてしまつて一部的な記憶障害になつてしまつて」

カレン
「記憶障害つてどういふ事?」

西城
「話すとよくなるんで簡単に話します」

西城は自分がどうやって死んであの部屋にきたのか。2ヶ月間行方不明だった事やその期間の記憶が思い出せない事を話した

西城
「俺、2ヶ月前の事なにか言つてしませんでしたか?」

カレン

「ごめん。聞いてないわ。そういうことになるなら聞いておけばよかつたかもね」

西城

「やつですか」

西城は残念そうに言つた

カレン

「でも無理に思い出さなくてもやつべつ思い出した方がいいんじゃ
ないかな」

西城

「わかりました」

カレンはまた連絡するかもと言つて電話を切つた

そのあと妹が学校から帰つてきてしばらくして父親も帰つてきた
家族で夕飯を食べ始め父親や妹からいろいろ質問されたけどあまり
答えられなかつた

夕飯を食べ終わると風呂に入つて一階に上り自分の部屋すぐ横になつて寝てしまつた

朝起きると顔を洗い、「飯を食べて歯を磨いて学校に行つた

西城

「もう2ヶ月も行つてないのか」

学校につくとクラスメートや仲のいい友人から2ヶ月間何をしていたのか聞かれたけど事情を話してわからないと答えた学校の授業が終わりいつも通り西城の一番仲のいい二岡義行と帰ることになった

二岡

「もう時期春休みだな」

西城

「ああそうだな。お前なんか予定あんの?」

二岡

「俺か?俺はバイトだよ。そういうやお前バイト先に連絡したのか?」

西城

「ヤベー忘れてた!」

西城は急いでバイト先に連絡したが当然2ヶ月間音信不通だったため首だと言われた

西城

「首だつてさ。またバイト先探さねーと」

一岡

「まあー頑張れよー」

そつこひつ話ながら一岡とわかれ西城は家についた

約一週間後

その日は日曜日で学校が休みだった
しばらくすると電話がかかってきた
それはカレンからだつた

西城

「もしもし」

カレン

「今日、暇?」

西城

「特に用事はないんですけど」

カレン

「じゃあ、今日部屋のメンバーで和泉の家に集まるんだけど来ない？」

西城

「いいですよ」

カレン

「じゃあ〇 公園で待つてて」

2人は公園で待ち合わせをした
そこから和泉の家へ行つた

和泉の家につくとそこには相川3兄弟と清水と小宮山がいた
そこで武器の使い方など詳しく教えてくれた
そのあとみんなで軽い訓練とかをした
そこでも西城は2ヶ月前の事を何か話していないかを聞いたがみんな知らないと答えた

次の日

いつも通り学校に行き6時頃帰ってきて夕飯を食べて部屋に行つて
落ち着いていると金縛りにあつた

西城

「体が動かねえ〜」

すると黒い玉の部屋に転送された
そこにはすでに全員いた

あーたーらしーい

あーさがきた きぼーの

あーわーが

それ いっちゃん
さん! !

第25話 ゲルマニウム星人（前書き）

大阪チームさん評価ありがとうございます
文章力のなさは自分でも痛感しています
ランキングのベスト10くらいに入れば編集部に送るのもありかも
しませんね（笑）

第25話 ゲルマニウム星人

てめえ達の命は、
無くなりました。

新しい命を
どう使おうと
私の勝手です。

という理屈なわけだす

部屋には全部で17人内5人が新メンバー

てめえ達は今からこの方をやっつけに行って下ちい

ゲルマニウム星人

特徴
筋肉
つよい

好きなもの
プロテイン
口ぐせ
いやしを～～！

画面にはタンクトップの人間離れした筋肉むきむきな星人の写真が載っていた

男子高校生A
「この写真キモ」

三人組の男子高校生の1人が画面を見て言った

男子高校生B
「シユワちゃんよりやばくね」

ガンッ

話していると黒い玉が開いた

男子高校生C

「おい！中に入ってるぞ」

男子高校生A
「まじかよ」

男子高校生が騒いでいる間に前回まで生き残ってきたメンバーはスー
ツに着替え始めた

男子高校生B
「おい！あいつ」

男子高校生Bがある男を指差した
それは新メンバーの1人だった

男子高校生B
「あいつ知ってるぞ。去年高校生の剣道全国大会で優勝した速水祐
介じゃね？か」

速水は指を差されたがすました顔をしてポケットに手を突っ込みながら壁に寄つ掛かっていた

男子高校生C
「本当かよ？」

男子高校生B

「マジだって…」ニュースで言ひてたし

そういうしている内に転送が始まつた
すでにこれまでのメンバーは着替えをし終わつていた
しばらくして部屋から全員転送された

西城

「新宿？」

転送された場所は新宿だった

小富山

「とりあえず数がありそつだから適当にどちらかよひ

淳

「そりだな。 その方が効率がいいしな」

和泉

「いや、 その必要はなさそうだ

小富山

「なんでだ？」

和泉がレーダーを見ながら言った

和泉

「ターゲットがこっちに集まってきたる」

すると一体のゲルマニウム星人

ゲルマニウム星人

「いやしき～～」

進

「誰がやる？」

小富山

「俺が行こう」

そう言って小富山がゲルマニウム星人に向かって行こうとしたら誰かに肩を捕まれたそれは佐々木力オルだった

佐々木

「お前はすつこんでるー。」いつは俺がやるー。」

そう言うと佐々木はゲルマニウム星人に近づいて行った

西城

「そう言えばあの人の戦う所初めて見るな」

小富山

「初めてならあまり近寄らない方がいいぞ！巻き添えくらつから」

近寄つてくる佐々木にゲルマニウム星人は右手で殴りつけた
佐々木はこれを軽く避けたと同時に右手でカウンターをかました
ゲルマニウム星人がひるむと佐々木はたたみかけるようにボディを
二発三発とくらわすとゲルマニウム星人の首を抱え込みスーツの力を
を全開にして首を引きちぎった

男子高校生A

「すげえ～」

そう言つて不用意に男子高校生Aはやられたゲルマニウム星人の所
に近づいて行つた

すると佐々木が男子高校生Aに裏拳をきました

男子高校生Aの首が一周回つた

西城

「まじかよ」

小富山

「もうあいつ興奮してやがる。あんなつたらもう敵味方みさかいがないからな」

小富山がそう言っている間に佐々木の前方からぞろぞろゲルマニウム星人がやってきた

第26話 狂氣

男子高校生B

「大丈夫か！？」

男子高校生達は男子高校生Aに駆け寄った

男子高校生Cが男子高校生Aの首に手をあて脈を調べた

男子高校生C

「おい！脈がねえぞ」

すると2人の背後からゲルマニウム星人が近づいてきた
佐々木がそれに気づきHガンを構えた

西城

「あいつ何やる気だ」

小富山

「あれじやあ巻き込んでまうぞ」

キュイイイイイン

Hガンのチャージ音がなつた

西城

「お前ら逃げる！」

西城は高校生たちに大声で言つた

男子高校生B

「えつ！」

男子高校生たちは西城の声に気づいた

ドン

だが間に合わなかつた

カレン

「今の佐々木の頭の中は肉を破壊することしか頭がない」

カレンが西城に言った
佐々木の周りには無数のゲルマニウム星人に取り囲まれていてそれ
と佐々木は戦っていた

和泉

「きたぞ」

すると西城たちの後方からもたくさんのがるマニウム星人が来た

清水

「結構いるな」

西城たちはゲルマニウム星人の大群に向かつて行つた
ゲルマニウム星人は向かつてくる西城たちに攻撃してきた

ゲルマニウム星人

「いやしを〜」

和泉と淳は殴りかかつてくるゲルマニウム星人をガンツソードで応
戦し他の西城たちは向かつてくるXショットガンで応戦していた

カレン

「サイ、なんで刀使わないので？」

カレンが西城に問いかけた

西城

「サイ？」

カレン

「西城じゃ呼びづらいからサイでいいでしょ」

西城

「別にいいけど」

カレン

「で、なんで刀使わないので？」

西城

「なんとなくいつかの方がいいかなと思つて」

カレン

「ふ〜ん」

西城たちがゲルマーヴム星人と戦っているのを新メンバーの速水が遠くから見ていた

そこに一人の男は近づいてきた

それは今回の新メンバーの一人だった

?

「あんた部屋であつたよな?」

男は速水を一通り見た

?

「見た感じあそこにいる奴らとは違うみたいだな」

速水

「なんかようか?」

?

「あんたも死んであの部屋に来たのかなと思って」

速水

「やっぱり死んだのか俺」

?

「実感ないよな。今こうして生きてるし、なんか強制的に狩りまがいのゲームみたいなのには参加させられてるし」

速水

「だが現実だ。実際に3人死んでる。それにあそこにいる奴らは一切動搖していない。ここじゃ当たり前なんだよ。人が死ぬのが」

?

「だな」

2人はしばらく黙り込んだ

?

「そう言えば自己紹介してなかつたな。俺は南隼人。お前は？」

速水

「速水祐介」

2人が話しているうちにメンバーはその場にいるゲルマニウム星人を全滅させていた

佐々木もすでにその場のゲルマニウム星人をすべて倒していた

淳

「一通り終わつたな」

小富山

「これで終わりか?」

和泉

「終わりか」

清水

「前回に比べたら楽だつたな」

淳

「そうだな。前回はボスがいたからな」

進

「でも結構疲れたわ」

亮

「お前は昔からすぐ音をあげるからな」

そういう言ひ方の中に転送が始まつた

進
「なにを」

淳

「進！あつくなんなるんじやねえ～」

西城（心の声）

「今回も生き残れた。だけど前回となにか感覚が違う。なんか自分の体が自分じやないような。そんな感じがする」

カレン

「なに黙つてんのよ

西城

「少し考え方を…」

小富山

「なんかやらしい事でも考へてたのか？」

西城

「そんな事ないですよ」

小富山

「ははは。[冗談だよ」

あたりのメンバーはどんどん転送されていった

第27話 ちいさん

黒こ玉の部屋に全員転送された

それから ちいさんを はじめる

れこじょ

24てん

total 42てん

あと58てんで
終わり

あつし

18てん

total 51てん

あと49で

終わり

せやと

0でん

がんばれ

t o t a 1 3 1 でん

あと69で

終わり

ブリザー2号

0でん

ねりこせすじゅう

t o t a 1 1 8 でん

あと82で

終わり

カレンちゃん

24てん

total 64てん

あと36てんで
終わり

すすむ

6てん

total 15てん

あと85てんで
終わり

きよ（清水）

6てん

t o t a l 1 9 t e n

あと81でん

終わり

もじみち（笑）（速水祐介）

0でん

スカシすゞ
やるきなさすゞ

t o t a l 0でん

あと100でん

終わり

こみ

30でん

t o t a l 82でん

あと18でん

終わり

にじくん

12てん

t o t a l 37てん

あと63てんで

終わり

いすみ

18てん

t o t a l 18てん

あと82てんで

終わり

せやと2号

〇てん

よわすめ

わいあかとこひやこひやしづめ

total 〇てん

あと一〇〇へんで

終わり

つゆうじ

6てん

total 48てん

あと52てんで

終わり

れれせ

42てん

total 104てん

100点めにゅーから選んで下さい

佐々木

「ふふふふふふ」

佐々木が不適に笑い始めた

黒い玉の画面の画像が消えて100点めにゅーが映し出された

佐々木

「2番だ。次までに用意しといてくれ」

黒い玉の画面の画像が消えてマンションから出れるようになった

進

「さあ～帰るか」

ぞろぞろとメンバーは帰り始めた西城はマンションから出て家に帰
ろうと道を歩いているとカレンが後ろからきた

カレン

「おつかれ」

西城

「お疲れ様です」

カレン

「そういえば明日日曜よね。サイは明日暇?」

西城

「明日はバイトもないから暇ですよ」

カレン

「よかつたら明日ドライブ行かない?」

西城（心の声）

「これってデートの誘い?」

西城

「行きますー!」

カレン

「じゃあ明日迎えにいくね」

カレンがいなくなると西城は小さくガツツポーズをした

第27話 ちこさん（後書き）

おすそん評価ありがとうござります
話の構想はだいたいできてるのだとほやほや思しだいひとつひとです
ね（笑）
これからも頑張ります

第28話 テート！？

次の日

プルルルル

西城

「もしもし」

西城は携帯の着信が鳴りそれにでた

カレン

「今ビーム？」

西城

「待ち合わせ場所にいますよ」

カレン

「そう、わかったわ。もう少しでつくから

そう言ってカレンは電話を切った

数分後

カレン
「ごめんね。またせて」

カレンは車の窓を開けて西城に言った

西城

「いや、そんな待つてませんよ」

カレン

「じゃあ乗つて」

西城

「はい」

西城は助手席に乗つた

カレン

「じゃあ、とりあえず」はん食べに行こうか」

西城

「あつそれならうまいラーメン屋知っていますよ。そのとんじつけ
ーメンがおすすめですね」

カレン

「本当にー。私ラーメンには目がないのよ」

その後近くのラーメン屋に行つた

カレン

「ふう。美味しかった」

2人はラーメン屋を出て再び車に乗つた

カレン

「ちょっと今から行きたいとこあるんだけど行つてもいい?」

西城

「いいですよ」

その後2人は話がだんだん盛り上がり上がって行つた

数時間後

カレン

「ついたわ」

西城

「ここは」

そこは広い砂浜だった

そこから広大な海の風景が広がっていた

西城
「海」

西城は少し歩を進めて海に近づいて行つた

西城

「きれいですね」

カレン

「そうね」

西城
「なんですかそれ」

西城はカレンの手に持つているものに気づいた

カレン
「あつこれ」

それは陶器のいれものだった

カレン

「遺骨よ」

西城は一瞬驚いたがすかさずきいた

西城

「誰の？」

カレン

「あたしのおじさんよ」

カレンはその後しばらく黙つたあと重い口を開いた

カレン

「私ね。小さい時に両親を交通事故で亡くしてね。孤独で1人ぼつちだつた時、私を引き取つてくれたのがおじさんだつたの…おじさんは私のこと実の娘みたいに可愛がつてくれたんだけどつい最近胃にガンが見つかつたなんだけどすでに他の臓器にもガンが転移してすでに手遅れで…」

カレンは少し泣きやうな感じだった

西城

「もうここよ。それ以上は」

西城は少し間をおいてカレンに疑問をぶつけた

西城

「それでなんで海なんだ」

カレン

「……」死んだ奥さんとの思い出の場所だつたんだつてだから遺書に遺骨の半分は奥さんと同じお墓にもう半分はここに置いてくれつて書いてあつたから

そう言うとカレン遺骨をまきはじめた

まきおわると座り込んで手をあわせた

西城は声をせんぜんかけられなかつた

カレンのかかえていた悲しみを自分にはどうするかもできないと悟つたからだ

カレン

「……」あんね。仕合わせちやつて

西城

「ぜんぜんいいですよ」

カレン
「じゃあ帰ろうか」

そう言つて2人は車に乗つた
帰りの車内で2人は無言だった

カレン
「じゃあまた今度、なんかあつたら連絡するわ」

西城
「はい」

カレン
「それじゃ」

カレンは西城を送るとそのまま車に乗つて帰つて行つた

西城
「ただいま」

母

「『』なんば？」

西城

「ああ。食べるよ」

やつまつてコビングの方へ行つて机に座つて、飯を食べ始めた

ゾクゾク

「」飯を食べている途中にいきなり寒気がした

西城（心の声）

「この感じ」

西城は椅子から立ち上がった

西城

「ちよっとでかけてくる」

父

「智也！おい！」

父の声を無視して駆け足で外に出ていった
するとしばらくして西城は転送された

第28話 テートー！？（後書き）

GANZEN 25巻買いました(^-^)/
やっぱ大阪は面白いね(^O^)
ヤンジャンの方はもうめちゃくちゃになつてますけど

第29話 ジーンズ星人

あーたらしい

あ～たがきた きほーうの

あーひーが

西城が転送されるとわたりへリジオ体操の音楽が流れた

てめえ達の命は、
無くなりました。

新しい命をどう使おうと
私の勝手です。

といつ理屈なわけだす。

西城

「おひやさん、昨日やったばっかだろ。2日連チャンなんてあんの
か?」

西城は小富山に問いかけた

小富山

「今までこんなことなかつたはずだが…」

淳

「またガンツの氣まぐれだる」

淳が小富山に言つた

てめえ達は今から

この方をヤツつけに行って下さい

ジーンズ星人

特徴

つよい

ごつい

好きなもの

デニム

口ぐせ

ゴーマリイソン

西城は部屋の中を見渡した
すると見知らぬ2人組がいた
それは新しく来た奴らだった

進

「じゃあ、さつそく着替えるか」

そう言って前回までのメンバーは着替え始めた

2人組の男A

「どうやら何かを倒しにいくらしい」

2人組の男B

「なんか他の奴らタイツに着替えてるぞ」

2人組の男A

「どうやらこれに着替えているらしい」

2人組の男Aはスースケースをとった
スースケースには河内と書いてあつた

河内

「おまえのもあるぞ」

スーツケースには茨木と書いてあつた

茨木

「とりあえず着替えてみる?」

河内

「その方が良さそうだな」

しばらくして転送が始まった

和泉
「新宿」

亮
「昨日と同じか」

小富山

「手分けして狩るか」

和泉

「そうだな」

佐々木と隼人と西を除いてそれぞれ散つていった

西城はカレンと和泉は涼子と小富山は清水と淳は弟たちと速水は南と新しくきた河内と茨木

和泉

「そろそろだな」

和泉はコントローラーのレーダーを見ながら言つた

和泉

「涼子もあと半分で100点だからな。涼子が100点取つたときは一緒に自由にならう」

涼子

「うん」

歩いていると前方にチビジーンズ星人がいた
チビジーンズ星人を見るとジーンズ星人の頭に小さい足を生やした
感じだつた

チビジーンズ星人

「ゴーマリイソン～ゴーマリイソン」

チビジーンズ星人が和泉と涼子に気づいた
チビジーンズ星人がゴーマリイソンと歌い始めると同じようなチビ
ジーンズ星人が数体出てきた

ギョーンギョーン

和泉は手に持っている×ショットガンをチビジーンズ星人に打つた
それは一体のチビジーンズ星人に当たりしばらくタイムラグが来て
吹っ飛んだ

チビジーンズ星人

「ゴーマリイソン～～～～～」

集まつたチビジーンズ星人達は揃つて怒り始めた

ギョーン

ギョーンギョーン

怯まず和泉はXショットガンで打ち涼子はXガンでチビジーンズ星人を狙い打つた

第30話 頭上から

小富山

「いたぞ」

時を同じくして小富山と清水もチビジーンズ星人に出くわしていた

ギョーンギョーン

ギョーンギョーン

2人はチビジーンズ星人に向かってXショットガンを打った
チビジーンズ星人は粉々に吹っ飛んだ

清水

「今回も楽そうだな」

小富山

「油断してると前々回みたいにやられるぞ」

するとジーンズ星人が現ってきた

小富山

「噂をすればだ」

和泉

「涼子。これで狙い打て」

和泉はそう言って涼子にXショットガンを渡した

和泉は涼子に渡すとホルスターからガンツソードを取り出しチビジ
ーンズ星人に斬りかかつて凹になつた

力チカチカチカチカチカチカチ

その間に涼子はXショットガンでロックオンした

涼子

「できたわ」

ギヨーン

そう言うと涼子はメショットガンを打つた
すると辺りのチビジーンズ星人はすべて粉々になつた

カレン

「ちょっと一服していい?」

そいつ言ってタバコを取り出して火をつけた

西城

「いいですよ。じゃあ俺先に片付けて来ますよ」

カレン

「わかった。あとから追ってくわ」

小富山

「お前は手を出すなよ。」こいつは俺がやる

清水

「了解」

小富山は持っていたXショットガンを投げ捨てた
首と指を鳴らしながらジーンズ星人に近づいていった

小富山

「久しぶりに素手で戦うのもいいな

するといきなりジーンズ星人が右手を振り下ろしてきた
小富山はそれをとっさに避けた

ジーンズ星人

「ゴーマリイソン」

小富山は負けじと右手を振り上げた
ジーンズ星人はそれを避けた

小富山

「やるじゃん」

ジーンズ星人は隙のできた小宮山に左手で殴りつけた

小宮山はそれを余裕に避けた

小宮山は避けると同時にジーンズ星人の懷に踏み込んだ
するとジーンズ星人の腹を左手で殴つた

ジーンズ星人

「ぐばあ」

ジーンズ星人はその場から吹っ飛ばされた

吹っ飛ばされて座るように倒れ込んでいるジーンズ星人に小宮山は
その場を飛び膝で思いつきり顔を蹴つた

その攻撃でジーンズ星人の顔がゆがんだ

続けざまにジーンズ星人の首を抱え込み首をへし折つたあと抱え込
んだまま後ろに投げ飛ばした

ジーンズ星人が大の字になつているところを肘で顔にのしかかつた
ジーンズ星人の頭はくちゃくちゃになつた

涼子

「んつ！？あれ」

和泉と涼子の所に6体のジーンズ星人が歩いてきた

和泉

「大きい奴もいるのか」

ギョーンギョーン

すると後ろの方から×ショットガンの発射音が聞こえた
すると6体の内一体がやられた

和泉は後ろを向いた

それは新しくきた茨木と河内だった

ギョーンギョーン

ギョーンギョーン

河内と茨木は後ろで打ち続けた

だがジーンズ星人はその攻撃を避けた

和泉は攻撃を避けているジーンズ星人にたたみかけるようにガンツ
ソードを伸ばし斬りつけた

おいうちに涼子と河内と茨木は×ショットガンで斬られたジーンズ
星人を打つた

和泉

「お前たち始めてか?」

河内
「ああ」

和泉
「よくわかったな。銃の打ち方とか」

茨木
「さつき試し打ちしたからな」

河内

「それより名前なんて言つんだ?」

和泉

「俺か?和泉紫音。」
「ちは涼子」

涼子

「よひしく」

河内

「俺は河内武士」

茨木

「茨木進」

その頃カレンはタバコを吸い終わると火を消した

カレン

「そろそろ行きますか」

すると空から何かがふつてきた

ドン

それは強化スースをきた誰かだった

カレン
「?隼人?」

?
「違うよ」

カレン
「その声は」

第31話 怒

西城

「いるぞ」

西城は歩きながらコントローラーのレーダーを見ながら言った
西城は階段を上まで登るととっさに隠れた
そして少し顔を出してのぞいた

西城

「三体か」

そこには三体のジーンズ星人がいた

西城

「よし」

西城はそう言いつとXショットガンを構えた
照準を合わせてトリガーを引こうとした

チビジーンズ星人

「ゴーマリイソン！――！」

すると後ろからチビジーンズ星人がやつてきて西城に気づいた
その声で三体のジーンズ星人も西城に気づいた

ギヨーン

西城はとっさにトリガーを引いた

それはあらかじめ照準を合わせていたジーンズ星人の頭に当りジーンズ星人の頭が吹っ飛んだ

だがそれに怯まず二体のジーンズ星人は走りながら西城に近づいていった

チビジーンズ星人は飛びながら西城噛みついてきた

西城はXショットガンで払いのけた

チビジーンズ星人が地面に叩きつけられた所を蹴り飛ばした

チビジーンズ星人はそのまま階段を転げ落ちていった

西城は反転して向かってくるジーンズ星人の方へ走つていった
二体のジーンズ星人は向かってくる西城に殴りかかった

ギヨーン
ギヨーン
ギヨーン
ギヨーン
ギヨーン

西城はスライディングしてジーンズ星人の攻撃を避けながらXショットガンを打つた

一体のジーンズ星人は両脚が吹っ飛びもう一体のジーンズ星人は左手と顔の半分が吹っ飛んだ

ジーンズ星人

「『……マリ……そン』

顔の半分がなくなつたジーンズ星人が西城に残つた右腕でヨロヨロしながら殴りかかってきた

あまりにその攻撃は遅くて西城が避けるのは容易だつた

ジーンズ星人

「ゴー……」

しばらく避けていると顔が半分ないジーンズ星人は力つきた

西城

「死んだか」

ジーンズ星人

「ゴーマリイソン！ゴーマリイソン！ゴーマリイソン！」

両脚のないジーンズ星人は叫びながらのたうちまわっていた
西城は両脚のないジーンズ星人に歩み寄つて行つた

ジーンズ星人

「ゴーマリイソン！ゴーマリイソン！」

西城にはジーンズ星人が命こいをしているように見えた

西城

「悪いな」

そう言つて西城は×ショットガンを構えた

ギョーンギョーンギョーンギョーンギョーン

西城はジーンズ星人を滅多打ちした
ジーンズ星人は粉々に吹つ飛んだ

西城

「ここにはもういらないな」

そう言つて西城は元の道を戻つていった
すると階段の下にまだチビジーンズ星人がいた
西城は階段の最上段から飛んだ

そして下にいるチビジーンズ星人の上に両脚で着地した
着地の衝撃でチビジーンズ星人はぐちゃぐちゃになった
西城はそのままカレンのいる所まで戻つていった
そこにはたくさんのHガンを打つたあとがあつた

西城

「なんだ?なんかあつたのか?」

西城は少し歩くと異変に気づいた

西城

「カレン!」

西城は横たわっているカレンに気づいた

カレン
「サイ……」

カレンは虫の息だった

西城

「いいからしゃべるな！」

カレン

「はあはあ……」

するとカレンの腕に力がなくなつた

西城

「カレン！――！」

カレンは息を引き取つた

?

「ふふふはははは」

そこには強化スーツ（普通のスーツより耐久力が各段に高いスーツ。腕には一本の腕の形をしたアームがついていて両肘には一本のブレードがついている。原作では岡八郎が使用）を着たなものかがいた

西城

「お前がやったのかー!？」

?

「それがどうした

それを聞いて西城は怒りのあまり強く拳を握った

第32話 佐々木カオル

西城

「その声。お前佐々木だろ！」

強化スーツで顔がわからなかつたが声で佐々木だとわかつた

西城

「なんでカレンを殺した！」

佐々木

「いいだろ！このスーツ敏捷性もハンパなくあがるぞ」

西城の質問にはそつちのけでスーツの自慢をしてきた

西城

「質問に答える……！」

佐々木は少しムッとしたがすかさず答えた

佐々木

「簡単な事だよ。ただこのスーツを試したかっただけだよ

西城

「試すなら星人で試せるだろー。」

佐々木

「星人ならとつぐに試したよ。だけど今回の星人も弱いしそれに興味があつたんだよ！」

西城

「興味？」

佐々木

「人間に試したらどうなるかだよ。たまたまこいつがいたから試しだけだよ」

そう言つたあと佐々木は不適に笑つていた

西城はその言葉を聞いてブチ切れた

西城

「お前は人間の”クズ”だ！お前だけは絶対に許さね～」

そつ言つて西城は臨戦態勢を取つた

佐々木

「ふはははーおもしろいーーお前も地獄に送つてやる」

佐々木は西城をいつでも迎えうるよう構えた
先に動いたのは西城だった

その場を走り周り佐々木を攪乱した

そしてXショットガンの銃口を佐々木に向けた

佐々木はそれに気づき素速くその場を動いた

西城は佐々木が俊敏に動いていてなかなか狙いが定まらなかつた

西城

「ちっ

すると佐々木は西城に一気に近づき右腕のアームで西城に殴りかか
つた

西城はとっさに気づきそれを避けた

佐々木の右腕のアームはそのまま地面に叩きつけられ地面が一部だ
け割れた

すかさず西城はその場から距離を取つた

西城（心の声）

「なんて威力だ。こんなのがいたらひとたまりもないぞ」

佐々木

「逃げてばっかじや勝てねえゾ」

西城

「ふつ。 そんなことはわかつてゐよ」

するとまた西城は佐々木の周りを走り撓乱し始めた

佐々木

「何度やっても同じだ」

再びその場で素速く動き始めた

ギョーンギョーン

西城は狙いが定まらないため当てずっぽうにショットガンを打った
当然佐々木には当たらなかつた

佐々木

「へりえー」

するとさつきと同じように近づき右腕のアームで西城に殴りかかった

西城はそれを再び避けた

佐々木はすかさず左腕のアームで殴りかかった

西城は左腕のアームも避けた

そこに右左とアームで殴り続けた

佐々木

「はは、逃がすかよ」

佐々木は殴り続けた

西城もすかさずそれを避け続ける

そして西城は一瞬の隙を見つけてその場を離脱した

佐々木

「ちつ」

西城（心の声）

「いのままじやきりがない」

西城は再び佐々木の周りを走り始めた

カチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチ

西城はあからさまに×ショットガンの上のトリガーを引きまくった

佐々木

「何度も同じ事を」

佐々木は再び西城との距離を詰めよつとした

ギヨーン

その時、西城はXショットガンのトリガーを引いた

ボンボンボンボンボンボンボンボンボンボンボンボンボンボンボンボンボンボンボン

すると佐々木の周りの地面がXショットガンの攻撃で破壊された

佐々木

「」

破壊の衝撃であたりの視界が悪くなり西城を見失った

佐々木

「くそー、どうせやがった」

佐々木はあたりを見渡した

すると後ろから走つてくる足音が聞こえた

佐々木はとっさに後ろを向いた

すると西城が走つて助走をつけた状態で膝で佐々木の顔を蹴り飛ばした

西城は蹴り飛ばすと近くの地面に着地した

第33話 西城vs佐々木

西城の攻撃に対して佐々木は平然としていた
佐々木は首を右左と鳴らした

西城

「ほんどのダメージか」

佐々木

「少し油断した」

そつと一気に西城との距離を詰めた

西城

「！」

西城は一瞬驚いた

すかさず佐々木は左アームで殴りかかった

西城は紙一重でそれを避けた

西城（心の声）

「わざわざ早い」

続けざまに右アームで西城に殴りかかった

西城は再びそれを避けた

すると佐々木は左腕のブレードで西城に斬りかかった

西城はそれを予期していなかつたのか一瞬反応が遅れた

そして佐々木の左ブレードが肩に少しだけかすつた

すると西城のスー^ツが肩の一部が斬れた

佐々木はしばらくの間ブレードとアームを織り交ぜながら右左と西

城に攻撃した

西城もその攻撃を避け続けた

西城（心の声）

「このままじゃまずい」

佐々木の右アームがきたその一瞬に全力で距離を取ろう西城は決めた

そして佐々木が右アームで殴りかかってきた

西城はその場から引く体制をとつた

その瞬間ピタッと右アームが止まった

西城

「！？」

すると佐々木は左アームでアッパー気味に殴りかかつた
それは見事に西城被弾した

西城（心の声）

「フロントだと」

西城はそのまま殴られた勢いで遠くに飛ばされた
飛ばされた勢いでXショットガンを手放してしまった
そして近くの車に叩きつけられた

西城（心の声）

「くそ！予想以上に効くな。これじゃステッガもたない」

佐々木は続けざまに右アームを構えた

西城は直感でやばいと気づきその場から逃げた

パアップパアップパアップパアップパアップ

西城はアームガンの被弾を免れたがあたりの地面や物がはじけ飛んだ

パアップパアップパアップパアップ

佐々木は休まず打ち続けた

西城は走りながら攻撃から逃げた
走りながらカレンのHガンを探した

西城（心の声）

「奴にダメージを与えるにはあれしかない」

Hガンはカレンの亡骸の近くに落ちていた

西城はアームガンから逃げながらHガンを拾つた

パアップパアップパアップ

佐々木はアームガンを打ち続けていた

西城（心の声）

「無駄打ちはダメだ。確実に隙を作つて捕まえる」

西城はアームガンの攻撃をよけながらステルスマードになつた

佐々木

「こぎかしい」

佐々木もすぐにステルスマードになつた

力チ力チ力チカチカチカチカチカチ

西城はステルスマードになつて佐々木が一瞬見失つた隙にXショット

トガンを拾つていた

ギョーン

ボンボンボンボンボンボンボンボン

再び佐々木の周りの地面が吹つ飛んだ

佐々木

「同じ手をくづかよ」

そう言ってその場から飛んだ

キュイイイイイン

佐々木はトガンのチャージ音に気づいた

ドン

だが佐々木はとっさに近くの電灯に捕まり腕で勢いをつけてそれを
避けてしまった

第34話 勝利への兆し

西城

「くそつー。」

佐々木はHガンを避けた後ビルの壁を蹴った
その勢いで西城に近づき右アームで殴りかかった

ガン

西城は間一髪それを避けアームは地面に叩きつけられ
た
すかさず左アームのブレードで斬りかかった

西城
「くつ」

西城はなんとか反応してそれを避けた

佐々木

「これで終わりだ」

続けざまに右アームのブレードで斬りかかった

その頃、和泉達は広場のような所に出た
そこには相川兄弟や小宮山と清水がいた

和泉

「あつ！」

和泉は小宮山達に気づいた

淳

「和泉。後ろにいる奴らは誰だ？新入りか？」

和泉

「ああ、こいつらか」

河内

「河内武士って言います。よろしく」

茨木

「茨木進です。よろしく」

進

「進つて俺と同じじやん」

茨木

「そりなの？意外だな」

淳

「俺は相川淳。こいつらは俺の弟達だ」

そう言つて淳は亮と進を指差した

そういうながら順番に自己紹介をしていった

するとしばらくしてジーンズ星人の大群がやってきた

ジーンズ星人

「ゴーマリイソン」

そう言つてたくさんのジーンズ星人が襲いかかってきた

小富山

「きたぞ」

和泉

「行くぞ」

そう言つと全員Xショットガンを持って大群に向かつていった

ギョーンギョーン

ギョーンギョーン

ギョーンギョーン

ギョーンギョーン

みんなXショットガンを駆使して向かつてくるジーンズ星人をどん
どん倒していくた

河内

「やべー！」

河内はジーンズ星人の攻撃でXショットガンを落としてしまった
そしてジーンズ星人は河内に殴りかかった

ボンボン

するビジーンズ星人の両手が行きなりふつとんだ
それは和泉のXショットガンによるものだつた

和泉はすかさず左手でホールスターからガンツソードを取り出し瞬時に伸ばして片手でジーンズ星人を斜めに真つ二つにした

和泉

「これ使え」

そう言つて河内にXショットガンを投げて渡した

河内

「やるな。おまえ」

和泉

「油断したらやられるぞ」

そう言つて和泉は他のジーンズ星人を倒しにいった

西城

「つおつーー！」

西城はギリギリブレードの攻撃を避けたが体勢を崩してその場に倒れてしまった

佐々木は続けざまに殴りかかろうとした
すると西城は佐々木の膝の間接の部分をスーツのパワーを全開にして蹴り飛ばした

佐々木は思わず体勢を崩した

西城はその間に体勢を立て直して後ろに身を引いた
そして近くにあつた車を両手で持ち上げた
佐々木はその間に体勢を立て直した

西城

「へりえー！」

そう言って佐々木に投げ飛ばした

佐々木はすかさず右アームで殴りとばした

ドカーーーン

すると車のガソリンが引火して車は爆発した

キュイイイイン

するとHガンのチャージ音がなった

佐々木
「しまつた」

佐々木はチャージ音に気づきその場から瞬時に逃げた

ドン

西城の放ったHガンはギリギリ佐々木の左肩にあたった
佐々木は思わず体勢を大きく崩された

キュイイイイン

再びチャージ音がなつた

佐々木
「くつ」

ドン

西城の放ったHガンは完璧に佐々木を捕らえ佐々木は地面に叩きつけられた

第35話 自己犠牲（前書き）

作者から

GANTZ fictionを読んで下さっているみなさんへ
どうも kurorangeです

あまり更新をしていないにも関わらず結構な人がこの小説にアクセスしてくださつていて作者としてはとてもうれしいです
アクセスだけでなく評価していただけるとともにありがとうございます笑
評価するのが嫌な人もメッセージでもなんでもいいんで感想をくださるととても参考になるのでお願いします

ギョーンギョーン

ギョーンギョーン

和泉達はジーンズ星人と戦っていた
淳が河内に近づいてきた

淳

「あいつの事どう思ひへ？」

淳が河内に問い合わせた

河内

「どうつて…」

淳

「あいつはああ見えて俺たちのリーダーなんだぞ」

河内

「あいつがーまだ高校生にみえるやー。」

淳

「あいつは認めちゃいないが俺や小富山達はあいつのことリーダーだと思つてゐる。なぜだ？」

河内

「なぜだ？」

淳

「俺や小富山にもリーダーとしての資質は充分あると俺は思つてゐる
だけどあいつには俺や小富山に足りないものを持つてゐる」

河内

「足りないもの」

淳

「自己犠牲だよ。あいつは人のために自分を犠牲に出来る。今もお前はあいつの自己犠牲のおかげで助かった」

河内

「自己犠牲か……」

その場にいるジーンズ星人は残り一体になつた
和泉はガンツソードを構えた

清水

「和泉決める！」

進

「やれ！和泉」

和泉はガンツソードを振りかぶった

佐々木はHガンの攻撃で地面に叩きつけられていた

キュイイイイン

Hガンのチャージ音がなつた

ドン

再び佐々木は地面に叩きつけられた

ドン

ドン

ドン

ドン

西城は佐々木目掛けてHガンを打ちまくつた

佐々木

「ぐつー！」

西城

「つぶれるー！」

キュイイイイン

ドン

西城は休まずHガンを打ち続けた

佐々木

「ふん！」

西城

「ちつ！」

佐々木は強化スーツの両アームでHガンの攻撃を支え始めた

西城は舌打ちをした

キュイイイイン

ドン

ドン

ドン

ドン

西城は休まずHガンを打ち続けたが佐々木は支え続けた

ミシミシ

佐々木

「ちつそろそろマズいか」

佐々木は小声でいった
強化スースが少し軋み始めた

キュイイイイン

西城はHガンのトリガーを引いた

その瞬間佐々木は自分自身の腕でホルスターからガンツソードを取り出し瞬時に伸ばして西城に投げ飛ばした

西城

「！？」

西城はとつさの攻撃をどうにかよけた

ガンツソードは西城の後ろのビルの壁に突き刺さった

ドン

佐々木は再びHガンの攻撃を支えた

西城は佐々木のとつさの攻撃を避けたせいで体勢を崩してしまった

キュイイイイン

体勢を崩しても西城はHガンのトリガーを引いた

ドン

どうにかHガンを打つたが体勢を崩したせいで佐々木にあたらなかつた

佐々木はいつきに西城と距離を詰めた

佐々木

「くらりえ」

左アームで西城にアッパーぎみに殴りかかった
見事それは西城の腹にあたつた

西城

「ぐはっ！！」

西城の体が少し宙を待った瞬間にすかさず右アームで西城の顔を殴りとばした

ガーン

西城はそのままビルの壁に叩きつけられた

第36話 見学者

西城

「へりー。」

西城（心の声）

「スーツ越しなのに意識が飛びそうだ」

佐々木はゆっくりと歩み寄ってきた

西城（心の声）

「マズい。早く逃げないと」

西城は立ち上がりとした

ガクン

西城は足から地面に崩れるように倒れた

西城（心の声）

「ちつ足にきてやがる。ヤバいな」

西城はそのまま壁に横たわるように座り込んだ

佐々木（心の声）

「ちつ！腕の銃があしゃかになつちました」

佐々木

「まあいい

佐々木は西城と距離を詰めた

西城（心の声）

「終わった

佐々木

「死ね！」

ガーネン

佐々木は右アームで西城の顔面を殴った
西城は意識が半分飛んだ

キュウウウウン

西城のスーツの耐久度が下がって壊れる寸前までいった

西城（心の声）

「ごめん。カレン仇がとれなくて本当ごめんな

西城は走馬灯のように亡きカレンに謝った

西城

「！」

西城の手に何かが引っかかった

西城（心の声）

「なんだろ?」の感触。なんかとても懐かしい……」

佐々木はトドメに左ブレードで斬りかかった
西城はそれを避けられないハズだった

シュン

ダン

だが西城はそのブレードを避けて地面をおもこつきり蹴りその場を
離脱した

佐々木

「！？！」

佐々木（心の声）

佐々木は西城のあまりの俊敏さに驚いた

「なんだ！今の動きわ！」

西城の避けるまでの動作に無駄が全くなかった
そして西城は右腕にガンツソードを持っていた
そのガンツソードは佐々木が投げたガンツソードだった

佐々木

「最後のあがきか！見苦しいぞ！－！」

西城

「……」

佐々木

「お前と俺どじや戦いのキャリアが違うんだよ！今なら謝れば許してやつてもいいぞ！さー俺に命乞いしろ！」

西城

「……」

佐々木

「それが答えか。なら死刑だ！」

佐々木は一気に西城と距離を詰めた

南

「いなーいな星人」

その頃南と速水は西城と佐々木の戦闘している近くにいた

速水

「ああ。あっちの方が騒がしいから行つてみよソザ」

そう言つて佐々木と西城の戦つている場所にいった

南

「なんだ? あいつ? 星人か?」

南は強化スーツをきた佐々木を星人勘違いした

速水

「たぶん違うぞ」

速水は南の問いかけを否定した
速水は戦闘のあとやカレンの亡骸を見て状況をだいたい理解した

速水

「おそらくあのでかい奴があの女を殺したんじゃねえかな。それに怒つてあそこにいる奴がでかい奴と戦つてんじゃねえかな」

速水は西城を指で指した

南

「じゃああの女はあいつの女か?」

速水

「そこまではわからんねえ、あくまでも推測だ」

そのまま速水はじ一つと二人を見続けた

速水（心の声）

「なんだあいつ。雰囲気がすゞぐ落ち着いている」

速水は西城を見て西城が部屋にいる他の誰よりもすゞいと直感した

距離を詰めた佐々木は右ブレードで西城に斬りかかった

第37話 覚醒

佐々木の攻撃を軽い身のこなしで西城は避けた

すかさず横に右手に持つているガンツソードで斬りつけた

佐々木はその攻撃を右ブレードで受け止めた

西城は瞬時ガンツソードの刀身を引っ込めて佐々木のブレードから

ガンツソードを外したあと瞬時に伸ばした

西城は下から斜めにガンツソードを斬り上げた

その攻撃は佐々木にあたった

佐々木

「くっ！」

西城はガンツソードを右手から手離して左手に持ち変えて佐々木に斬りつけた

速水（心の声）

「なんだあの太刀筋！あんな太刀筋これまで見たことないぞ！…」

速水は西城の天衣無縫な太刀筋や動きに驚いた

西城の攻撃は佐々木にあたり瞬時に後ろに回り込み両手でガンツソードを持ち佐々木に斬りつけた

背中にある無数のコードみたいなものの一部が斬り落ちた

佐々木

「くそが！！」

佐々木は振り向きざまに右アームで殴りかかった
その瞬間西城はステルスマードになつた

南

「消えた！」

速水

「なぜだ？」

速水達は西城が消えたのに驚いた

佐々木

「小賢しいマネを！」

佐々木もすぐステルスマードになつた

カンキン

カンカン

キン

ガンガン

速水達は姿は見えないが2人が戦っているのがわかつた

バチバチ

佐々木

「ちつ！」

すると佐々木の姿が見えるよくなりました

佐々木（心の声）

「あの野郎ピンポイントで俺のレーダーを狙つてきやがってーくそが！」

佐々木はコントローラーを西城に破壊されてステルスマードが解除されてしまった

西城はステルスマードのままガンツソードで斬り続けた
佐々木は姿が見えないせいもあって避けるすべがなかつた

佐々木

「うお～！」

佐々木はあからさまにアームやブレードを繰り出し始めた
西城は冷静に隙をついてガンツソードで斬り続けた

速水

「ああなつたら終わりだな」

?

「そうでもないぜ」

速水が佐々木の行動を指摘したら何者かが話しかけてきた
何者かがステルスマードを解除した
それは西だった

西

「あいつをあなどつたら痛い目みるぞ」

速水

「誰だー?お前?」

西

「俺は西、西丈一郎」

南

「いつからいたんだ?」

西

「ほんの数分前からだよ。お前たちよりは先にいたがな」

速水

「仲間われなのか」

西

「さあな、俺にも詳しくわかんねえ。だがあの佐々木つて奴はあなたない。何するかわからんねえからな」

すると今まであからさまに動いていた佐々木の動きが止まった

「ふつ」

佐々木は不適に笑った

西城は佐々木が止まるのを見てガンツソードで斬りかかつた
左アームを斬り落とし続けざまに右アームも斬り落とされた

プショ―――ウ

右アームを斬り落としたと同時に強化スーツの背中にある無数の口
一ドから煙が出てきた

第38話 耐久力

その頃和泉たちは

和泉

「これで終わりか！？」

和泉は広場にいた最後のジーンズ星人を倒した

小富山

「まだ残ってるぞ」

小富山はコントローラーのレーダーを見て言った

和泉

「どこだ？」

小富山

「すぐ近くだ」

和泉

「あっちの方か」

和泉もコントローラーのレーダーを見た
そして敵の位置を確認した

和泉

「一体だけみたいだな。俺が行つてくるよ」

小富山

「この前みたいにボスかもしれないから俺もついてく

河内

「俺もついて行つていいか?」

和泉

「別にいいけど」

そう言って3人はジーンズ星人のいる所に向かつた

その頃西城は

あたりは水蒸気みたいな煙に包まれていた

西城は最後にガンツソードで横に佐々木に斬りつけた

佐々木は強化スーツ」と真つ二つにされた

?

「そこか」

西城はステルスマードで見えなくなっていたが煙のせいでシエルエットが見えていた

西城は後ろから何者かに押さえつけられた

それは佐々木だった

佐々木は強化スーツ」と斬られる前にすでに強化スーツを脱いでいた

佐々木

「やつと捕まえたぞ」

佐々木はスーツの力をフルに使い西城のコントローラーを押さえつけた

キユウウウウン

西城も負けじとスースの力を出すが佐々木の押さえつける力でスースの耐久力が限界まできていた

佐々木

「もうそろそろ限界らしいな」

西城

「……」

西城のスースの耐久度が低いのに氣づくとパワーをどんどんあげていった

西城はコントローラーの破壊を阻止するためにスースの力を使っていたがそれをやめて逃げることに専念した

するとコントローラーが破壊されたが西城は佐々木から解放された

佐々木

「もうあと一撃でお前のスースは終わりだな」

そう言つて佐々木はファイティングポーズを取りボクシングのリズムを取り始めた

佐々木の狙いは西城のスースを壊すことだった

佐々木の頭の中には防御や回避はすでに除外され攻撃のみであった

一定のリズムを刻んだ後佐々木は西城に襲いかかつた

佐々木の怒涛の右と左のパンチを西城はひらりひらりと避けていつた西城は要所要所にすきがあれば右手のガンツソードで斬りつけたが佐々木の隙はあまりに短いため腰の入った攻撃ができなかつた

南

「持久戦だな」

西

「あれじゃ先が見えてる。あのままじゃ西城やられるぞ」

速水

「西城……」

その時速水は西城の名前を始めて知つた

西と南は2人の勝敗が気になっていたが速水の着眼点は違つた

速水（心の声）

「すごい！あの身のこなしに隙をつく的確な攻撃。それに無駄もなく隙ができればどんな体制でも隙をつく。すごい！あんな剣術見たことない」

速水はもう勝敗に関係なくワクワクしてきた

速水（心の声）

「やりたい！あいつと剣で戦つてみたい！」

速水は自然とそういう気持ちになつた

第39話 結末

和泉

「いたぞ！」

その頃和泉たちは最後のジーンズ星人のいる場所についた

ジーンズ星人

「ゴ～マ～リイ～ソ～～ンゴ～マ～リイ～ソ～～ン～」

ジーンズ星人は気分よく歌つていた

小富山

「どうやらただ群れにはぐれてただけみたいだな」

見た目は普通のジーンズ星人だった

ジーンズ星人

「ゴーマリイ？」

ジーンズ星人が和泉たちに気づいた

和泉

「誰がやる?」

和泉が2人に問いかけた

小富山

「俺はどっちでもいいぜ」

河内

「じゃあ俺にやらせてくれ」

小富山が言つた後すかさず河内が言つた

和泉

「いいぜ」

小富山

「気をつけるよ」

河内は武器を持たずにジーンズ星人に歩みよつていった
すると河内はいきなり右手でジーンズ星人を殴つた

ジーンズ星人

「ゴーマリイソン！」

ジーンズ星人は河内に殴られて怒り始めた

佐々木と西城の戦闘はほとんど膠着状態だった
佐々木の繰り出す攻撃を西城は避け続けていた
すると西城は少しよろけた

西城は極度の集中力と佐々木に受けたダメージで少しよろけてしま
つた

佐々木はその瞬間を逃さなかつた
佐々木はよけざまに西城にスーツのパワーを使って右アップバーで
殴つた

キュウウウウン

ドロドロゾロ

その攻撃で西城のスーツが壊れた

西城

「……」

佐々木

「終わりだ」

佐々木はとじめに西城に殴りかかった

西城はガンツソードを両手に持ち替えた

そして殴りかかってくる佐々木に下からガンツソード斬り上げた

佐々木はその攻撃をくらい少しひるんで後ろに下がった

佐々木

「くそ！」

佐々木は攻撃を喰らつたあと西城の方を見た

西城はガンツソードを持って仁王立ちしていた

そして西城の目はギラギラしていて闘争本能まるだしだった

佐々木

「まるで獣だな」

そう言つたあと佐々木は西城に向かつて行つた

佐々木は同じように防御や回避を無視して攻撃だけを繰り出し始めた

西城はスーツは壊れて動きが悪くなつたが佐々木の攻撃の要所要所にガンツソードで斬りつけた

すると佐々木は隙をついて西城の手を蹴り上げた

西城はガンツソードを手放してしまった

すると佐々木は西城を両手で覆つようにつかみ締め付け始めた

佐々木

「ははは、これで終わりだな」

西城は佐々木捕まれながらも悪あがきで佐々木の首を両手でつかんだ
佐々木はそれを少し鼻で笑い締め付けをもっと強くした

ボキボキボキ

西城の背骨の折れる音があたりに響いた

佐々木は西城を離した

西城は地面にそのまま倒れ込んだ

キュウウウウン

ドロドロドロドロ

すると予期せぬことが起きた

佐々木のスージが壊れた

西城は首をつかんだ時たまたま首の丸い所を壊していた

佐々木

「このクソガキが！」

佐々木は怒りホルスターのXガンを取り倒れている西城に向けた

?

「やめる」

すると佐々木はステルスマードの何者かに腕を捕まれた

佐々木

「邪魔すんな」

佐々木はそれが誰なのかすぐに気づいた

第40話 謎の2人組

ジーンズ星人

「ゴーマリイソン！ゴーマリイソン！」

ジーンズ星人は河内にどんどん殴りかかってきた
河内は避けながらジーンズ星人に殴りかかった

河内はだんだんスーツの力のコントロールの仕方がわかりはじめス
ーツの力を最大限に使い始めた

小富山

「初めてにしてはなかなかやるな」

和泉

「そうだな。予想以上にやるな」

小富山はタバコを取り出し火をつけて噴かし始めた

ジーンズ星人

「ゴーマリイゴーマリイソン！」

ジーンズ星人は左手で殴りかかってきた

河内はそれを避けて右手でカウンター気味にジーンズ星人を殴った

ジーンズ星人は後ろによろけた

河内は続けざまにジーンズ星人の腹を殴り始めた

河内

「うおおおおおお！」

右左とジーンズ星人の腹を殴り続けた

河内の怒涛のラッシュにジーンズ星人はなすすべがなかつた

河内は殴るのを止めた

ジーンズ星人はそのまま地面に倒れ込んだ

新宿

ある高層ビルの屋上

スキンヘッドの男

「ああ。もうあと一体になっちゃった」

帽子をかぶつた長髪の男

「仕方ないだろ。あいつら単細胞だからな」

そこには二人組の男がいたスキンヘッドの男は双眼鏡で和泉たちの

様子を伺っていた

帽子をかぶった長髪の男は腕にスナイパー・ライフルを持っていた

スキンヘッドの男

「じゃあ少し手をかしてやるか」

帽子をかぶった長髪の男

「だな」

そう言つと帽子をかぶった長髪の男はサイレンサーのついたスナイパー・ライフルを構えた
照準はジーンズ星人だった

プション

バス

スナイパー・ライフルの弾は倒れているジーンズ星人があたつた

小富山

「？」

和泉

「！？」

和泉と小富山は何かが遠くからジーンズ星人があたつたのに気づいたがそれがどこからかは特定できなかつたするとジーンズ星人はいきなり起き上がつた

ジーンズ星人

「ぐぎやややや」

ジーンズ星人はうなり始めた

筋肉が膨張し始めて体長が三メートルくらいになつた

ジーンズ星人（暴走）

「ゴゴ……ゴゴ……マリイ……マリイ……マリイ……ソン……

河内

「なんだ？」

河内もその異変に気づいた

河内

「何度も倒してやるぜー！」

そう言つてジーンズ星人（暴走）に向かつて行つた

ガン

ジーンズ星人はそれに気づき河内を払いのけた

河内は近くの壁に叩きつけられた

続けざまに河内の足を掴み数回地面に叩きつけて投げ飛ばした

キュウウウウン

ドロドロドロ

河内はスーツが壊れて氣を失つた

和泉

「様子が変だな」

小富山

「確かにな」

そういういながら2人は臨戦態勢を取つた

第41話 最強の男（前書き）

どうやらヤングジャンプ？で GANTZ の過去が小説化されるらしいんですけど、それに和泉や西が出るみたいなんんですけど、自分の書いてるこの GANTZ fiction と被るんで正直このまま書いて行つても意味があるのかなーと最近思い始めています。これから書くシナリオも自分の中ではだいたい決まっていて正直個人的ですけどこれから面白くなつて行く感じなんんですけど…なので皆さんの意見を聞きたいと思います。

皆さんのが続けて欲しいと願つているのなら今まで通り少しづつでも更新して行こうと思つんんですけどそうでないなら次で GANTZ fiction を終わらせたいと思つています。

意見はメッセージでも評価でもなんでもいいんで私に伝わるよつとしてください。
お願いします

第41話 最強の男

西城

「はあはあ俺は何を…」

西城は背骨をおられて地面に倒れ込んでいた

西城

「誰だ…」

西城は佐々木の田の前に強化ステッスをきた何者かに気がつき動けないと
したが背骨が折れていて動けなかつた

西城（心の声）

「俺は何をしていたんだ。あいつに壁に吊しつけられて…思ひ出せ
ない」

?

佐々木

「どうよー。」

「こいつと戦つていいとこを一部始終見たがお前の負けだ。これがなかつたらお前はあいつに殺されてた」

何者かが自分の着ている強化スーツを指差して叫んだ

佐々木

「関係ねえよ。いいからそいじでけ」

やつ言いって佐々木は何者かを避けて行こうとした

？
「……」

すると何者かは佐々木の掴んでいた手にスーツの力で握り始めた

「やめないと叫んでるだろ」「やめ！」

佐々木は思わず持っていたXガンを落としてしまった

佐々木

「わかったよーもつやめだーやめー！」

そう言うと何者かは手を離した
佐々木はそれを払いのけ西城が倒れ込んでいる方とは逆の方に歩いた

西城

「待てよー。」

すると西城が大声で言った

西城

「そいつは生かしておけない今すぐ殺す」

西城はからうじて動く腕でガンツソードを持ち必死に立とつとした
が背骨が折れて下半身は全くゆうことをきかなかつた

佐々木

「だとよー。」

そう言つと佐々木は西城の方へ走つて行つた

「やめろ……！」
？

何者かがまた佐々木を止めた

?

「つぎ俺の言つ」と無視したら俺がお前を殺すぞ！」

104

「わかつた」

佐々木はそのままもともと行こうとした方向へ歩いていった

西城

西城は焦つて体制を崩して地面に倒れ込みガンツソードも手放してしまった

佐々木

「また今度相手してやるよ」

そう言つてその場を立ち去つて行つた

「くそ～～！」

西城は悔しさのあまり地面を何回も叩いた
すると西達が西城と何者かの方へ近寄ってきた

西

「まさかあんたが出てくるとはな」

？
……

何者かは西の問いかけに無言だった

西

「なあ隼人」

速水

「誰だ？ 隼人って？」

南

「俺だよ」

速水

速水

「誰だ？ 隼人って？」

「いやお前じゃねえよ」

速水は南に突っ込んだ

西

「栗原隼人。7回クリアした強者だよ」

隼人

「西！お前勘違いしてるぞ！」

隼人は西に言つたことに突っ込んだ

隼人

「俺がクリアしたのは7回じゃない。10回だ」

第42話 寄生虫

ジーンズ星人

「ゴゴ

…ゴ」

ジーンズ星人（暴走）はそうつめきながら小富山と和泉にゆっくり近づいてきた
近づくと右腕を振り上げた
それに和泉と小富山が気づいた

ガン

和泉と小富山はその場を飛びそれを避けた
和泉は避けると左手でホルスターからX-ガンを取り出した

ギョーン

ギョーン

ボン

ボン

和泉はジーンズ星人にXガンを打つてジーンズ星人にダメージを与えたがるそのダメージを受けた場所は筋肉が膨張してすぐさま治つてしまつた

和泉

「これじゃ火力が足りない」

和泉は着地するとXガンを捨て右手に持っていたガンツソードを両手にもち何度も斬りつけたが与えたダメージはすぐさま筋肉が膨張して修復してしまつた

するとジーンズ星人はどんどん膨張していつた

小宮山

「和泉！…ぞいてろ！…！」

キュイイイイン

すると小宮山はHガンのトリガーを引いた

和泉は小宮山の声に反応してその場から離脱しようとした時ジーンズ星人が右腕で殴りかかってきた

それは和泉にクリンヒットして和泉は吹っ飛ばされて壁にたたきつ

けられた

和泉
「ぐはつ」

キュウウウン

和泉のスーツは壊れる寸前まで耐久力が落ちた

ドン

Hガンの攻撃はジーンズ星人にあたり体の右半分がえぐられた

ジーンズ星人
「マリイまりい」

ジーンズ星人はその場に倒れ込んだ

それを見て小富山はHガンのトリガーを引いた

キュイイイイン

ジーンズ星人のえぐられた部分は筋肉が膨張してすでに治りかかっていた

小富山

「なんて回復スピードだ！」

ドン

また同じようにジーンズ星人の体の半分くらいがえぐられた

キュイイイイン

ドン

ドン

ドン

ドン

小富山は休まず打ち続けた
ジーンズ星人は再生と破壊を繰り返したせいかもとのサイズにもど
りその場に倒れ込んだ

小富山

「死んだか」

そう言つて小富山はジーンズ星人に近寄つていった

ガシャグシャグシャ

すると倒れているジーンズ星人がいきなり暴れるように地面をのた

打ち回つた

小富山はとっさにHガンを構えた

だがしばらくしてジーンズ星人の動きが止まつた

小富山は少し安心して構えるのを止めてあたりを見渡して和泉を探
した

するとジーンズ星人の口から触手のようなものが飛び出し小富山に

襲いかかつた

小富山はとっさに氣づくが避けきれそうになかった

ザツ

すると和泉がやつてきて触手をガンシソードで斬りつけて小富山を助けた

小富山はホルスターからXガンを取り出した

ギョーン

ボン

ギョーン

ボン

ジーンズ星人の頭をうち触手の動きが止まつた

和泉

「やつぱりそうか」

小富山

「完璧にワーム達の寄生虫にやせられてる。それにこんなタイプの寄

生虫ははじめてだ

和泉

「おおかたどこから埋め込んだんだろ。危つく死ぬところだつたな」

小富山

「だな」

すると氣絶していた河内が転送され始めた

和泉

「終わりか」

そつ言うと和泉と小富山も転送されていった

第43話 転送

ゾクゾク

西

「おっ…きたか」

西は転送の時の寒気を感じた

西

「ねえね～」

西は転送された

速水

「なんだー?」

南

「どうなってんだー?」

そつぱんしむ間に2人は転送されていった

隼人
「……」

西城は地面にうつぶせになりながら泣いていた
それを隼人はジーツと見ていた

ゾクゾク

やがて隼人も転送されていった

西城（心の声）

「くそ！くそ！なんでだ！？何で俺はいつも大切な人を守れないんだ！」

西城

「大切な人？」

西城はふと自分が思つた言葉に疑問を持つた
すると走馬灯のように何かが頭の中をよぎつた

西城

「なんだ！？今の」

そつ言つてゐる間に西城は転送されていった

西城は部屋に転送された
部屋にはすでに全員いた

和泉

「これで最後か？」

涼子

「カレンさんは？」

みんなカレンがいない事に疑問を持った

亮

「西、お前なんかしらないか？」

西

「さあな、あいつに聞いてみな」

そう言つて西城を指差した

亮

「西城お前なんか知つて」

西城

「どけ！..！」

亮が西城に問い合わせようとしたら西城が そういうながら亮を払いのけた

西城はそのまま壁に寄りかかっていた佐々木に向かっていった

西城

「佐々木～！..！」

佐々木に向かっていく西城を小富山は止めた

小富山

「どうしたー？なにがあつた？」

西城

「あいつがカレンを殺しやがったんだよ」

淳

「なんだって！？」

「

進

「あこいつにやつたな。いつかやると思つてたんだよ」「みよ

暴れる西城を小富山だけでなく清水も止めに入った

小富山

「落ち着け西城！ 落ち着け！ あまり感情的になるな」

西城

「佐々木～！！！ かかってこいよ！」

西城は小富山の声が全然聞こえていなかつた
佐々木は不適に笑いながら西城を見ていた
すると西城は後ろから肩をつかまれた
西城は振り向くといきなり殴られた
西城を殴ったのは和泉だった

和泉

「頭冷やせ！ あいつを殺したってカレンは帰つてこない。殺すなら
星人しろ！ それにお前があいつ殺したらお前もあいつと同類にな
つちまう。それでもいいのか？」

西城は和泉の言葉を聞き頭が冷えた

和泉

「立て」

そう言って和泉は西城に手を貸した

西城

「ありがとうございました。おかげで頭が冷えた」

西城は立ち上ると和泉に言った

和泉

「ならよかつた」

西城が落ち着いたのを見ると小富山は佐々木の所まで近づいていった

佐々木

「なんだ！？」

小富山は佐々木の真ん前まできた

佐々木

「文句でもあんのか？ああん？やるか？あん時みたいに」

小富山

「グズが！」

小富山は睨みながら言つた

佐々木

「そのクズにボコボコにやられたのは誰かな？」

佐々木は負けじと挑発した

小富山

「……」

小富山は黙つて睨みつけながら元いた場所に戻つた

それぢわ ちいてんを はじぬる

黒い玉に文字が浮かび上がつた

第44話 ワーム（前書き）

頑張ることに決めました。

今の所49話まで書きました。

それとGANTZ fictionはこれから毎週日曜に更新します。

これからも応援よろしくお願いします。

第44話 ワーム

にじくん

3てん

t o t a l 4 0 てん

あと6 0 てんで

終わり

かわうつちへ

6てん

t o t a l 6 てん

あと9 4 てんで

終わり

いばりきけん(笑)

5てん

t o t a l 5てん

あと95てんで

終わり

河内

「6てんつていいのか?」

清水

「そこそこなんじゃない」

りょう

3てん

t o t a l 21てん

あと79てんで

終わり

すすむ

5てん

total 20てん

あと80てんで

終わり

進

「おっしゃー！亮に勝つたぜ！」

亮

「たかが2てんだろ」

進

「totalも差がたかが1てんなんんですけど」

進は亮を皮肉った

亮

「お前ー！」

淳

「やめろー。お前ら

進に殴りかかるとしたが淳が止めに入った

おっせん

15てん

t o t a l 97てん

あと3てんで
終わり

和泉

「おいしいな」

小富山

「つぎがんばるさ」

サイ

10てん

t o t a l 52てん
あと48てんで
終わり

さよみす

9てん

t o t a l 28てん

あと72てんで
終わり

もしむち（笑）

0てん

そこじゅうに見とれすき（笑）

t o t a l 0てん
あと100てんで
終わり

南

「そこじゅうに見とれすきって…お前ホモか？」

速水

「違うわー。」

部屋のメンバーのほとんどがジーッと見た

速水

「いや、ほんと違うから」

みなみ

0てん

やる気なさすや

total 0てん

あと100てんで

終わり

0てん

かせ

total 31
あと69で

終わり

りょうじゅうやん

12でん

total 60
あと40で

終わり

あちし

12でん

total 63
あと37で

終わり

れわれ

18てん

total 22てん

あと78てんで

終わり

茨木

「もう終わりか?」

清水

「まだ和泉が残ってる」

いずみ

32てん

total 50てん

あと50てんで

終わり

淳

「今日のハイスクアか」

亮
「やるな

涼子
「やるな

和泉は採点が終わると涼子の所に行つた

和泉
「あと少しだな」

涼子
「うそ。やつとここまで来れた。これも紫音のおかげ」

和泉
「そんなことない涼子が頑張ったからさ」

涼子

「たぶん。私、紫音と二人に来なかつたらもう諦めてたと思う。ありがとう」

和泉

「……」

和泉は照れて何も言えなかつた

小富山

「隼人！いるだろ！どこだ？」

隼人

「なんだ」

隼人はステルスマードのまま小富山に話しかけた

小富山

「今回ワームが出た。それに新しい寄生虫もやつら使ってきていた

隼人

「ふうん。あいつら生きてたのか」

小富山

「また前みたいにミッショーン中や日常に干渉してくるぞ」

隼人

「だから？関係ないだろ」

そう言つと隼人は部屋を去つて行つた

淳
「なんだ? ワームつて?」

西
「ふふ」

西が不適に笑つた

進
「なんか知つてそりだな。教えろ!」

西

「やだね。ただで教えるほど俺はバカじやない」

進

「てんめえ。中坊の分際で」

そう言つて西に殴りかかった

だが西はそれをステルスマードになつて避けた

西

「詳しく述べたきや小富山か和泉に聞きな」

西が西は部屋を出て行つた

淳

「なんだ? ワームって」

淳が小富山に聞いた

小富山

「やつらは簡単に言つと寄生虫だ。より高い知能を持った生物に寄生し、支配する。ようは人間に完全に寄生した存在をワームと言つ

河内

「じゃあさつきていた新しい寄生虫ってなんだ?」

小富山

「それを説明すると長くなる。奴らの扱つている寄生虫は奴ら自身が作ったものだ。ワーム事態は自分たちに寄生しているような寄生虫は作れない」

速水

「どうしてとかさっぱりわかんねえ」

和泉

「奴ら自身に寄生しているのがオリジナルでそれ以外は偽物だ」

亮

「オリジナルと偽物があるのか」

小富山

「オリジナルはマザーからしか産まれない。それに人間にはオリジナルじゃないと寄生されない」

進

「マザー？」

淳

「なんでそんな詳しいんだ」

和泉と小富山に言った

小富山

「……」

小宮山が黙つているのをみて和泉が口を開いた

第45話 決意

和泉

「それは俺たちは奴らと戦つてきただからだ」

淳

「なんで戦つてたんだ？」

小富山

「狩るものと狩られるもの。俺たちが星人を狩るものならやつらは俺たちを狩るものだから戦つてた」

清水

「なんで俺らを狩りに来るんだ」

和泉

「じゃあなんで俺らは星人を狩るんだ？それと同じことだぞ。一言で言つと俺たちが邪魔みたいだな」

河内

「やつらも星人なのか？」

小富山

「そこまではわからない」

和泉

「やつらは組織ぐるみで襲つて来る。知能も高いからかなり手強い」

西城

「……」

小富山

「だいぶ前に隼人がやつらのボスのマザーって奴を倒してワームどもは壊滅したはずなんだが……」

佐々木は今の話を聞くと部屋を出て行つた

和泉

「これから奴らに襲われるかもしれないから日常でもスースを持つて帰つた方がいい。だけど次のミッションで忘れないようにスースは1人一着しかないから」

それを聞くとみんなどんどん部屋を去つて行つた

最後に残つたのは西城だった

西城

「……」

西城は黒い玉をジーッと見ていた

「メモリーの中から人間を再生できる」

西城の脳裏にこの言葉がよぎった

西城

「とればいいんだろ！ 一〇〇てん」

そう言って部屋を出て行った

西城（心の声）

「取つてやる何度も何度も大切な人を守れるくらいの力を手に入れるために…」

そいつ聞いて西城は家に帰つて行つた

次の日

西城はいつも通り制服に着替え家を出て行つた
学校につくと全校集会みたいなものがあり校長先生が明日から春休みという話などを話していた

二岡

「長いよな～校長の話」

隣にいた二岡義行が言つた

西城

「ああ」

西城はそっけなく言つた

体育教師

「そこ無駄話するな

二岡

「はい！すいません」

集会が終わり教室に戻り、3時限授業を受けたあと学校が終わった

二岡

「帰ろうぜー。」

西城

「おっ！」

そう言って2人が教室を出て廊下を歩いていると担任とすれ違った

担任

「おっ！西城！お前春休み補習だぞ！」

西城

「補習ですか？」

担任

「2ヶ月も学校来てなかつたんだからな。ああそう二岡お前も補習だぞ」

二岡

「俺もすか！」

担任

「当然だろー！赤てん何個取つてると思つてるんだ」

二岡

「はい

そう言つて2人は帰つて行つた

西城

「わるい。俺ちよつとよゐとこあるから

西城はしばらく歩いたあと二岡に言つた

二岡

「ん？彼女か？」

二岡が笑いながら言つた

西城

「そんなんじゃねえよ」

一岡

「わかつたよ。先帰つてゐわ。じゃまた補習で会おうぜ」

西城

「おひ。じゃあな」

そう言つて一岡は帰つていつた

西城はそのまま黒い玉の部屋のあるマンションまで行つた
そして黒い玉の部屋のドアの前まできた

ガチャガチャ

黒い玉の部屋のドアノブをひねるがカギがかかつていて入れなかつた

デンデンデン

西城

「ガンジーはやくしるーせやく戦わせりーガンジーー」

しづらへ回じよつな」としていたら他の部屋のマンションの住人

が出てきたので急いでその場を立ち去った

西城

「へやー。」

西城は押さえきれない気持ひを胸に出して呟いた

第46話 補習

一週間後

西城と二岡は数学の補習のテストを受けていた

二岡

「うーん」

二岡は頭をかきながらテストを受けていた

西城

「うーん」

西城はすでにテストを終えて熟睡していた

数学教師

「はい。終わり～」

そう言って数学教師は2人のテストを回収した

西城

「じゃあ俺たち帰つていいくすか」

数学教師

「いいわよ。テストは明日返すから」

二岡

「はい」

ガラガラガラ

そう言って2人は教室を出て行った
2人が出てくと数学教師は2人の採点をした

数学教師

「二岡君は60点かギリギリね。西城くんは」

数学教師は西城のテストを採点して行つた

数学教師

「100点」

数学教師は少し驚いた

一岡

「じゃ帰るか

西城

「俺まだ体育の補習あるからちょっと待つて」

一岡

「体育つてお前ついてないな。あいつの補習は鬼だつて聞いたぞ」

西城

「おひ。じゃあ待つてうよ」

西城はそつ言いつと職員室に行つた

体育教師

「おひ。きたかーじゃあ補習始めるか

西城

「なにやるんですか?」

体育教師

「グランド百周か一重跳び連続五百回」

西城

「それかなりきつくないですか」

体育教師

「はは。なら先生の球を打てたらなしにしてやつてもいいぞ」

体育教師は冗談混じりに言った

西城

「先生の球を打てばいいんですか?」

西城は余裕そうに言った

体育教師

「冗談だよ」

笑いながら言った

西城

「やつましょいよ」

西城は本気だつた

体育教師

「いいがお前が負けたらグランド千周だぞ」

西城

「いいですよ」

そう言つと2人はグランドに出て行つた

全野球部員

「ちわーす」

体育教師が来ると野球部員は全員あいつした

野球部部長

「どうしたんですか？顧問」

体育教師

「ちょっとグランド借りるぞーあとピッチャー以外全員守備につけ」

全レギュラー野球部員

「おー！」

返事をするとレギュラーはすべて守備についていた
体育教師はグローブを持ちマウンドに上がりるとキャッチャーを座ら
せたり、3塁走者に

「おし！いいぞ！」

西城は学ランを脱ぐと野球部員からバットとヘルメットを受け取った

「お前止めといたほうがいいぞ。ああ見えて顧問は甲子園にも行つたことのある本格派だぞ」

西城がバッター・ボックスに入ろうとするとキャッチャーが話しかけてきた

西城 「過去の話だろ」

「どうなつても知らないぞ」
キャッチャー

体育教師

「勝負は一打席勝負だ。アウトになつたらおまえの負けだ。いいな」

西城

「……」

西城は集中した

審判野球部

「プレイ」

体育教師は第一球を振りかぶつてなげた

スパン

審判野球部員

「ストライク！」

キヤツチヤー

「止めるなら今のうちだぞ」

キャッチャーはボールを返しながら言った

西城

「……」

スパン

審判野球部員

「ストライク！」

第二球も同じように豪速球だった

西城

「タイム」

西城はタイムをとった

西城
「立つて」

西城はキャッチャーに立つよつて言つた

キャッチャー

「ああ」

西城

「ちょっとスイング見してくれ」

そう言ってバットを渡した

ブンブンブン

キャッチャーはマスクをとると、3回振つした

キャッチャー

「ひつか?」

西城

「ありがとう」

ブンブンブン

西城はバットを返してもうひとつ軽く素振りをした

西城

「OK」

審判野球部

「プレイ」

体育教師

「ふふ」

体育教師は鼻で笑った

体育教師は第三球を振りかぶって投げた
それは今までで一番速い球だった

力キ——ン

キヤツチャ一

「マジかよ

キヤツチャ一は立ち上がりマスクを取つた
金属バットのきれいな音が鳴りボールは場外に持つていかれた
西城はダイヤモンドを周りホームベースを踏んだ

西城

「先生。これで補習はキャラですか？」

体育教師

「ああ」

体育教師は軽い放心状態で言った

西城はヘルメットとバットを返して脱いだ学ランを持つてグランドをあとにした

西城

「おっ。待ったか？」

西城は校門で待っていた一岡に話しかけた

一
二

「おう。もう終わったのか！はやかつたな」

西城

「じゃあ帰るか」

二岡

「ちょっとまで。今体育館に剣道の名門校がきてるんだとか。ちよ
つと見てくか

西城

「いいぜ」

そう言つて2人は体育館に行つた

第47話 剣道（前書き）

更新が遅れました

申し訳ないです

これからもしつかり更新していくでよろしくお願いします

第47話 剣道

2人は体育館につくと二階みたいな所に上がったあたりには同じようなギャラリーがすこしいた

剣道部員

「メン！」

体育館では練習試合みたいなものが行われていた

ギャラリーA

「おい。あれだよ。全国大会で優勝したやつって」

ギャラリーAは指を指しながら言った

ギャラリーB

「マジかよ！」

二岡

「へ～全国大会優勝者もいるのか

剣道部員A

「おい！もつ5人抜きだぞ」

剣道部員B

「それも内のレギュラー全員だぞ」

全国大会優勝者はレギュラー全員を倒したあと頭に着けた面を取りはずした

西城

「あいつ」

二岡

「んつ？ 知り合いか？」

西城

「いや。 なんでもない」

西城はその顔に見覚えがあった

速水

「他にやりたい人いる？」

速水の問いかけに拳手するものがいなかつた

速水

「誰もやらないのか

そう言つて軽くあたりを見渡した

速水

「あつ！」

速水は西城に気づいた

そのまま速水は竹刀を2つもち西城の方まで行つた

速水

「あんた相手してくれよ」

そう言つて2本の内1本を西城に渡した

二岡

「へつ？」

西城

「剣道なんてやつた」とないぞ

速水

「相手してくれる奴がいないんだよ」

一岡

「やつてみるよ」

西城

「……わかつたよ」

西城は下に降りて剣道の胴着に着替えた

一岡

「頑張れよ！西城！」

剣道部員B

「あれ？だれ？」

剣道部員C

「B組の西城だろ。行方不明になつてた

剣道部員A

「ふうん」

速水は再び面を着けた

西城も面を着けて2人は向き合つた

審判

「蹲踞」

審判の蹲踞の合図で速水はしゃがんだ
西城も見よう見まねでしゃがんだ

審判

「はじめ」

最初はお互い両手で竹刀を持ちながら相手の出方を探つていた

速水

「てあーーあー！メーン！」

速水は上段から竹刀で鋭い一撃をくらわしたが西城に軽々避けられてしまつ

名門剣道部員A

「おい！あいつ速水の一撃を軽々避けたぞ！」

名門剣道部員B

「何者だ。」

速水

「てあーーあ

速水は西城に鋭く竹刀を振り続けた

だが西城はそれを避けたり竹刀でなぎ払つたりした

名門剣道部員C

「速水が押してるぞ！」

速水（心の声）

「押してるはずがない。俺は奴に一度も触れてない

速水は鋭く竹刀を振つた

それを西城は竹刀でなぎ払つた

その瞬間速水は西城に近づきつぱぜり合いになつた
2人はしばらく競り合い気を抜けばどっちに転がるかわからなかつた
すると西城はつばせり合いを止め後ろに引いた
その隙を速水は見逃さなかつた

速水

「どへーいー」

速水の横の鋭い一撃が西城を襲つた
だが西城はその一撃を竹刀で強くはじくと凄まじい速さで速水の面

を叩いた

続けて肩、胴、足あらゆる部位に竹刀を打つた
すべてクリンヒットして速水は後ろにのけぞつた

西城

「はあーあ

西城はそう言って面をとると胴着を脱ぎ始めた

審判

「何をやつてゐる?」

西城

「いや。勝負が決まつたから脱いでるだけだけど」

審判

「一度も声を発していなかつたから有効打は一つもなかつたぞ。それに反則打もあつたぞ」

西城

「なら俺の負けでいいよ」

そう言つて西城は体育館をあとにじり出した

速水

「待て！」

西城は速水の声を無視して一岡と体育館を出て行つた

速水

「くそー！」

速水は悔しさのあまり竹刀を投げ捨てた

一岡

「すゞかつたな！初めてとは思えなかつたぞ」

西城

「そりか？かなりぎこちなかつたる！」

一岡

「そんなことなかつたぞ」

話しながら2人は学校を帰つて行つた

第48話 かつぱ星人（前書き）

さあついにきました！

かつぱ星人！

今の所考えてきている星人の中でも3本の指に入るくらい好きです。

それだけにしつかりした内容にして行きたいと思います。

第48話 かつば星人

二岡

「はあ～今日から学校か」

西城

「そうだな」

西城の学校は春休みが終わり新学期を迎えた

西城

「新入生入ったんだろう？」

二岡

「おう。話によると結構かわいい子入つたらしいぜ」

2人は話しながら教室に入った
そして学校が終わり2人は下校し始めた

二岡

「さつき覗いてきたけどやつぱり今年の新入生かわいい子いっぱい
いるわ」

西城

「マジかよ」

2人は話しながら校門近くまできた

二岡

「マジ。マジ。今度一緒に見に行こっぜ」

ドスツ

すると西城は下校中の新入生とぶつかった
その新入生はぱつとしないどこにでもいそうな新入生だった

西城

「ごめんな。大丈夫か?」

西城が話しかけたがその子はすぐに起き上がりすぐに帰ってしまった

二岡

「無愛想なやつだな。行こうぜ」

西城

「おう」

2人はそのまま帰つて行つた

二岡

「じゃあまたな」

西城

「おう。またな」

2人はいつもの所で別れた

西城

「ただいま」

西城は家につくとすぐに一階に上がつた

西城

「母
智也。」
「ほんわ？」

「食べる」

西城はそう言ひて一階から降りるど、ほんを食べて自分の部屋に行つた

西城「はあ。食った。食った」

そう言つてベットに横になつた
すると眠気に襲われて寝てしまつた

西城

ゾクゾク

西城はしばらく寝た後寒気に襲われた

西城

しばりくじて金縛りにあい西城は転送されて行つた

ジジジジジ

部屋にはメンバーがほとんどいた

ジジジジジ

西城に続いて和泉が転送されてきた

和泉

「久しぶりだな」

西城

「そうだな」

女子高生A

「……よ？「うちら死んだ？よね？」

女子高生B

「さあわかんない」

男子大学生A

「東京タワーがあると言つことは東京だよな？」

部屋には前回生き残ったメンバーと女子高生2人と男子大学生3人がいた

あ～た～らし～いあ～さがきた
きぼ～うの
あさーが

すると黒い玉からラジオ体操の音楽が流れた

男子大学生B

「なんでラジオ体操？」

すると黒い玉に文字が浮かんできた

てめえ達の命は
無くなりました。

新しい命を
どう使おうと
私の勝手です。

という理屈なわけです。

女子高生A

「やっぱり私たち死んだんだ」

女子高生B

「でも生きてるじゃん」

てめえ達は今から
この方をヤツつけに行つて下ちい

かつぱ星人

特徴

つよい

生臭い

好きなもの

キュウリ

おさら

口ぐせ

しゃーあしゃーあしゃーあ

第48話 かつば星人（後書き）

今週は2話掲載です。

時間を置いてまた更新するんによろしく（ ）（ ）

それと評価していただけるとありがたいです（^○^）

第49話 河川

ガシャン

すると黒い玉が開きこれまでいたメンバーはスー^ツに着替え始めた

河内

「お前たちも着替えた方がいいぞ」

河内は新しくきた5人に言つた

男子大学生B

「どうする？」

男子大学生C

「着替えとくか」

そう言つて男子大学生たちも着替え始めた
それを見て女子高生たちも着替えはじめた
西城が着替え終わると速水が西城に近づいてきた

速水

「……」

速水は西城を静かに睨みつけた
すると西城は転送され始めた
そしてぞくぞくと転送されて行つた

ジジジジジ

西城

「こゝは？多摩川」

西城はあたりを見渡した
そこは多摩川の橋の上だった

カシャン

西城はコントローラーを開いてレーダーを見た

西城
「近いのはこゝか？」

西城はレーダーを見て言った

西城

「よし！」

西城はそつ言つて敵のいる一力所にいった

すると西城が転送された場所にぞくぞくと転送されてきた

清水

「今日は多摩川か」

小富山

「あれ？ 西城がいなーいな」

和泉

「先に行つたんだろ」

小富山

「そつか」

和泉

「じゃあ行こうぜ」

そう言って相川3兄弟を残してそれぞれ散つて行った

進

「俺達も行くか?」

淳

「どうあえず一服してからいくか

シユボ

そう言って3人はタバコに火をつけた

淳はしばらく吸ってタバコの火を足で消した

淳

「いくか」

亮、進

「ああ」

そう言つて2人はタバコ火を足で消した

ペタペタペタペタ

すると何かが近づいてくる足音がした

淳

「！」

それはかつぱ星人だつた

かつぱ星人の姿は肌の色は緑で背中には甲羅のようなものがあり頭に皿がある想像した通りのかつぱであった

亮

「きたか！」

淳

「やるぞ！」

3人はそれぞれ武器を取つた

その頃西城は多摩川の土手を歩いていた

西城

「いたー。」

すると土手を降りた所にかつぱ星人がいた
西城は土手を降りかつぱ星人に近づいた
すると近づいてくる西城にかつぱ星人は気づいた

かつぱ星人

「しゃーあしゃーあしゃーあしゃーあ

いきなり「デカい鳴き声をした
すると別のかつぱ星人が集まってきた

西城

「ちつ」

西城は三匹のかつぱ星人に囲まれた

その頃新しくきた5人は

男子大学生A

「外に出れたからこのまま帰ろつぜ」

男子大学生C

「そうだな。君達も一緒行こうよ」

男子大学生B

「どうする？」

女子高生B

「どうする？」

女子高生A

「行こうよ」

男子大学生B

「決まりだな」

そう言つて5人は帰り始めた

「ちょっと待つた」

?

すると何者がステルスマードの状態で話しかけてきた
そして何者はステルスマードをといた
それは西だった

西

「お前達にいい話があるんだよ」

西は意味深な事を言った

第50話 目(前書き)

祝50話()

いつもでいたのも皆さんのおかげです。

第50話 皿

相川3兄弟はそれぞれXショットガンを構えた

かつぱ星人

「しゃーあしゃーあ」

淳

「打て！」

ギョーンギョーンギョーン

かつぱ星人は素早く移動し3人の攻撃を軽々避けた

進

「素早いぞ！こいつ！」

亮

「ちつ！」

ギョーンギョーン

負けじと亮と進はXショットガンを打つた
だがかつぱ星人が素早く全くあたらなかつた
するとかつぱ星人は3人に素早く近づいてきた

淳

「固まるな！散らばれ！」

3人は一部に固まらずバラバラに散らばつた
するとかつぱ星人を囲むような状態になつた

ギョーンギョーンギョーン

3人はためらわずかつぱ星人を打つたがかつぱ星人は素早くそれを
避けてしまつた
そして避けると同時に進に近づいた

進

「なつ」

かつぱ星人は進に向かって右手で引っ搔いてきた
進はとつさに避けたがその攻撃は左肩にかすつた
するとスースが斬れて左肩に軽く引っかき傷が出来た
そしてかつぱ星人の攻撃で橋の手すりのようなものが綺麗に切れた

進 「痛つて~」

進はとっさに自分の左肩を抑えた
かつぱ星人は続けざまに進に襲いかかろうとしたが亮が進に近づき
肩を抱えて進を移動させカバーした

亮 「大丈夫か!~?」

進 「今回の敵スースがきかないぞ!~」

進はスースが聞かないことに驚いた

淳 「ちつ~」

淳は軽く舌打ちするとステルスマードになつた

シウン

淳はXショットガンを捨てホルスターからガンツードを取り出し
刀身を出した
そしてステルスマードのまま両手でかつぱ星人に斬りかかった

淳
「なに！？」

淳の攻撃は簡単に避けられてしまった
かつぱ星人は避けたと同時に淳に左手で引っ搔いてきた
淳はそれを一步身を引いて避けた

淳
「ちっ！こいつステルスマードでも俺の姿が見えてやがる！」

するとかつぱ星人の背後から亮がつかみかかった

亮

「かつぱっていったら弱点は皿だろー。」

ガン

そう言つて亮はスーツの力を全開にして掴みながらかつぱ星人の皿を殴つた

亮
「痛つて〜」

亮は皿を殴つたがあまりに硬くて逆に拳の骨が折れそうなくらいだ
つた

亮は思わずかつぱ星人を離してしまつた

淳
「亮！危ない！」

亮
「えつ？」

ガツン

するとかつぱ星人は亮に近づき頭の皿で思いきり頭突きをした
亮は頭から少し垂れるように血が出るとその場で氣を失い倒れ込んだ
かつぱ星人はどめを刺そうと倒れている亮に襲いかかつた

ギヨーン

すると進が遠くからXショットガンを打つた
かつぱ星人はそれに気づき軽々避けてしまった
淳はかつぱ星人の避けざまにガンツソードで斬りつけた
かつぱ星人はそれをしゃがんで避けた

プシュッ

すると進はホルスターからYガンを取り出しかつぱ星人に向かって
打った
かつぱ星人はYガンのアンカーが飛んで来るのを見てとっさに避けた

進

「無駄だ。もうロックオンしたからな！」

キュン

キュン

キュン

するとホームингしてかつぱ星人にあたりYガンのアンカーに捕ま
つてしまつた

第50話 皿(後書き)

今53話を執筆中ですがしばらく休載します。

また書きたまつたら連載します(^〇^)

第51話 3匹対1人（前書き）

kuroneganeからお願いがあります。

ヤングジャンプで連載されていたGANTZ/MAINASUを読んだ人にこの作品と比較して感想を書いて欲しいと思います。

自分は全く読んでいないので率直な感想が欲しいでお願ひします。

第51話 3匹対1人

西城

「ちつ。 困まれたか」

西城は軽く舌打ちをして言った
先に攻撃を仕掛けてきたのはかつぱ星人たちであつた
まず一匹目のかつぱ星人が爪で襲いかかってきた
それを西城がすかさず避けると二匹目も爪で襲いかかってきた
西城はそれによけると手に持っていたXショットガンを構えた
だが三匹目が皿を向けたまま突進してきた

ギヨーン

西城はとっさに狙いを変えて三匹目の皿にXショットガンを打った
そして向かってくるかつぱ星人をギリギリで避けた

西城

「なに！？」

タイムラグがきても何も起きないことに西城は驚いた

西城

「なんて頑丈な皿だ」

三匹のかつぱ星人はそのまま西城を囲みながら攻撃し続けた
西城も負けじとそれを避け続けた

西城

「！」のままじやうぢがあかない

ドン

そう言って行動に移り、したが橋の柱に背中があたつた

西城

「しまつた」

かつぱ星人はただ攻撃していただけではなく柱まで西城を誘導して
いた

かつぱ星人

「しゃーあしゃーあ」

三匹は不気味に西城に歩み寄ってきた

すると二匹が同時に爪で襲いかかってきた

それを西城はしゃがんで避けた

柱にはかつぱ星人の爪あとがついた

そして西城はしゃがんだまま前転して柱から離れた

西城が立ちあがると真ん前に三匹目のかつぱ星人がいた

かつぱ星人

「ぶつぶぶ」

するととかつぱ星人は口からゲロみたいなものをはいた

西城はとっさにメショットガンを盾にしながらそれを避けた

西城は避けたあとかつぱ星人たちから距離をとった

シユウウウウ

するとメショットガンがさつきのゲロみたいなもので溶け始めていた

西城
「！」

西城はとっさにメショットガンを手放した

西城

「今日はなかなか手強いな」

そう言いつとホルスターからガンツソードを取り出した

シュン

ガンツソードの刀身を伸ばすと両手で持つて構えた

西城

「フウウウウ」

西城は深く深呼吸した

その頃和泉は涼子と河内と行動していた
3人は土手の下の舗装された道を歩いていた

河内

「100点を取ると何が起こるんだ?」

和泉

「そりいえば言つてなかつたか」

和泉は100点めにゅーの三択を河内に説明した

河内

「そりか1番で部屋の呪縛から解放されるのか

和泉

「そうだ。 そのために俺たちは頑張ってるんだ。 な。」

涼子

「うん」

河内

「そりか」

涼子

「河内さんほどいるんですか」

河内

「俺？俺は……」

すると前方に星人らしきものがいた
3人はそれにゆっくり近づいていった

涼子

「なんだろこれ？」

和泉

「ウミガメ……？」

河内

「いや。ここ川だろ」

そこには甲羅にこもつたウミガメくらいの亀がいた

第52話 甘い歌（前書き）

みなさんお久しぶりです
今から時間をおいて10話連続掲載をしていきます
お楽しみに（^ ^）

第52話 甘い罠

男子大学生C
「いい話？」

男子大学生A
「なんだ？」

男子大学生は西に問い合わせた
西は男子大学生たちが問い合わせてくると少し笑みを浮かべるとすかさず答えた

西

「この地球には人間にばれないように犯罪者宇宙人が入り込んで生
活してるんだ。僕たちは日本政府の秘密機関にスカウトされた。だ
からこれからその宇宙人を倒しに行くんだ」

女子高生A
「犯罪者宇宙人？」

男子大学生B

「そんな奴ら倒して俺たちに何のメリットがあるんだよ」

すると西は近くにいた女子高生Bに耳打ちしながら「そり何かを話した

女子高生B

「ううそー賞金一千万!!」

西

「あああ。いつちやつたよ」

男子大学生A

「一千万ってなんだよ?」

女子高生A

「えっ! なになに? 賞金? なんででるのよ?」

西

「実はうちのお父さんプロゲーラーなんだ。一千万はゲームの賞金」

西以外の周りにいるもの

「ゲーム?」

西

「実は日本政府の協力をもとにアメリカのケーブルテレビと共同製作でまあもともとはエール大学の学生が考えた企画なんだだけね」

女子高生A

「なにがなんだかよくわかんない」

男子大学生A

「とりあえずその犯罪者宇宙人を倒せば賞金がもらえるってことだろ」

西

「簡単に言えばそうだな。これみてみて」

西はいつのまにかコントローラーのレーダーを見せた

西

「あっちのほうにいるみたいだから行つてみなよ」

西はレーダーを見ながら星人のいる方角を指差した

男子大学生B

「お前は行かないのか?」

西

「俺はいいんだよ」

すると西の着ている制服の内ポケットからなにかをチラッと取り出した

女子高生A

「嘘！」

男子大学生C

「まじか」

それは百万円くらいの札束であった

西

「僕はいいんだよ。前回賞金手に入れたから」

男子大学生A

「おい！マジかよー早く行こうぜー！」

男子大学生B

「おう！行こうぜー！」

そう言つと男子大学生と女子高生達は西が指差した方角へ走つてい
つた

西
「くシくシくシくシくシ」

西は男子大学生たちが遠ざかるのを見ながら笑い始めた

パラパラパラパラ

西

「こんなので騙されるなんてな」

西は札束を取り出すとパラパラと札束を鳴らした

西の見せた札束は一番上と下が本物の一円札であとはすべて新聞
紙だった

西

「さて。俺も行くか」

すると西はステルスマードになり男子大学生たちの行つた方角に向かつていった

第53話 3秒

タタタタ

西城はガンツソードを両手に持つてかつぱ星人に向かっていくと一匹目のかつぱ星人に横からガンツソードで斬りつけた

カツパ星人は後ろに退きそれをよけた

西城「ちっ！」

西城は舌打ちをすると続けざまにガンツソードで縦に斬りつけた

ガキン

カツパ星人は西城の攻撃を頭の皿で受け止めた

キュイイイイン

するとどこからかHガンのチャージ音がなった
西城はとっさにその場を離れた

ドン

カツパ星人たちもそれを飛んで避けた

タタタタ

すると西城はカツパ星人が避けている隙をついてガンツソードで斬りつけた

一体のカツパ星人の首が飛ぶと一連の動作で残りのカツパ星人にも

ガンツソードを斬りつけた

一体は体が半分に斬られもう一体は首から斜めに切り裂かれた

西城はカツパ星人を倒すと土手の上を見上げた

西城「誰だ！」

? 「俺だよ」

西城「お前は」

その頃相川兄弟は

カツパ星人「しゃーあ

カツパ星人はそう言うとヤガンのアンカーを引きちぎり呪縛から逃
れた

進「くそが！」

するとその隙をついて淳がガンツソードで斬りつけた

カツパ星人はそれを避けると3人のいる橋の上から逃げて行つた

進「まで！！」

淳「よせ」

進がカツパ星人を追いにいこうとした所を淳が止めた

淳「逃げる物はおうな

進「でも」

淳「今は亮が気絶している、まともにやるにはリスクが高い」

進「わかった」

そう言つと進はカツパ星人をおうのをやめた

カツパ星人「しゃーあしゃーあしゃーあ

逃げたカツパ星人は住宅街のような所を歩いていた

カツパ星人「しゃーあー！」

するとカツパ星人はステルスマードになつてゐる強化スーツをきた
誰かに気づいた

? 「俺が見えるのか」

カツパ星人「しゃーあしゃーあ

カツパ星人は鳴き声をあげながら何者かに襲いかかろうとした

? 「お前は…3秒だな」

何者かは少し考えると自分の腕についている腕時計のようなものを
いじつた

ギュインギュインギュインギュイン

キュン

それは一瞬の出来事だった
何者かは凄まじい速さで動きカツパ星人をバラバラに切り刻んでし

キュンウウウウ

1

2

3

まつた

? 「今回もそう対したことないな」

カツパ星人「しゃ……しゃ……しゃ」

カツパ星人はズタズタに切り刻まれたが胴体と首はかろうじて残つ
ていた

? 「あとは好きにしる」

そう言ってズタズタに切り刻まれたカツパ星人の頭を持ち遠くに投
げ飛ばした

第54話 龜

西城「清水！」

Hガンで西城を援護したのは清水だった

西城「危うく巻き添え食らう所だつたぞ」

清水「ワルい、ワルい、でもお前なら避けれると思つてたぞ」

清水は笑いながら西城に言つた

清水「そつだごつせなら一緒に行動しないか？」

西城「別にいいけど俺の邪魔はするなよ」

清水「わかつたよ」

その頃和泉たちは

涼子「星人？だよね」

河内「たぶんな」

そういうながら河内はXショットガンで亀の甲羅を軽く叩いたが全く反応がなかった

和泉「敵の反応は出てるな

和泉はコントローラーのレーダーを見た
すると亀からは敵の反応が出ていた

河内「おとなしい今がチャンスだろ！」

和泉「そうだな」

すると和泉と河内はXショットガンを構えかめ星人に照準を合わせた

それにつられて涼子もXガンを構え照準を合わせた

和泉「せーの！！！」

ギヨーン
ギヨーン
ギヨーン

3人は同時にかめ星人に向けて打った

.....
.....

だがタイムラグがきても何も起きなかつた

和泉「なんだ！？？」

河内「故障か？」

涼子「そんなはずないよ」

そう言って涼子は試しに地面にXガンを構えた

ギョーン

ボン

すると地面の一部が吹き飛んだ

涼子「ほり」

河内「どういひことだ？」

するとかめ星人はゆっくりと甲羅から首を出すと足と尻尾を出した

和泉「故障じゃない！きかないんだ」

和泉はとっさに危機を感じしホルスターからガンツソードを取り出した

シウン

とつたに伸ばすと亀星人に斬りかかった

バチーン

その前に和泉はかめ星人の尻尾にはじき飛ばされた

和泉「くつー！」

はじき飛ばされると和泉はとっさに体制を立ち直した

河内「くらえ！」

そう言つて河内はXショットガンをかめ星人に構えた

バチーン

バチーン

河内「くつ！」

涼子「きやあ！」

すると河内はXショットガンをはじかれ遠くにとばされてしまった
同様に涼子もXガンを遠くにとばされてしまった

バチーン

続けざまにかめ星人は尻尾で2人をはじき飛ばした
かめ星人は3人を弾き飛ばすと回りを見渡した
かめ星人は寝ぼけているのか3人に全く気づかず無意識に3人を弾

き飛ばしていた

かめ星人は近くの草むらまでのしのし歩いていくと草をムシャムシ
ヤ食べ始めた

その間に河内と涼子は体制を立て直した

和泉「気づいていないのか？」

その間もかめ星人はムシャムシャ草を食べていた

和泉「舐めやがって！」

すると和泉はガンツソードを持ってかめ星人に向かつて行つた

第55話 高速スピン

淳「おー…亮…起きる…おー」

淳は亮の頬を平手で叩きながら言った

亮「んんっ…あにゃ」

亮はゆっくりと畳をあけ戻がついた

亮「星人は?」

淳「逃げてつた」

亮「そうか」

やつぱりと幌はゆっくりと立ち上がった

進「大丈夫か?」

進は心配がつに亮に言った

亮「ああ、なんとか」

亮は頭を少し手で抑えながら言った

ヒヨ~~~~ン

ドン

進「いて……！」

すると何かが遠くから飛んできて進にあたった

淳「なんだ？」

淳が進の方に近寄った

淳「星人！もうボロボロじゃないか」

飛んできたのはカツパ星人だった
カツパ星人は何者かに切り刻まれてボロボロだった

カツパ星人「しゃ……しゃ」

進「いてーな」

そう言つて進もボロボロのカツパ星人に近寄つた
それを見て亮も近寄つていつた

淳「さつきのやつだな。たぶん」

進「それにしても誰だ？」

淳「ああな

亮「お前とビアセナフ

亮が進に言った

進「俺か?いいのか?」

進が亮に問いかけながら淳を見た
淳は何も言わずうなずいた

進「わかった

そう言ってXガンを構えた

ギヨーン

ボン

ボロボロのカツパ星人はバラバラに吹き飛んだ

淳「よし。移動するか。亮。動けるか?」

淳はカツパ星人が吹き飛んだのを見て言った

亮「ああ」

そう言って3人はその場をあとにした

その頃和泉達は

タタタタタ

和泉はかめ星人に近づくとガンツソードを振りかぶり斬りつけた

キン

だがかめ星人が少し体制を変えたせいで和泉は急所を外し甲羅にあたつてしまつた

その攻撃でかめ星人は和泉達に完全に気がついた

バチーン

かめ星人はそのまま和泉を尻尾で弾き飛ばした
それは和泉にあたり和泉は弾き飛ばされた

和泉「ぐはっ！」

河内は和泉が弾き飛ばされた内にかめ星人に近づいた

河内「くらいやがれ！！」

そう言つて河内は拳を振り上げた
そしてかめ星人めがけて殴りかかつた

キュルウーン

するとかめ星人は足、頭、尻尾を甲羅にしまいその場を高速スピンした

河内はそれを見てひるんだ

かめ星人は高速スピンしたまま河内に体当たりをした

河内「くつ」

河内はかめ星人の体当たりをくらい弾き飛ばされた

かめ星人は弾き飛ばすと高速スピンをやめ頭、足、尻尾を甲羅から出した

それを見て涼子はかめ星人に近づきXガンを構えた

キュルウーネン

ギヨーン

涼子はXガンを打つたがその前にかめ星人が高速スピンをしたせいできかなかつた

かめ星人はそのまま涼子に高速スピンをしたまま向かつてきた

和泉「あぶない！」

和泉は涼子を手で押してかめ星人から回避させた

キュルウーネン

ギギギギガガガギギガガガ

和泉はガンツソードで高速スピンを受け止めた

和泉「まずい！弾かれる！」

和泉はガンツソードを弾かれてしまいそのまま体当たりをされ弾き飛ばされた

第5・6話 火球（前書き）

折り返しで～す

みんな読んだら感想ください

第56話 火球

その頃新メンバーたちは

大学生B「本当にいるのかよ。なんとか星人？ちょっと怪しくないか？」

新メンバーたちは住宅地を歩いていた

大学生C「さあな。俺にはなんともいえないな」

大学生A「おい！ いたぞ！」

すると大学生Aは前方にいる4体のカツパ星人に気づき「じえでいつた

大学生B「隠れるぞ！」

そう言つて5人は近くの壁や物陰に隠れた

カツパ星人はまだ5人の事には気づいていなかつた

女子高生A 「どうするの？」

大学生C 「やるしかないでしょ」

大学生A 「そうだな」

大学生B 「うあおおおお」

すると大学生BがXショットガンを持ってカツパ星人に突っ込んでいった

それに続いて大学生A、Cと突っ込んでいった

ある住宅の屋根の上

西 「よしよし。やつてるな」

西は大学生たちのことをほどよい距離の場所の、住宅の屋根の上で見ていた

西「さてと」

西はそう言ってステルスマードになつた
そして手に持つていてXショットガンを構えた

西「狙い打ちさせてもらひつぜ」

和泉達はかめ星人と戦つていた

和泉「くそ！」

和泉は体制を立て直した

すると河内は和泉が落としたガンツソードを拾いそのままかめ星人の首に斬りかかった

ヒュン

するとかめ星人は瞬時に首を引っ込めてガンツソードの攻撃を避けた

バチーン

そしてその隙にかめ星人は体を反転させ尻尾で河内を弾き飛ばした
その間に涼子はXガンを拾っていた
それをかめ星人に構えてトリガーをひこうとした

キュルウーン

かめ星人はとつさに感知して高速スピンをし始めた
そして涼子めがけて体当たりをしてきた

涼子「きやあーー！」

涼子はとっさに右に避けた
ギリギリでかめ星人のスピンから逃れることにできた

キュルウーン

するとかめ星人はヒターンして涼子目掛けて高速スピンしながら体
当たりしてきた

ザツ

すると涼子を和泉が抱き上げそれから逃れた

和泉「大丈夫か？」

涼子「うん」

和泉（心の声）「狙うならあの瞬間だな」

かめ星人は高速 спинを繰り返し和泉達の方へ体当たりしてきた

和泉「河内！刀を！！」

河内「おひ」

そつと河内はガソルソードを投げて和泉に渡した

和泉「涼子。逃げろ」

和泉はガソルソードを受け取ると涼子に逃げるよう指示をした
涼子は静かに領きその場を急いで逃げた

キュルウーノン

かめ星人の体当たりが和泉を襲つた

和泉はそれを避けた

かめ星人は必要に和泉を高速スピンをしながら襲つた

和泉はそれを逃げながら避け続けた

すると和泉は橋の柱まで追いつめられた

キュルウーン

かめ星人は高速スピンをしながら体当たりをした

和泉（心の声）「今だ！」

そう言ってギリギリの所で足のスースの力を全開にしてその場を飛んで避けた

ドーン

するとかめ星人は柱にぶつかり高速スピンが止まった
そしてかめ星人は甲羅から姿を表した

和泉「くらえ」

和泉は着地をするとかめ星人に向かつていき走りながらガンツソードを斬りつけようとした

かめ星人は和泉が向かつてくるのを感じ向かつてくる方向に首を向けた

かめ星人は口を開けた

かめ星人「ゴオウウ」

するとかめ星人の口が赤く光り始めた
和泉はとっさにそれに気づいた

和泉「まづい！」

かめ星人は口から火球を放つた

第57話 カツバ法師

ボフン

和泉「くつ！」

火球が和泉目掛けて飛んできた

和泉は火球にガンツソードをあて火球の起動を変えた
和泉はそのまま後ろに身を引いた

ボフン
ボフン
ボフン
ボフン

かめ星人は火球を無差別に打ち続けた
和泉達はそれを避け続けるのが精一杯だった

和泉「これじゃ近づけない」

河内「どうする？なんか策はないのか…」

涼子「紫音…」

和泉（心の声）「どうする。近距離は尻尾、中距離は高速スピン、遠距離は火球、まるで死角がない…どうすればいい…！」

ザッ

すると橋の上から誰かが飛び降りてきた

涼子「あなたは…」

河内「誰だ？」

和泉「お前は…！」

何者が着地をするとその場から立ち上がった
ホルスターにはガンツソードが入っていた

和泉「西城！」

何者が正体は西城だった

多摩川近くの住宅街

ギヨーン
ギヨーン
ギヨーン

大学生BはXショットガンを打つた

カツパ星人「しゃしゃしゃあ」

ボンボンボン

一体のカツパ星人はそれに気づいたが隙をつかれたせいか腕、頭、腹を吹き飛ばされた

残りのカツパ星人たちは一体のカツパ星人がやられるのを見て大学生たちに気づいた

カツパ星人「しゃーあしゃーあしゃーあ」

残りの三体のカツパ星人が怒り始めた

大学生B「うおおおおお」

ギヨーン
ギヨーン
ギヨーン

大学生Bは続けてXショットガンを打つたがカツパ星人たちに簡単に避けられてしまった

そしてカツパ星人たちは大学生たちに凄まじい速さで向かってきた

大学生Bは必死でそれを避けた

すると大学生Cがカツパ星人たちの爪に切り刻まれた

大学生A「はあ ああ」

それを見て大学生Aは腰を抜かし地面に座り込んだ

カツパ星人「しゃあしゃしゃしゃあ」

カツパ星人たちはゆっくりと大学生たちに近づいていった

女子高生B「ヤバいよ！助けたほうがいいよ！」

女子高生A「助けるたってどうやつて！？」

女子高生たちは軽いパニックに陥っていた

そして女子高生たちはとっさに自分たちの手元をみた
それは黒い玉の部屋からとっさにもつてきたXガンだった

女子高生A「これで狙い打てばいいんじゃない？」

女子高生B「はやくしないと！」

女子高生Bは大学生の様子を見ながらいつた

女子高生A「でもトリガーが2つあってどっち引けば出るのかな」

女子高生B「両方引けばいいじゃない！」

女子高生A「こうかしら」

そう言ってXガンを構えた

力チカチカチ

ギヨーン

カツパ星人「しゃあうおえ」

ボンボンボン

すると三体のカツパ星人の頭が吹き飛んだ

女子高生B「やつた！ やるじゃない！」

女子高生A「えつ！ でも私打つてないよ」

女子高生B「なにいつてんのよ。やつつけたじゃない」

ある住宅の屋根の上

西「よし。三体か」

カツパ星人を倒したのは西だった

西「この調子でターゲットを油断させていってくれよ」

西は再びメシヨットガンを構えようとした

西「んつー?」

西がなにかに気づいた

西「あれば」

多摩川近くの住宅街

大学生A「ありがと」

そう言って女子高生たちに近づいていこうとした

大学生A「なんだ？」

すると大学生Aは女子高生たちの後ろにいる何かいるのに気づいた

大学生A「あぶない！」

女子高生B「えつ？」

グシャ

女子高生Bは後ろから何者かに片腕で叩き潰された

女子高生A「きやああああ」

大学生B「なんだあれば」

そこには2メートルをこえる大きさの法師のような格好をしたカツバ星人が三体いた

右手には棒状の杖を持っていた

カツパ法師「ぐるううううう」

カツパ法師はゆっくりと大学生たちに近づいてきた

第58話 一流剣士

多摩川近辺の公園

速水「レーダーだとこの辺だな」

南「そうだな」

その頃速水と南は多摩川近辺の公園にいた

南「いたぞ」

すると前方に2体のカツパ星人がいた

カツパ星人「しゃーあ

カツパ星人は雄叫びをあげて2人を威嚇した

速水「俺がやる」

シュン

そう言つて速水はホルスターからガンツソードを取り出し伸ばした

速水「手出すなよ」

南「はいはい。年上にその口の聞き方だもんな。危なくなつても助けないからな」

速水「ああ。わかつた」

そう言つて速水はカツパ星人に近づいていった

その頃小富山は

小富山「もうすぐだな」

茨木「本当マイペースだな」

小富山は茨木と共に住宅街にいた

小富山「まあな。今のメンバーは強いからな。そんな焦らなくともいいだろ」

茨木「そうなのか」

茨木がそう言った時小富山はレーダーを見た

小富山「……？」

すると小富山たちの背後からターゲットが近づいていた

カツパ星人「しゃーあ」

それはカツパ星人だつた

カツパ星人は茨木の背後から襲いかかつた

速水はガンツソードを剣道のように前に構えた

カツパ星人「しゃーあ」

カツパ星人は速水に襲いかかつた

そして爪で攻撃してきた

ザツ

すると速水は後方にステップを取りそれを避けた
そして一連の流れでカツパ星人に突きをした

カツパ星人「しゃあしゃ」

それはカツパ星人の首に刺さつた

速水はそのままガンツソードを首から抜いた

カツパ星人はしばらくよろめいたがその場に倒れて死んでしまった

速水「こい！！」

速水はもう一体のカツパ星人に言った

カツパ星人「しゃー」

カツパ星人は速水に襲いかかり爪で攻撃してきた
速水は同じように避けカツパ星人に突きをした
だがカツパ星人はそれを読んでいたのか首をずらしてそれを避けた

カツパ星人「しゃーあ」

カツパ星人はそれを避けると速水の背後に回り込んだ

速水はその動きを見てすぐさま体制をカツパ星人の方に向かって
だがその動きの間にカツパ星人は爪で攻撃してきた

パシ

速水はそれをガンツソードの峰で払いのけた

カツパ星人「カツカツカツパ！」

速水はそのままカツパ星人の胴をガンツソードで斬りつけた
カツパ星人は胴から真つ二つにされた

南「お前強いな」

速水「そうか」

真つ二つにしたカツパ星人がまだ生きているのに速水は気づいた
速水はガンツソードでカツパ星人の首を切り落とした

カツパ星人「しゃーあ」

すると速水たちの前方と後方からカツパ星人が2体ずつやってきた

南「じゃあ俺も戦うかな」

そう言つて南は腕に持つていたXショットガンを構えた

第59話 我流剣士

小宮山「あぶない！」

小宮山は茨木に向かつて言った

茨木「えつ！」

茨木は後ろを向いた

茨木「うわあ」

茨木はとっさに体をひねつてカツパ星人の攻撃を避けた

ザツザツ

小宮山はカツパ星人に近づき右腕を振りかぶった

そしてカツパ星人を殴り飛ばした

多摩川ある橋の上

数分前

清水「レーダーだとこっちだな」

清水はコントローラーを見ながら言った

西城「そういうえば2人で話すのははじめてだな

清水「ああ。そう言えばそうだな

西城「あなたはなんである部屋に残っているんだ? 100点取つて
んだろう?」

清水「そりや決まつてゐるだろ」

ボンボンボンボン

すると橋の下から爆発音がした

西城「なんだ！？」

清水「あれは和泉じやねえか。なんだ？ターゲットと戦闘中か」

西城はしばらく和泉達の様子をうかがつた

ググツ

清水「なにするきだ？」

すると西城は近くにある道路標識の看板を引っこ抜いた
西城は橋の手すりの上に立った
そしてそこから橋の下に飛び降りた

現在

多摩川ある橋の下

和泉「西城！」

西城「和泉。こいつは俺に任せろ」

するとかめ星人が火球を打つ体制を取った

ボフン

かめ星人は火球を放った

西城は腕に持つて いる道路標識を両手に持ち構えた

グググ

バコン

西城は道路標識を思いいつきり振り火球を跳ね返した
道路標識は火球を跳ね返したせいでグニャグニヤに曲がった

ボフン

かめ星人は火球を再び放った

ドカン

かめ星人の火球と火球で相殺され激しく爆発した
西城は道路標識を捨て爆発に応じてその場を飛んだ

シウン

飛びながら西城はガンツソードを伸ばした

ボフン

かめ星人は飛びかかる西城に火球を放つた
西城は向かってくる火球をガンツソードで斬った

タツ

西城は火球をガンツソードで斬り回避するとかめ星人の甲羅に着地
した

ションションショーン

かめ星人は西城を甲羅からはたき落とそうと尻尾で攻撃してきた
西城はそれを上体を動かしそれを避けた
そしてタイミングを見計らつてガンツソードで尻尾を切り落とした

かめ星人「ギアオオオオオオ」

かめ星人はうめき声をしてその場を暴れだした
それでも西城は甲羅から落ちまいとしていた

キュル——ン

するとかめ星人は高速スピンをした

西城は高速スピンの高速回転で体制を崩した

西城「ちつ！」

西城ははじき飛ばされるのを予期し甲羅から飛んだ

ボフン

そして西城が地面に着地すると同時にかめ星人は高速スピンをやめ火球を放ってきた

西城はそれをどうにか避けた

ボフンボフンボフンボフンボフンボフンボフンボフンボフン

かめ星人は流星の如く火球を放ち続けた

西城はそれを避け続けた

そしてガンツソードを伸ばした

ブオン

西城は体制を低くとつた
そして隙をついてガンツソードを思いつきり振りかめ星人に斬りつけた

するとかめ星人の4本の足を切り落とした

ドオン

かめ星人は足をなくし地面に落ちた

かめ星人「ギアオオオオオオ」

かめ星人はうめき声をあげた
西城はガンツソードを元の長さに戻した
そしてガンツソードを両手で突き立てながらかめ星人に向かつてい
つた

第60話 キャラ紹介

西城智也 16歳

謎の過去を持つ少年

謎の死により黒い玉の部屋に導かれた

本来はどこにでもいる高校生だが戦闘のセンスはピカイチであらゆる星人を倒してきた

2ヶ月の失踪をしていたが本人は記憶喪失をしたせいかまったく覚えていない

和泉紫音 15歳

クリア回数2回の強者

ガンツメンバーから自然とリーダーだと思われている

日頃はクールだが感情的になる面も持っている

自己犠牲が強くよろいむしや星人編では若の攻撃を自ら受けにいき西城を助けるなど自己より人を優先する面も多々ある

小宮山悟 26歳

クリア回数3回の強者

数々のミッションをこなしてきたのと性格からかメンバーから頼られる面を持っている

戦闘は主にHガンを使った攻撃が多いが格闘の戦闘センスも高い容姿からかよく周りからおっさんと呼ばれる

斎藤力レン 21歳

クリア回数3回の強者

今まできた部屋の女子の中で一番強い女

仲間思いだが星人に対しては非情である

狙撃のセンスがピカイチで小宮山いわく「遠距離でカレンに勝てる奴はない」らしい

ジーンズ星人編で佐々木の手により殺されてしまった

佐々木カオル 25歳

クリア回数4回（5回）の強者

闘争心丸出しで戦闘中下手に近寄ると攻撃を喰らうおそれがある星人だらうが場合によつては人間だらうがおかまいなしに殺しにくる

清水直也 18歳

クリア回数1回の男

主に和泉と行動を共にするが最近はそうでもない
戦闘のセンスはそこそこだが若との戦闘中隙をつくなど侮れない面もある

相川淳 22歳

クリア回数1回の男

相川3兄弟の長男

統率力がありリーダーの資質を持つている

兄弟思いで自分の身より兄弟を優先する面が多くある

西一郎 13歳

ガンツメンバーの一人

基本的にステルスマードを多用して行動している

自分から星人を倒しに行くスタイルではなく不意打ちや追い討ちが多い

主に星人を倒すより生き残ることを考えており危険を察知するとまず自分の安全を確保することが多い

相川亮 21歳

相川3兄弟の次男

兄の淳を信頼しているが進に対してはそうでもない

相川進 20歳

相川3兄弟の三男

兄の淳は信頼しているが亮のことはそうでもない

河内武士 24歳

ガンツメンバーの1人

なかなかの武闘家でジーンズ星人編では新メンバーにもかかわらず星人を圧倒する

和泉のことを少し気にかけている

茨木進 21歳

ガンツメンバーの1人

筋肉質で戦闘力の高さが伺える
メガネをかけている

南隼人 20歳

ガンツメンバーの1人

ロン毛で変わった雰囲気を持っている

戦闘力は未知数

栗原隼人

クリア回数10回の猛者

佐々木と西城との戦闘中に姿を表すが今だに素顔をさらしていない
ミッションには最近興味がなく時間をつぶしていることが多い

第61話 火炎車

その頃小宮山たちは

茨木「うわあ！」

茨木は小宮山のとつさの攻撃に驚いた
小宮山の攻撃でカツパ星人の首が一周した

カツパ星人「しあーあ」

すると小宮山たちが向かおうとした方向からカツパ星人が5体ほど
やってきた

小宮山「これはなかなか骨が折れるぞ」

茨木「ああ」

そう言つて小宮山は拳を構え茨木はXショットガンを構えた

茨木「やめた」

茨木は急にそう言つて×ショットガンを手放した

茨木「俺も素手でいくかな」

そう言つて茨木は拳を構えた

小宮山「死んでも知らないぞ」

多摩川住宅街近辺の公園

カツパ星人「しあーあ」

カツパ星人たちは物凄い速さでその場を移動した

速水「……」

速水はじ一として集中していた

カツパ星人「しあーあ」

すると一体のカツパ星人が爪で攻撃してきた
それを速水はガンツソードで受け止めて払いのけた
その隙にカツパ星人の首を斬りとばした

カツパ星人「しあーあ」

もう一体のカツパ星人が速水に襲いかかつた

ドゴッ

その時南がそのカツパ星人を蹴り飛ばした

カツパ星人「しあーあ」

カツパ星人が倒れた評しに南は足で押さえつけた

ギヨーン
ギヨーン
ギヨーン

南はXショットガンをカツパ星人に向かって打つた

ボン ボン ボン
ボン

カツパ星人の頭が吹き飛んだ

多摩川ある橋の近く

キュルーーン

かめ星人は西城の向かつてくるのを感じると高速スピンをし始めた
だが西城は怯まず向かつていった

かめ星人は西城にそのまま体当たりをした

それを西城は軽々と避けた

するとかめ星人は高速スピンをした状態で首を出した

ボフンボフンボフンボフン

高速スピンをしながら火球を放ち始めた

涼子「きゃあ」

その無差別的な攻撃に近くにいた和泉たちにも攻撃がきた

和泉「大丈夫か！？」

涼子「平気。ちょっとびっくりしただけ」

ボフンボフンボフンボフン

なおもかめ星人は火炎車のように高速スピンをしながら火球を放ち
続けた

タタタタ

すると西城は助走をつけて高く飛び上がった

かめ星人「ギヤ??」

するとかめ星人は西城の場所を見失い高速スピンをやめた
西城は落下しながらガンツソードを突き立てた
そしてかめ星人の頭を串刺しにしようとした

かめ星人「！！」

かめ星人はギリギリのところで気づいた

グサツ

かめ星人が首を少しづらして頭には刺さらなかつたがかめ星人の右目をかすつた

かめ星人「ギヤオ」

かめ星人は少しひるんだ

その隙に西城はガンツソードを捨てかめ星人の甲羅を下から両手で抱えた

西城「おりやあ」

西城はかめ星人をひっくり返した

かめ星人は全く身動きが取れなくなつた

第61話 火炎車（後書き）

これで終わりです。

カツパ星人編の構成はだいたいできたんでまた書きたまつたら更新します。

第62話 無敵??（前書き）

感想ありがとうございます。

これからも少しずつ更新していくのでよろしくお願いします。
感想、評価、今後の作品の参考になるのでよかつたら書いてね。

第62話 無敵？？

西城「はあ…はあはあ」

西城はガンツソードを拾いかめ星人に近寄つていった

かめ星人「ギャオギャオギャオ」

かめ星人はひっくり返つたまた首をバタバタさせてどうにか起きあがろうとしていた

西城はゆっくり歩み寄るとガンツソードを突き立てた

グサッ

西城はかめ星人の腹にガンツソードを突き刺した

西城「！？」

シュルルルルル

西城は突き刺したのはいいが手応えが全くなかった
それと同時に何かが素早く動く影が見えた

西城「からー！逃げたな！」

甲羅の中にはかめ星人の姿がなかつた

かめ星人「ギヤオ」

すると西城の背後からかめ星人が噛みついてきた

西城「なつー？」

西城はとっさにそれを避けた
かめ星人は首がそのまま出たような状態で例えるならカタツムリが
ナメクジみな状態であった
その姿はまるで蛇のようだつた

かめ星人「ギヤオ」

かめ星人は反転して西城に噛みついた
西城はそれを避けた

かめ星人は続けざまに数回噛みつきかかってきた
それを西城はひらりひらりと避けていった

かめ星人「ゴオウウ」

かめ星人の口が赤く光り始めた

ボフンボフンボフンボフン

かめ星人は動きを止め火球を放ち始めた
西城は怯まずかめ星人に向かつていった
かめ星人は苦し紛れのせいか西城に全くあたらなかつた
西城は近づくとガンツソードを振りかぶつた
かめ星人は西城に向かつて状態をくねらせ叩きつける形で払いのけ
ようとした
西城はそれを飛んで避けた

シユツ

西城はガンツソードを斬りつけた
その攻撃でかめ星人の首が飛んだ

タツ

西城は着地すると片手でかめ星人の体をガンツソードで斬りつけて
いつた
かめ星人は体がバラバラになった

グサツ

そして西城はかめ星人の頭に近寄りガンツソードで串刺しにした

河内「すげえ。なんだあいつ」

和泉「西城智也。奴がきた最初のミッションで100点を出した男

だ

河内「100点・マジか」

そう言つてゐると西城が和泉たちに近寄つてきた

清水「終わつたか」

すると土手から清水が滑り降りてきた

和泉「清水。いたのか」

清水「らしくないな。和泉。お前がてこずるなんて」

和泉「……」

涼子「あれ?」

涼子がコントローラーのレーダーを見ながらいつた

涼子「川の方に何かいる」

涼子は指を差しながら言つた

和泉「本当か」

バサバサバサバサ

すると何かが羽ばたいている音がした
その音がだんだん大きくなつてきた

清水「なんだー?」の音

涼子「なにかがこっちに向かってきてるー!」

涼子はコントローラーのレーダーを見ながら言つた

数分前

多摩川近辺住宅街

女子高生B 「?？」

女子高生Bは叩きつけられた地面から立ち上がった

女子高生B 「あれ？全然痛くない」

女子高生Bは全く痛みを感じしないのに驚いた

女子高生B 「きやはは。あたし無敵じゃない」

そう言ってカツパ法師に近づいていった

大学生B 「あぶない」

ガツン

すると女子高生Bはカツパ法師に軽く殴られた

女子高生B 「ほらー私は無敵よー！」

キュウウウウウン

ドロドロドロ

すると女子高生Bのスースの丸い所から液体が出てきた

女子高生B 「えつー? なにこれ?」

シユツ

すると後ろにいるカツパ法師が凄まじい速さで女子高生Bの前まで移動した

バコッ

するとカツパ法師は女子高生Bを殴り飛ばした

第63話 助けにきたぜ

大学生B 「えつ！！」

大学生Bの顔の真横を女子高生Bの体が飛んできた
大学生Bの顔に数滴の血がついた
そしてゆっくりと女子高生Bの姿を見た

大学生B 「ああ！」

女子高生Bは顔がぐれやぐれやになつて見るも無惨な状態だった
大学生Bは恐る恐る脈を見た

大学生B 「死んでる」

シユツ

すると最初に女子高生Bを叩き潰したカッパ法師が凄まじい速さで

移動した

ガシツ

するとカツパ法師は女子高生Aの片腕をつかんだ後それを引きずりながら大学生Aの片足を掴んだ

ガガガガガガ

ガシャンガシャンガシャンガシャン

するとカツパ法師は2人を両腕でつかみながら両はじにある壁に2人を叩きつけた

その攻撃で壁は粉々になつた

ガンガンガンガン

カツパ法師はそのまま2人を地面に何回も叩きつけた

キュウウウウウン

ドロドロドロドロ

すると2人のスー^ツがおしゃかになつた

カツパ法師は叩きつけるのを止めると2人を手放した

グシャ

そして2人の頭を踏み潰した

住宅街ある住宅の屋根の上

西「もう3人やられたか。強いな」

西はじつくじ様子を見ていた

西「？」

すると西は一体のカツバ法師がこいつをめづらしてこのお城にいた

西「マズい」

多摩川近辺住宅街

ググッ

すると一体のカツパ法師の背中から何かが生えようとしていた

バサツ

そしてそこから羽根が生えた

バサバサバサバサ

すると一体のカツパ法師は飛び立つた

住宅街ある住宅の屋根の上

西「いつち来やがつた」

ガシャン

カツパ法師は着地すると西の前に立王立ちした

西「おまけに見えてやがる」

ガシャン

するとカツパ法師は西に殴りかかった
西はそれをギリギリ状態をそらして避けた

ギヨーン

西は苦し紛れに×ショットガンを打った

ボン

あたつたが筋肉量がありあまりダメージがなかつた

カツパ法師「ぐるうううう」

カツパ法師は再び西に殴りかかつた

ダッ

スルウウウ

西は背中から倒れ込むように避けた

そして屋根に倒れ込むとカツパ法師の股の下を通り滑り降りていった

タツ

西は着地すると急いで逃げた

バサバサバサバサ

カツパ法師は再び飛ぶと西を追いかけ始めた
西は必死に逃げた

「西！」

ガン

カツパ法師は飛びながら西を殴り飛ばした
西はとっさにガードをした

西「ぐはつ」

西はそのまま壁に叩きつけられた
それと同時にステルスマードがとけた
カツパ法師はそのまま地面に着地した

カツパ法師「ぐるうううう」

西「くそつ」

そう言つたあとあたりを見回した
するとそこは大学生たちが戦っている場所だった
そこにはもう2体のカツパ法師がいた

大学生B「お前は！」

大学生Bは西の存在に気づいた

西「うーー。」

西は叩打ちをするとノットローラーのステルスマードのボタンを押した

西「ー。」

力チ

カチカチ

西は何度も押したが反応しなかった

西「あの時か。」

西は思い返した

それはカツパ法師の攻撃を受けた時どっさにガードしたことだった

西「へやつ。どひあるじから」

西は独り言を言い始めた

大学生B「あーつらめちゃくちゃ強いぞ」

西「そんなもん見たらわかる」

大学生B「戦わないのか?」

西「バカか! あんな相手できるわけないだろー! リスクが高すぎる!」

西はキレながらいった

カツパ法師「ぐるうううう」

そつ言つて一體のカツパ法師が向かつてきた

西「くそがー!」

そつ言つて西はメショットガンを構えた

キュイイイイイン

するビビンからかHガソのチャージ音がなつた

ドン

向かってくるカツパ法師はそのまま地面に叩きつけられた

西「誰だ！？」

?「ふうう。大丈夫か？西」

西「お前は」

西は背後を見て確認した

それは小富山だった

小富山はタバコを吸いながら西に言った

小富山の後ろには茨木がいた

小富山「助けにきたぜ」

第64話 ラリアット

西「いつからいたんだ?」

小富山「ついでさつきからかな。茨木これであいつ抑えてる」

そう言ってHガンを茨木に渡した

茨木「了解」

大学生B「誰?」

西「小富山悟と茨木…進だな」

キュイイイイイン

ドン

再びカツパ法師は地面に叩きつけられた

カツパ法師「ぐるうううう」

別のカツパ法師が羽根の生えているカツパ法師に首で合図した
羽根の生えているカツパ法師は頷くとどこかに飛んでいった

小富山「おっ！ 一体減ったか。好都合だな」

そつまつて小富山は首を左右にならし構えた

小富山「これでサシでやれる」

多摩川ある橋の近辺

ダッ

西城たちのいるところに羽ばたいてきた何かが地面に着地した
それはカツパ法師だつた

カツパ法師「ぐるうううう」

和泉「新手か！」

そう言つて和泉はガンツソードを構えた

西城「よせ！」

和泉「なに！」

西城「こいつは俺がやる。お前たちは川の方を頼む」

和泉「一人でいいのか？」

西城「ああ。川の方にいるのはたぶんボスだ。大勢で行つた方がいい」

和泉「なぜわかる」

西城「ただのカンだ。はやく行け！」

そう言つうと和泉たちは川の方へ向かつた

和泉「清水来ないのか？」

清水「ワルいが俺は別行動させてもらう

そう言つて清水は土手に登り上流の方へ行つてしまつた

河内「いいのか？これで」

和泉「いいだろ。それぞれ別々の思惑があるんだから仕方がない」

そう言つて和泉たち3人は川の方へ降りていった
西城は持つているガンツソードを構えた

カツパ法師「ぐるうううう」

カツパ法師はうなりながら小富山に近づいた

ガツ

カツパ法師は右腕で小富山に殴りかかった

小富山はとっさに避けた

カツパ法師の右腕は地面にあたりコンクリートが少し碎けた

小富山「ふう！あぶねえ」

カツパ法師は続けざまに右左と小富山に殴りかかった

小富山はひらりひらりと避けていた

そして次の攻撃が来る瞬間にあわせて小富山は右腕で殴りかかった

カツパ法師「ぐはつ」

見事カウンターが決まりカツパ法師は怯んだ
小富山はそれに乗じてカツパ法師に殴りかかった
それは見事カツパ法師にあたつた

そこから小富山の怒涛のラツシュが始まつた
右左と殴り続け時々膝を交えながらカツパ法師をボコボコにしていつた

シユツ

ダツ

小富山は瞬時にカツパ法師の首に手をかけた
そこからスースのパワーを全開にしてラリアットをかました
カツパ法師は地面に叩きつけられた

小富山「まだか?」

カツパ法師はまだ息があった

そして起きあがると羽根を生やし始めた

カツパ法師「ぐるうううう」

バサバサバサバサバサ

カツパ法師はばたきはじめた

小富山「逃げる気だな」

そしてカツパ法師は飛び立つとどこかにいこうとした

小富山「逃がすか！」

小富山はスース力で飛び住むの屋根に登るとそこからカツパ法師め
がけて飛んだ

カツパ法師は全然予期していなかった

そして再びカツパ法師の首に手をかけそのまま地面に急降下した

カツパ法師は小富山のラリアットをくらい地面に叩きつけられた

第65話 羽の矢

小富山の「リニアット」でカツパ法師の首はへし折れ顔がぐしゃぐしゃになつた

小富山「まずは一体」

そして小富山は茨城のいる方向をむいた

小富山「終わつたか！？」

キュイイイン

茨城「ああ。あともう少しだ」

茨城はHガンを打ちながら言った

茨城は小富山の声を聞き一瞬カツパ法師から目をそらした

ザツ

ドン

その隙をカツパ法師は逃さなかつた
カツパ法師はそのすきをついてHガンの呪縛から逃れると茨城と一緒に距離をつめた
そしてHガンを持っている茨城の右腕に噛みついた

茨城「ぐあああ！！」

カツパ法師は右腕にかぶりつくとそのまま噛みちぎった

カツパ法師「ぶつ！ぐるううう！」

カツパ法師は右腕を吐き出すと続けざまに茨城に襲いかかつた

タタタタ

すると背後から小富山が走り込んできた
そしてカツパ法師に向かつてラリアットをかました

するとカツパ法師は首をかがめてそれを避けた

ヒュン

小富山は続けざまに左足をカツパ法師目掛けて蹴り上げた
カツパ法師はそれを一步身を引いて避けた

カツパ法師「ぐるううう」

小富山「やるじゃん」

多摩川近辺ある公園

南「終わつたな」

速水「ああ」

速水と南はカツパ星人をすべて倒していく

速水「！？」

すると速水は何か近づいてくる気配を感じた
そして背後を振り向いた

南「新手か！」

速水「そうみたいだな」

そこには一体のカツパ法師がいた

速水「俺がやる」

南「だらうな。好きにしろ」

カツパ法師「ぐるううう

そう言って速水はガンツソードを構えた
多摩川ある橋の近辺

西城は上空から舞い降りたカツパ法師に両手でガンツソードを斬りつけた

カン

するとカツパ法師は手に持っている杖みたいな長い棒で受け止めた

西城「くつ！」

少しつばぜり合いになると西城はカツパ法師から距離を取った

西城「なかなかパワーがあるな」

そう言つと西城はカツパ法師に向かっていった

キンキンカンキンカンカン

そこから西城の怒涛の連撃が始まった

それをカツパ法師は受け止め続けた

だがだんだんカツパ法師は西城の連撃を受け止めきれなくなってきた

そして西城はカツパ法師の一瞬の隙をついて右翼を切り落とした

カツパ法師「ぐぎややややや」

カツパ法師は左腕で西城を払いのけた
西城はそれを身をひいて避け続けざまにガンツソードを斬りつけようとした
だがカツパ法師はすでに西城と距離をとっていた

びりびりびり

カツパ法師は自分の上着をやぶき捨てた
そして左翼の羽が動き出しそれを軽々避けた
つた

西城「うわあ」

西城は一瞬びっくりしたがそれを軽々避けた

西城「そんなこともできるのか」

カツパ法師はまだなにかしようとしていた
そしてカツパ法師は杖のような棒に向かって念じ始めた
すると二股の槍に変化した

カツパ法師「ぐるううう

西城「面白くなつてきたな」

西城はガンツソードを構えた

第66話 貸し

多摩川近辺ある公園

タタタタ

速水はガンツソードを上段に構えながらカツパ法師に向かっていった

ブン

速水はそのままガンツソードを振り下ろした
カツパ法師はそれを避けた

そしてガンツソードは地面に叩きつけられた
それをカツパ法師は刀身を足で踏みつけた

速水「！」

そしてカツパ法師は右腕で速水を殴り飛ばした
速水はそのまま宙を舞つた

速水はその時ガンツソードを手放してしまった

南「あ～あ」

速水は地面に叩きつけられるとすぐに起き上がった

速水「油断した」

速水はかすかに鼻から血が出ていた

速水（心の声）「このスーパー・スースでこれだけきくとなるとあまりくじうわけにはいかないな」

タタタタ

速水は再びカツパ法師に向かっていった

ブンブンブンブン

カツパ法師「ぐるううう

カツパ法師は手に持つて いる杖の ような 棒を 2、3回まわし構えた

ブン

カツパ法師は向かってくる速水に棒を横に振った
速水は走りながら体制を低くしてそれを避けた

そしてカツパ法師が踏んでいるガンツソードに手をかけた
速水はスー^ツの力を全開にして無理やりガンツソードをカツパ法師
の足から取り外した

カツパ法師はその隙をついて棒を振りかざした

カン

速水はそれをガンツソードで受け止めた

ザツ

速水はそのあとカツパ法師から距離を取つた
速水はガンツソードを前に構えた

速水「フウウウウウ」

速水は深呼吸をした

その間にカツパ法師は何かを念じていた
すると棒の先端が二股になり槍になつた

カツパ法師「ぐるううううう」

カツパ法師は槍を構えた

速水「フウ」

速水は深呼吸を途中で止めそのままカツパ法師に向かつていった
速水はカツパ法師にガンツソードを斬りつけた
それをカツパ法師は槍で受け止めた

キンキンカンカンキンカンキンカンカン

そこから激しい斬り合いになつた
速水は剣道の基本の形を崩さず激しい攻防が続いた

ブン

数分の攻防でカツパ法師はしびれをきらし槍をおもいつきり速水に
斬りつけた
速水はこの瞬間を待つていた
速水はそれをしゃがんで避けた
そしてその体制からガンツソードを斬りあげた
するとカツパ法師の両腕が宙を舞つた

カツパ法師「ぐるうううう」

カツパ法師はひるまず速水に蹴りをかました
だが速水はそれを容易に避けた

バサバサ

するとカツパ法師の背中から羽根が生えた
そしてそのまま飛んで逃げようとしていた

速水「なに！？」

そしてカツパ法師は空を飛びどこに行こうとした

速水「くそー逃がした！！」

速水はカツパ法師が逃げていくのをただ見ていてただただ見ただけだった

ギョーン

するどいでからか×ショットガンを打った音がした

ボン

カツパ法師「ギャオ」

カツパ法師は左翼を打ち抜かれ速水たちのいる所に急降下してきた
速水はXショットガンの音が鳴った場所をみた
そこには南がいた

南「貸し1な」

速水「南」

そう言ったあと速水は急降下するカツパ法師をみた

そして近くにある滑り台に飛び乗るとそこからカツパ法師目掛けて飛んだ

速水はカツパ法師にガンツソードを斬りつけた
カツパ法師は横半分に真つ二つにされた

第67話 犯めやがつて

多摩川近辺住宅街

シユシユ

小富山はカツパ法師に対して右左とパンチを繰り出した
それをカツパ法師は避けた
そのまま小富山とカツパ法師は攻防を繰り返した

小富山（心の声）「これじゃあ、きりがない」

そう思ふと小富山は攻撃のペースをあげた
最初カツパ法師も対応できていたがそれもだんだんできなくなつて
きた

すると小富山の右ストレートがカツパ法師に襲いかかつた
カツパ法師はそれを避けきれなかつた

ガン

カツパ法師はとつさに腕でそれをガードした
だが小富山はそれを待っていた
続けざまに小富山は左腕でカツパ法師のボディを殴つた

カツパ法師「ゴボツ」

カツパ法師は一瞬怯んだ

ダンダンダン

小富山は続々とまにカツパ法師のボディを左腕で3回殴った

バキボキボキ

カツパ法師のあばら骨が一部折れた

カツパ法師「ぐるあう」

カツパ法師は小富山に右腕で殴りかかった
小富山はそれを軽々避けた
そしてカツパ法師の顎にアッパーをきました

そこからは小宮山の独壇場だった

小宮山はカツパ法師の顔や腹を殴り続けた

小宮山「はあはあはあ……」

西「やつぱり強いな。 小宮山」

西は遠くから見ながら咳いた
カツパ法師はすでにボロボロだった

小宮山「終わりだ」

そういつてカツパ法師に向かつて行くとラリアットをかまそつとした

バサ

するとカツパ法師の背中から羽根が生えた

カツパ法師は状態を反らしてラリアットを避けた

そしてその場で一回転して羽根で小宮山をはたきとばした

シユシユ

カツパ法師ははたきとばした小富山に向かって刃を矢のよひにとばした

小富山「なつー！」

小富山はびりにかそれを避けた

ダンダン

するとカツパ法師は小富山に近づいてラリアットをかました
それは小富山にあたり地面に叩きつけられた

カツパ法師「ぐぬううう」

小富山「舐めやがつて」

小富山はすぐに起きあがると臨戦態勢を取つた
するとカツパ法師は再びラリアットをかまそつとした

小富山はそれを容易に避けられたがあえて避けずにカツパ法師に向
かつて行つた

そしてラリアットを構えた

ガン

2体のラリアットがぶつかつた
2体の腕は両方とも首にかかつた

小富山「ふざけんじゃね〜」

小富山はカツパ法師の首にかかつた腕を締めつけた

グシャ

そのまま小富山はカツパ法師の首をえぐり取った

小富山「はあはあはあ

カツパ法師の頭が地面に転がつた
そして小富山は茨木に近づいた

小富山「大丈夫か??」

茨木「ああ。なんとかこいつが止血してくれたから」

そつ言って大学生Bを指差した

小富山「見ない顔だな。新入りか」

大学生B「いつたいなにがどうなってるんですか」

小富山に問いかけた

小富山「説明はあとだ。うまく生き残つたら教えてやる」

茨木「なにを焦つてるんだ??」

小富山に問いかけた

小富山「西。感じるか?」

西「ああ。あんたも感じてたか」

小富山「ボスが近いぞ」

そいつはとエガンを拾つて茨木に渡した

小富山「お前たちはここにいる。これは預けとくぞ」

小富山はそう言つてその場をあとにした

第68話 岩

多摩川近辺住宅街

力チャ力チャ

西は大学生や女子高生たちの亡骸をあさつていた

西「あつた！」

西はコントローラーを見つけるとステスルモードがつかえるか試した

西「よし」

茨木「どうする気だ」

西「見学しに行くんだよ。ボスを。あわよくば」

ガチャ

そう言つてメショットガンの引く所を引いた

西「じゃあな」

そう言つてステスルモードになつてどこに行つてしまつた

多摩川ある橋の近辺

シユシユシユシユシユシユ

西城「おわつ！」

カツパ法師は西城に羽を飛ばし続けた
西城はそれを避け続けた

西城「厄介だなあの羽根」

西城は避けながらカツパ法師に近づいていった

シユシユシユシユシユシユ

その間もカツパ法師は羽を飛ばし続けた

西城「おりや」

西城はガンツソードを通常より少しのばすとやり投げよう構える
とカツパ法師目掛けて投げ飛ばした

カツパ法師はそれを一股の槍で軌道をずらして攻撃から回避した
そしてカツパ法師は再び西城のいる方向を見た
するとそこには西城の姿がなかつた

カツパ法師「ぐるう？？」

ガシツ

するとカツパ法師は後ろから羽根を捕まれた
それは西城だつた

グシャ

カツパ法師「ぐしゃややや」

すると西城はカツパ法師の羽根をもぎ取つた

カツパ法師「ぐるう！」

カツパ法師は西城の方向を向くと槍を振りかざした
だがその前に西城はカツパ法師の懷に潜り込んだ

シウン

グサツ

すると西城はホルスターからもつ一本のガンツソードを取り出し伸ばすとカツパ法師の腹に突き刺した
そしてそのままガンツソードを斬りあげた
カツパ法師は上半身が真つ二つになつた

シュン

西城はガンツソードの刀身をしまつとホルスターにしまつた

西城「刀は一本とは限らないぜ」

そして西城は近くに落ちていたもう一本のガンツソードを拾つた

多摩川河川

チョロチョロ

和泉たちは多摩川の浅瀬を歩いていた

河内「どこだ？」

和泉「いないな」

そう言ってあたりを見渡した

トントン

すると涼子が和泉の肩を叩いた

涼子「あれー」

そう言って涼子はあるものを指差した
そこには巨大な岩のよつなものがあった

和泉「なんだ??あれ?」

河内「こんなのきたときなかつたぞ」

河内は転送されてここにきたとき多摩川の河川を見ていた
その時こんな大きな岩はなかった

涼子「おつきこー」

涼子はそう言いながら岩を見上げた

和泉「それにしてもデカいな

やつ聞いて和泉は岩に手をあてた

ドクンドクン

和泉「！！」

和泉はなにかの鼓動を感じた

和泉「マジか！」

河内「どうした？？」

河内が和泉に問いかけた

和泉「この誕生日を祝うぞ」

第69話 起床

多摩川近辺住宅街近くの公園

速水はカツパ法師を斬つたあと地面に着地した

速水「ありがとう。南。借りはかえす」

速水はそういうながら南のいる方向を向いた

南「当たり前だ。三倍で返せ」

ズルズルズルズル

するとなにかが地面にこする音がした

速水「！？」

南「あぶない！」

するとカツパ法師が上半身だけの状態ではいすりながら速水に飛びついた

カツパ法師「ぐるうおわ！」

カツパ法師は速水にかぶりついた

速水はそれをかるうじてガンツソードで受け止めた
速水はその勢いで体勢を崩し、地面に横たわる状態になった

カツパ法師「ぐるうあううう」

カツパ法師は速水の首を噛みちぎりと必要に迫つてきた

速水「ひつこいんだ！」

速水はそつ言つて足でカツパ法師を蹴り上げた

速水「よーーー！」

宙を舞うカツパ法師の首田掛けてガンツソードを斬りつけた
カツパ法師の首が飛んだ

速水「なめやがつて」

そう言つてガンツソードについた血をほりつた

ギヨーン

速水はホルスターからXガンを取り出しカツパ法師の飛んだ頭を打つた

ボン

速水「これからどうする?」

南「とりあえず川の方まで戻るか」

速水「そうだな。もうこの辺にはこぞりにないからな」

そう言って2人はその場を去った

多摩川河川

河内「あの亀の親かこいつ」

和泉「かもな。いざれにしろ」

ガチャ

和泉「先手必勝」

そう言って巨大亀に向かってメショットガンを構えた

河内「そうだな」

河内もXショットガンを構えた

ギョーン

ギョーン

2人は躊躇なく引き金を引いた

涼子「ごめんなさい」

涼子もXガンを構えた

ギョーン

涼子も引き金を引いた

シーネン

タイムラグがきてもなにも起こらなかつた

和泉「やっぱり反応なしか」

バシャバシャバシャ

そう言って和泉は巨大亀に近づいていった

ガン

そして巨大亀の甲羅を殴つた

和泉「くそ。かたいな」

巨大亀「？？？？」

巨大亀は和泉の攻撃で目を覚ました

巨大亀「ぐ」おおおおおおおお

和泉「マズいな」

河内「怒ってるな。かなり」

巨大亀は甲羅から少し首を出した

そして和泉たちを睨みつけた

ギロツ

ガガガ

巨大亀は足をしまった状態で体をひねらせた

和泉「！！」

和泉（心の声）「これはマズい。間に合つか」

和泉は巨大亀の行動にすぐに気づいた

ガシツ

ドスツ

涼子「わああ

河内「うおおお

和泉は涼子の腕を掴み宙に飛ばし、河内を押し倒した
河内は全身が川の中に浸かつた

ヒュン

すると巨大亀の尻尾が和泉を襲つた

和泉「ぐはあ」

その攻撃は和泉に直撃した
そして激しく弾き飛ばされた

第70話 ガメラ星人

多摩川河川

河内「ぶはつ！」

河内はその場から起き上がった

河内「和泉なにすんだ！」

河内は和泉がいた方向をみた

河内「あれ？ いない」

巨大亀「ぐ」おおお

巨大亀は手と足を甲羅から出した
そして河内に気づいた

河内「なんだ！」
「こいつはーー！」

ドスン

巨大亀は河内を踏みつけた
それは河内にあたり河内は川の地面にめり込んだ

巨大亀「ぐ」おおおお

巨大亀はその場をゆっくり歩き和泉を飛ばした方向に向かっていった

ガシッ

すると巨大亀の右足を誰かがつかんだ
それは河内だつた

河内「行かせねえよ！バケモノ！！」

河内はそのまま巨大亀の右足を思いつきりひっぱつた

河内「うおおおおおおおおお」

巨大亀は大きく体勢を崩した

サツ

河内はそれと同時に右足をはなし、その場を飛んだ
そして巨大亀の甲羅の上に乗った

タタタタ

ガチャ

河内「甲羅の上からならきくだろーー！」

河内は甲羅の中心までくるとホルスターからXガンを取り出し巨大
亀に構えた

ギョーンギョーンギョーン

だがXガンを打つても巨大亀にダメージを与えられなかつた

河内「くそがー！」

河内はXガンを投げ捨てるそのまま巨大亀の甲羅を殴つた

ガン

河内「いつてえ～！」

巨大亀の甲羅はびくともしなかった
逆に河内の拳がスー^ツシ_ゴしでもダメージがきた

ヒュン

河内が右腕を抑えこんでいる間に巨大亀の尻尾が河内を襲つた
河内は尻尾につかまれた

河内「なに～？」

ヒュンヒュンヒュン

河内はそのまま左右に振り回された

ガンガンガンガンガン

河内はそのまま川の地面や近くの橋の柱などに叩きつけられた

ガン

巨大亀はそのまま河内を投げ捨てた

ヒューン

バシャン

涼子「あやあーー。」

涼子はじばりへの間、宙を舞つていると、摩川の河川に落ちた

涼子「紫音。どーー。」

涼子は宙を舞つている間に、状況を理解しようとしていた
なぜ和泉が自分を宙にあげたのか

そして和泉が巨大亀に弾き飛ばされた事や、河内の一、部始終の戦闘など、
を宙に舞つて、いる間に見て、いた

バシャバシャバシャバシャ

そして涼子は和泉が飛ばされた方向に、いそいで向かつた

涼子「紫音。紫音」

和泉のいる場所につくと、倒れ込んでいる和泉の上半身をおこした

涼子「ダメ。気絶してる」

涼子は和泉に必死に呼びかけたが全く反応がなかつた

巨大亀「ぐーおおおお」

巨大亀は河内を飛ばしたあと涼子に気づいた
そして涼子のいる方向を見ながら向かつてきた

涼子「マズい。気づかれた」

そう言つて涼子は和泉を両手で抱えた

涼子（心の声）「紫音はいつも私の事守ってくれる。だから今は私が紫音を守る番だよね。紫音」

巨大亀は尻尾を涼子に向かつてしならせた
涼子はそれを和泉を抱えながら飛んで避けた
巨大亀は休むことなく涼子に尻尾の攻撃を続けた
涼子はそれを必死に走りながら避けた

涼子「はあはあ…」

涼子は必死で巨大亀の攻撃を避け続けた
だが一瞬だけ巨大亀の尻尾が涼子の腕にあたつた

涼子「きゃあ！」

その拍子に和泉を離してしまった

涼子「紫音ー！」

涼子はすぐさま和泉を拾い上げた

巨大亀「ごおおおおー」

すると巨大亀は尻尾の攻撃をやめ、大きく口を開けた

ボフン

巨大亀は大きな火球を放つた

涼子（心の声）「ダメ！避けれない」

涼子は思わず目をつぶつた

スパーク

すると火球は何者かに真つ二つにされた

ボン

ジュウウ

あたりの川の水が蒸発した
涼子はつぶつていた目を開いた

涼子「あなたは」

それは西城だつた

西城「大丈夫か？」

涼子「ええ。なんとか」

西城「和泉は。気絶してゐるのか」

涼子「うん」

西城「あの『テカ』さ。もしかしたらボスかもな」

そう言つて西城は巨大亀の方向へ歩み寄つていった
巨大亀は西城が歩み寄つてくるとその場を立ち上がり一足歩行にな
つた

西城「なつ！立ちやがつた！」

西城は巨大亀の行動に驚いた

西城「これじゃ。まるでガメラじゃねえか」

ガメラ星人「ぐごおおおお」

ガメラ星人は大きく吠えた

第71話 俊敏

多摩川河川

ドシンドシン

ガメラ星人はゆっくり西城に近づいてきた

ガメラ星人「ぐごおおおお」

ドゴッ

ガメラ星人は大きく吠えながら右拳を振り上げ西城目掛けて殴りつけた

西城はそれをその場から軽く飛び避けた

西城「あの、テカさでなかなかスピードがあるな」

西城はそう言うとガメラ星人に向かっていった

西城「だがそこまでだろ！」

そしてガメラ星人に飛びかかるとガンツソードを斬りつけた

西城「なに！」

西城は右腕を斬り落とそつとした攻撃が軽い傷しかつかなかつた

西城「かなり肉が厚い！」

ギロッ

ガメラ星人はその攻撃でキレた
ガメラ星人は西城をにらみつけると左拳で殴りつけた

西城（心の声）「なつ！速い！」

西城は空中で避けきれないとわかるとどうさにガードした

西城「くつ！」

西城は大きく吹き飛ばされた

ザザザザザバシャバシャ

西城は着地すると足で勢いを止めた

西城「なんてパワーだ！それにスピードもある」

ガメラ星人は西城が着地した地点にすぐさま走り近づいてきた

ガン

ガメラ星人は右拳を西城に振り下ろした
西城はそれを避けた

続けざまに左拳を振り下ろした

西城はそれも避けた

ガメラ星人は右、左と西城目掛けて殴り続けた

西城はそれを避け続けた

バシャバシャ

西城（心の声）「マズいな。水で足がとられる」

西城は浅瀬の水に少し足をとられていた
今まで以上に避けるのにキレがない事に西城は気づいた

西城「それなら」

西城はガメラ星人の攻撃を飛んで避けるとガメラ星人の右腕に乗った

西城「その首もらうぜ」

西城はそのまま右腕を伝つてガメラ星人の頭に向かつて走つて行った

スツ

西城「なあつー！」

するとガメラ星人は瞬時に右腕を引っ込めた
西城は空中で無防備な状態になった

ガン

ガメラ星人はそこに左拳で殴り飛ばした
西城は遠くに飛ばされた

西城「くつ！」

ガメラ星人は続けざまに尻尾をはらうように西城にたたきつけた

ズシャ

ガメラ星人「ぐ」おおおお

西城は避けれない事を予知してガソッソードで尻尾を斬り飛ばした

ボフンボフンボフン

ガメラ星人はそこに火球を飛ばした

西城は着地するとすぐさま体制を立て直し火球をギリギリ避けた

ボフン

するとその避けた所にガメラ星人は火球を飛ばした

バシャバシャ

西城は避けようとしたが足を水に少しどられた

西城「マズい」

西城は避けきれず火球が西城に被弾した

バシャバシャ

ズシャ

その攻防の間に涼子はガメラ星人に近づいていた
その手にはガンツソードを持っていた

そしてガメラ星人の足にガンツソードを斬りつけた
ガメラ星人の足の皮が斬れた
ガメラ星人は涼子に気づきにらみつけた

涼子「あたしが紫音を守るの!」

涼子はガンツソードを構えた

第72話 強打

多摩川ある大きめの橋近辺

進「結構歩いたけどいいな。星人」

淳「亮、レーダー見てみろ」

亮「おひ」

カシャン

亮はコントローラーのレーダーを見た

亮「近いな。この先の橋にいるな

淳「わかった。行くぞ」

3人は小走りでレーダーのさしている場所に向かつた

多摩川ある大きめの橋

3人は橋につくと星人を探した
すると前方から何ががゆっくり3人の方向に向かつてきていた
それはかめ星人とその上に乗る老いた力ヶバのような星人が乗つて
いた

進「なんだ。ジジイじゃねーか。楽勝だな」

淳「油断するな。本氣でいくぞ」

亮「了解」

進「おっしゃー！」

淳の右手にはHガンを持ち、左手にはガンツソード、亮と進は右手にXショットガンを持ち、左手には淳同様ガンツソードを持っていた

多摩川河川

多摩川の浅瀬に爆風と共にコケの匂いと生臭さの混じった水が蒸気となつてあたりを覆つていた

その中心に大の字で横たわる1人の男がいた

それは紛れもなく西城だった

西城はゆっくり起きあがると火球によつてくぼんだ地面をゆっくり登つていった

キュウウ

西城はスースの耐久力に救われたがその耐久力もあとわずかな事をスースは物語つていた

西城「……」

すると西城に走馬灯のよつなものが走った

西城「なんとなく…思い出してきた…俺が何をしてたか」

西城は途切れ途切れだが少しづつ記憶を取り戻しつつあった

ダンダンダンダン

その頃、ガメラ星人は涼子を踏みつけようと暴れていた
涼子はそれを必死に避けていた

ガチャ

涼子はホルスター×ガンから出した
右手にガンツソードを持ち左手で×ガンをもつた

ギヨーンギヨーン

ボンボン

Xガンがガメラ星人に被弾した

涼子「ダメ。火力がたりない」

ガメラ星人の肉厚の肌にはほとんどダメージがなかつた

ブンブン

涼子は避けながらガンツソードを振り回しガメラ星人を牽制した
だがガメラ星人は怯まず涼子に襲いかかつた

そしてガメラ星人は左腕を振りかざした

涼子はそれをかろうじて避けた

ガメラ星人は続けざまに右腕を振りかざした

涼子は避けたが体制を崩した

涼子（心の声）「マズい」

ガメラ星人は続けざまに左腕を振りかざした

涼子「きやあ」

涼子はガメラ星人に左腕で捕まれた
そしてそのまま握りつぶそうとした

バシャバシャ

すると西城がダッシュでガメラ星人に向かつてきました
そしてその場からガメラ星人目掛けて飛び上がった

シユツ

そしてガメラ星人の左腕にガンツソードを斬りつけた

ガメラ星人「ぐー」おおおお

ガメラ星人の指が数本斬り落とされた
呪縛から逃れた涼子を西城はキャッチし着地した

西城「調子のんなかめ！！」

そう言ってガンツソードをガメラ星人の方に向けた

ガメラ星人「ぐー」おおおお

ガメラ星人は西城目掛けて突進してきた

? 「……」

強化スーツをきた何者かが西城たちの戦闘を見ていた
するとアームではない本来の腕に身につけている腕時計みたいなも
のをいじつた

? 「5秒もいらないか」

力チ

ギュインギュインギュインギュイン

キュン

3

何者かは地面を強く蹴つた

そして凄まじい速さで移動し始めた

多摩川河川

ガメラ星人は西城に襲いかかった

2

ガン

するとガメラ星人は上から何者かに強烈に殴られたときつけられた

西城「なんだ？」

1

キウウウ

西城が何が起きたのか理解しようとしている間に何者かは西城の目の前にあらわれた

西城「佐々木か！」

? 「俺だ」

何者かは西城の問いに声で答えた

第73話 かつば仙人

多摩川ある大きめの橋

相川3兄弟はダッショウで急激に星人に接近した

かめ星人「！？」

かめ星人が3人に気づいた

ボフンボフンボフンボフン

かめ星人は迷わず火球を放つた

3人は避けながらかめ星人に向かっていった

キュイイイイン

淳がHガン構えかめ星人に放とうとした

ヒュン

するとかめ星人はそこに尻尾をたたきつけた

淳「くつ」

淳はそれをとつさに避けた

かめ星人は火球と尻尾を駆使して3人を寄せ付けなかつた
その間かめ星人の激しい動きに甲羅の上に乗つてゐる老いたカツパ
星人は微動だにしていなかつた

老いたカツパ星人は1メートルにも満たないくらい小さく、腰は曲
がつていて、目は常に閉じた状態にあり、白髪でヒゲが体長の半分
くらいの長さがあり、腕には杖のようなものをもち、身なりはまる
で仙人のような格好であつた

3人はかめ星人の攻撃を避け続けた
すると淳が2人に目で合図をした

2人は頷くとXショットガンを捨てた
それと同時に淳もHガンを捨てた
そして3人はかめ星人に急激に近づいた
かめ星人はそれを尻尾で払いのけた

3人はそれを飛んで避けた

この時すでに3人の狙いはかめ星人ではなく甲羅の上に乗つてゐる

老いたカツパ星人（カツパ仙人）だつた

3人はガンツソードを突き立てカッパ仙人を串刺しにしようとした
かめ星人は尻尾でカバーしようとしたが尻尾で攻撃した矢先でカバ
ーできなかつた

それも3人の作戦のうちであつた

進「おりやあ」

亮「死ね」

淳「くらえ」

カッパ仙人は串刺しにされそうな状況で動こうとしなかつた

ボオオ

するとカッパ仙人の持っている杖の先端から火の玉が出た

進「うああ

するとそれが進に被弾した

進は火の玉をくらうと地面に落ちた

コオオ

そこにかめ星人は火球を放とうとした
進のガンツソードの攻撃は阻止したが淳と亮の攻撃は避けられる状態ではなかつた

パシ

カン

するとカツパ仙人はガンツソードの軌道を杖と手でズラして軽くいなした

ボフン

かめ星人は火球を放つた

進「うおあ

淳はとつさにそれを避け距離をとつた

淳、亮「！！」

ボオオ

淳と亮が驚いているうちにカツパ仙人は杖から火の玉をだし亮にあ
てた

亮は火の玉をくらい地面に落ちた

その間に淳はかめ星人の甲羅に着地した

ヒュン

淳はガンツソードを斬りつけた

トン

するとカツパ仙人は絶妙なタイミングで淳の懷に優しく手をふれた
すると淳はそこから吹き飛ばされ地面に落ちた
淳と亮は体制を急いで立て直した

ヒュン

そこにかめ星人は尻尾をたたきつけた
2人は状態をそらして避けると距離をとった

第74話 だるま落とし

淳「見た目以上に強いな」

淳がそう言つと進と亮が近づいてきた

淳「次はしとめる」

亮、進「おう」

そう言つて3人はかめ星人とカツバ仙人に近づいていこうとした

タタタタタ

すると誰かが凄まじい勢いでこちらに近づいてきた

亮「あれは!」

亮がそれにいち早く気づいた

亮が見て確認できたのは近づいてくる何者かは強化スーツを着ているということだけだった

強化スーツを着た何者かは右アームを振りかぶった

ガン

強化スーツを着た何者かはかめ星人を殴り飛ばした

かめ星人は甲羅にこもりやり過ごしたがそのまま回転しながら弾き飛ばされた

カツパ仙人はだるま落としのよつに宙を少し舞うと何もなかつたよう地面に着地した

? 「なかなか硬いじゃないか」

淳「佐々木か? ?」

淳が強化スーツの何者かにとかけた

? 「よくわかつたな」

強化スーツを着た何者かは佐々木だった

淳「お前以外誰がいんだよ！それ着てのお前か隼人くらいだろ」

佐々木「まあ。 そう言えばそうだな」

2人が会話している間もカツパ仙人はその場から動く気配が全くな
かつた

佐々木「さあ。 どっちが俺の相手してくれんのかな」

佐々木はカツパ仙人とかめ星人を強化スーツごしにちらちら見た
今の佐々木たちと星人の位置関係は橋の中央にカツパ仙人がおり、
そのすぐ背後に佐々木、そしてカツパ仙人の30メートル程前方に
淳、亮、進があり、そのすぐ近くにかめ星人がいた

佐々木「お前か？」

そう言つてカツパ仙人を見ると何のためらいもなく右アームの肘に
ついているブレードを斬りつけた

ボフン

ガン

するとそこにかめ星人が火球を放つた
佐々木はそれをとっさに左アームの手のひらで受け止めた
かめ星人の攻撃で佐々木の攻撃は中断された

かめ星人「ギャオ！」

佐々木「どうやらお前から死にたいようだな」

佐々木はカツパ仙人そっちのけでかめ星人に急激に接近した

ガン

そして先ほど殴り飛ばしたのとは比にならないくらいの強さでかめ
星人を右アームで殴り飛ばした
かめ星人は橋の柵を突き破り河川敷まで吹き飛ばされた

佐々木「ハハハハ！ 楽しくなってきたぜーーー！」

そう言つて佐々木は橋の柵に飛び乗るとそこから勢いをつけ河川敷まで飛んでいった

亮「相変わらずあいつとは関わりあいになりたくないな」

進「ああ…」

2人は佐々木の高笑いをみて言った

淳「佐々木は勝手にやらせとけ。そんな事よりチャンスだぞ」

淳が2人に言った

進「そう言えば…」

その場にはカツパ仙人と淳たちしかいなかつた

亮「あの佐々木のアホのおかげでカツバじじいとさしになつたな」

その間もカツバ仙人はその場を微動だにしなかつた

第75話 同類（前書き）

感想をユーモア以外にも書けるように設定したので、よかつたらこのまでのカツバ星人編の感想ください。

お願いします（へ）

淳「やつは間違いなくボスだ」

淳は力ヶッパ仙人を見ながら言った

亮「本当か？？」

進「めちゃくちゃ弱そうだぞ」

淳「見た目で判断するなーさつきの俺たちの攻撃の逃れかたただ者
じゃない」

進「兄貴心配しすぎだって、まぐれだよ。それに逃れられてもあいつから受けた火の玉みたいな攻撃もスー^ツごしなら対したことなかつたし」

すると亮が進の肩に何気なく手を置いた

亮「確かに兄貴の言うことも一理ある。ここは慎重に攻めて行った方がいいかもしれない」

すると進が亮の手を振り払った

進「気安く触んな！…タ！」

亮「何だって！…」

そう言って2人は睨みあつた

淳「喧嘩してる場合じゃねえだろ！状況を考えろ…」

淳は2人の喧嘩の仲裁に入るとそう言った

進「めんばくねえ」

亮「すまん。かつとなりすぎた」

その間もカツパ仙人はその場を微動だにしていなかつた

淳「全力でいくぞ」

3人はガンツソードを持ちカツパ仙人に向かっていった

この時、このカツパ仙人が今後ガンツチームを脅かす恐ろしい存在になるとはまだ誰も気づいていなかつた

多摩川河川

西城「お前はあの時の！」

西城はジーンズ星人戦で佐々木と戦っていたときに乱入してきた隼人の事を思い出した

西城「さつきのはじめやつてやつたんだ」

西城は先ほどの隼人の高速移動の説明を求めた

隼人「……さあな」

隼人は少し沈黙したあと答えた

隼人「切り札ってのは秘密にしてこそ価値がある」「

西城「はあ！？」

コオオ

するとガメラ星人が火球を放とうとした

ボフン

そして隼人目掛けて大きな火球が飛んできた

パシ

すると隼人は右アームで火球を簡単に止めた

そしてくるつと一周回るとその火球をガメラ星人に投げ飛ばした

ボン

それはガメラ星人の顎にあたりガメラ星人は仰向けに倒れた

西城「やめろ！！」

すると西城が隼人に怒鳴りつけた

西城「そのかめは俺の獲物だ！勝手に横取りすんじゃねえ」

隼人「？？。横取りも何もお前の獲物とは決まっちゃいないだろ。
名前でも書いてあんのか」

隼人はすかさず挑発した

西城「ふざけんな」

隼人「それならあいつとやるなら俺を倒してからにしろよ」

隼人は再び西城を挑発した

西城「ああ。わかつたよ」

そう言つて西城はガンツソードを構えた

目はすでに血走つていて臨戦態勢をとつた

すかさず隼人も強化スースのアームを構え臨戦態勢をとつた

2人はしばらくの間睨みあつたまま動きがなかつた

西城「……」

隼人「……ふふ。ハハハハ」

すると隼人いきなり笑い出した

隼人「やつぱりお面白いわ！あの時助けに入つて正解だわ」

隼人の笑いに西城の緊張がとけた

そして隼人は西城に歩みよつて肩にアームの手をのせた

隼人「そうマジになんな。安心しな。はなっから横取りする気はねえから」

そう言つて西城を通り過ぎていった

隼人「やつぱりお前があの部屋で一番俺に近いわ」

隼人は意味深な事をいつた

西城は隼人の歩いて行く方向を見た

西城「どういう意味だ！？」

隼人「さあな」

隼人はそのままステルスマードになつてどこかに行つてしまつた

第76話 閃光（前書き）

前半の細かいミスを少し修正しておきました。
感想も受け付けているんですよろしくお願いします。

第76話 閃光

多摩川ある大きめの橋

3人はカツパ仙人に向かっていった

ボオ

するとカツパ仙人の杖の先から無数の火の玉が出てきた
そして流星の如く3人に降り注いできた

3人はそれを避けながら徐々にカツパ仙人に近づいて行つた

すると淳と進がカツパ仙人の元にたどり着いた

ブン

ブン

そして2人は同時にガンツソードを斬りつけた
するとカツパ仙人は杖と手で軌道をずらしながら

トン

いなしたあとカツパ仙人は淳に軽く手を触れた
すると淳はその場から吹き飛ばされた
カツパ仙人は淳を吹き飛ばしたあといつの間にか進の懷に潜り込んでいた

トン

カツパ仙人は進に軽く手を触れた
進はその場から吹き飛ばされた
2人はそのまま出遅れた亮のいる方向に吹き飛ばされてきた

亮「行かせるかよ！」

亮は手にもつているガンツソードをホルスターにしまうと2人の腕
を両手で掴んだ

淳「亮」

進「やるねえ！」

ガガガガガガ

亮はスースのパワーを全開にして2人の勢いを足で止めるとスースのパワーを全開にして2人をカツパ仙人のいる方向に投げ飛ばしたそして亮はホルスターからガンツソードを取り出しカツパ仙人のいる方向に走り込んでいった

淳と進はカツパ仙人を飛び越して背後に着地した

淳「ナイスだ！亮」

ボオ

そして再びカツパ仙人は火の玉を3人に飛ばし始めた
3人はカツパ仙人に向かいながらそれを避け続けた
そして3人はカツパ仙人を囮む形になった
3人は同時にカツパ仙人にガンツソードを斬りつけた

カツパ仙人はいなしきれない事をすでに直感していた
だが全く微動だにしていなかつた

ピカ――――ーン

するとカツパ仙人の半開きの目がいきなり開いた
あたりに少し閃光が飛ぶと凄い勢いで3人はその場から弾き飛ばされた
そして3人は橋の柵などに激しく打ちつけられた

淳「なんだ！今のは」

淳は驚いてしばし放心状態であった

進「う…うりやー」

進は叩きつけられたあとすぐにカツパ仙人に襲いかかつた
そしてガンツソードを斬りつけた
カツパ仙人は進の攻撃に全く動じなかつた

トン

するとカツパ仙人は進に軽く手を触れた

進はその場から弾き飛ばされ再び橋の柵に叩きつけられた

淳（心の声）「さつきのはいつたい。反作用なんてもんじゃない。
その場にいるのが許されないくらい強力な何か」

カツパ仙人は今までと変わりなく全く微動だにせずその場に立つて
いた

淳「？？」

すると淳が進とカツパ仙人のやりとりを見てなにかを直感した

淳「お前らー！…氣合い入れるー！」

淳は起きあがると怒鳴るように亮と進に言った

第77話 直感

淳（心の声）「俺の直感が正しければ」

淳はそう思いながらカツパ仙人に襲いかかつた

ボオ

するとカツパ仙人は火の玉を繰り出してきた

淳は避けながらカツパ仙人に近づきガンツソードを斬りつけた

トン

カツパ仙人は淳に軽く手を触れた

淳はその場から弾き飛ばされた

淳「お前らたたみかける！」

淳の声に亮が反応した

そして亮はカツパ仙人に近づきガンツソードを斬りつけた

トン

カツパ仙人は亮に軽く手を触れた
亮もその場から弾き飛ばされた

その後3人はたたみかけるようにカツパ仙人に襲いかかった
カツパ仙人はそれをうまく軽く手を触れて弾き飛ばしていった

淳（心の声）「やはりそうか」

淳「3人でいくぞ」

淳が亮と進に号令を出すと3人でカツパ仙人に襲いかかった
そしてガンツソードを同時に斬りつけた
カツパ仙人は全く微動だにしていなかつた

ピカーニーン

するとカツパ仙人の半開きの目がいきなり開いた
少し閃光が飛ぶと凄い勢いで3人は弾き飛ばされた

淳「もう一回だ！」

淳は弾き飛ばされたあとすぐに起きあがり言った

進「負けてたまるか」

それに反応して亮と進も起きあがつた

そして再び3人同時にカツパ仙人に襲いかかつた

そして同時にガンツソードを串刺しにするように突き立てた

トン

するとカツパ仙人は淳に軽く手を触れて弾き飛ばした

淳の攻撃を免れたが亮と進にガンツソードで串刺しにされた

淳はスーツのパワーを全開して足で勢いを止めすぐさまカツパ仙人に向かっていくとガンツソードを突き刺した

淳「やつぱりな。あの日の閃光は使つたあと次までにだいぶタイムラグがある。そこを狙えれば隙ができると思ったがどんぴしゃだつたな」

亮「やるな。兄貴」

進「さすが」

カツパは串刺しにされても微動だにしていなかつた

多摩川河川

ガメラ星人はその場から起きあがると西城のいる方向を見た

西城「起きあがりやがつた」

西城はそう言つてガンツソードを構え臨戦態勢をとつた
すると隣に誰かが同じようにガンツソードを構えた

西城「やめとけ。死ぬぜ」

それは涼子だつた

西城「あんたの動きじゃあいつとは渡りあえない。それにあいつは
俺の獲物だ」

涼子「点数ならあげるわ。私もやるときほやる女よ」

涼子は今までにない強い眼差しをしていた

涼子「手伝わせて」

西城は涼子強い眼差しがカレンと重なった

西城（心の声）「やつぱればそんなよくしてたな」

西城は一瞬カレンを思い出した

西城「足手まとこになんなよー。」

涼子「はいー。」

そう言って2人はガメラ星人に向かっていった

第7・8話 一撃

ガンガンガンガン

ガメラ星人は向かつてくる2人に両腕を交互に振り下ろしながら殴り続けた

西城はそれを颯爽と避け涼子もそれを必死に避けて行つた

ザツ

西城は横一線にガンツソードを斬りつけた
西城の攻撃がガメラ星人の左足にあたつた
ガメラ星人の肉厚の皮膚で切り落とすことができなかつたがガメラ
星人は少しよろめいた

西城「おりやあ」

ガン

西城は思いつきりガメラ星人の足を殴り飛ばした

ガメラ星人「がぎや」

ガメラ星人は大きく体制を崩した

そこを涼子がすかさずガンツソードをガメラ星人に斬りつけた
ガメラ星人はとっさに指の切り落とされた手でそれを受け止めた

ガメラ星人「がぎい」

涼子「きやあ！」

ガンツソードの刀身を掴むと涼子ごと投げ飛ばした
涼子はその拍子にガンツソードを手放してしまった
その隙に西城はガメラ星人に斬りかかった

ガメラ星人はすかさず右腕を西城に殴りつけた

西城はそれを飛んで避けると右腕に乗り踏み台にするとガメラ星人
に飛びかかった

そして西城はガンツソードを突き立てガメラ星人目掛けて突き刺した

ガメラ星人「ぐぎやああああ」

西城は顔に突き刺すつもりだったがガメラ星人はとっさに状態をず

らしたせいでガメラ星人の右肩に突き刺さった

ガメラ星人は体を揺らし西城を振り落とそうとした

だが西城はガンツソードにぶら下がつたまま離そうとしなかつた

ガメラ星人は痺れを切らして左腕を西城目掛けて殴りつけた

西城はその攻撃に合わせてガンツソードの柄を鉄棒のように半周して避けたあと柄に乗りそこからガメラ星人の顔に飛びかかった

チュイイイン

西城はスーツのパワーを全開にすると右腕でガメラ星人を殴り飛ばした

西城の渾身の一撃でガメラ星人は河川に叩きつけられた

西城「はあ…はあはあ…」

西城は河川に着地した

西城「大丈夫か〜！？」

西城はなげ飛ばされて倒れている涼子に聞いた
涼子はすかさず腕をあげ親指を立てて大丈夫なことを伝えた

ガメラ星人「ぐぎやぐ」お」

ガメラ星人はゆっくり起きあがると西城を睨みつけた

西城「やっぱり今のじゃ倒せないか」

ガメラ星人「ぐぎや」

ガメラ星人は起きあがるとすかさず西城に襲いかかった

右左とガメラ星人は西城を殴りつけた
西城はそれによけつづけた

西城（心の声）「最初にくらべてキレがなくなってきたな。さつきの一撃かなりきいてるな」

すると避けながら一気に懷に潜り込んだ

チュイイイン

再びスースパワーを全開にしてガメラ星人の腹を左腕で殴りつけた

ガメラ星人「ぐ…うう」

腹を抱えながらガメラ星人は倒れ込んだ
そこをすかさず右腕で顔を殴り飛ばした

西城「はあはあ…どうだ！」

ガメラ星人「ぐぎぐ」

ガメラ星人は倒れ込みながら西城を睨み続けていた
西城はすかさずガメラ星人に走りこんでいった

チユイイイン

スースパワーを全開にすると右腕を振りかぶった

ガツ

するとガメラ星人は甲羅の中に潜り込んでしまった

西城「しまった！！」

するとガメラ星人はそこから高速スピンをし始めた
あたりの水を巻き込みかめ星人の高速スピンとは比にならないくらい
の勢いで西城に向かつてきた

第79話 爆走

キュルーン

ガメラ星人は高速に回転しながら西城に向かつてきました
西城はとつさにその場を全速力で走り出した
そこをガメラ星人がギリギリの所まで迫つてきました

バシャーン

西城はそこから飛び込むように飛んでガメラ星人から逃れた

キュルーン

ガメラ星人は反転すると再び西城に向かつてきました

西城「ぶはっ！」

西城は急いで起きあがると再び走り出した

涼子「えつ？」

涼子はすでに起き上がりっていた

涼子「ちょっと…」いつ来ないでよ」

西城は涼子のいる方向に走って行つた
涼子もその場から走り出した

2人は多摩川の河川を下るように走りつけた

西城「マズいぞ」

そう言つて西城は走るのをやめ立ち止まつた

涼子「えつ？」

つられて涼子も立ち止まつた

西城「これ以上行くと水が深くなる。水中じゃやつに勝ち田がない」

涼子「どうするのよ」

キュルーン

そう言つてゐる間にガメラ星人は西城たちに迫つてきた

西城「やつが迫つてきたのと同時に横に飛ぶんだ。そのあとは全力で走れ」

涼子「そんなの無理よー」

西城「やるしかない。お前ならできる」

ガメラ星人は高速回転しながら西城たちに迫つた

西城「俺が合図したら飛べ!」

涼子「えつー？」

ガメラ星人は2人に接近した

西城「今だ！」

そう言つと西城は思いつきり横に飛んだ
涼子も西城の声と同時に西城とは逆の方向に思いつきり飛んだ
2人はギリギリの所でガメラ星人から逃れた

西城「はあはあはあ

涼子「はあはあはあ

すると2人は起きあがると再び走り出した

2人は河川の両サイドを上流に向かつて走つてゐる状態であった
ガメラ星人は反転すると西城ではなく涼子目掛けて高速回転しながら向かつていつた

涼子「はあはあ

涼子は必死で走りつけた

西城「マズい」

西城はそれに気づくと涼子のいる方向に向かっていった

涼子（心の声）「もうダメ…」

涼子の走りに限界が近づいてきた

それと同時にどんどんガメラ星人との距離も近づいてきた

ザツ

すると涼子の背後に何者かが現れた

何者かはガンツソードを構えるとガメラ星人に斬りつけた

涼子「えっ！」

ギュルガガルルガガガガガ

激しい摩擦音がなるとガメラ星人の進行を止めていた

涼子「紫音」

それは和泉だつた

和泉は涼子が落としたガンツソードを拾つて使つていた

和泉「速く逃げろ」

ギュルガガガガ

ガキン

するとガンツソードがへし折れた

和泉「なに！？」

和泉はとっさにガメラ星人の進行方向から逃れた

和泉「くつ！」

和泉は残された涼子を救うべく走り出した

和泉「間に合え！」

そうしている間にガメラ星人は涼子に接近した

涼子「きやあ！」

すると横から西城が飛び込んできた
涼子を抱え込むと2人は倒れ込んだ
2人はガメラ星人の軌道から外れ逃れた

西城「このままじゃらちがあかない」

西城は起きあがるとガメラ星人を見た

西城「あれは！？」

すると西城は何かに気づいた

西城「次はしとめる」

すると西城は多摩川の河川の中央まで行つた
そして臨戦態勢をとつた

第80話 猛攻

ガメラ星人「ぐぐつ」

ガメラ星人は高速スピinnをしながら西城を確認すると今より回転力を上げた

西城（心の声）「やれるか。俺に……。いや。やるしかない」

西城は隙のないどんな状況でも対応できるなめらかな状態でガメラ星人に向かっていった

ヒュン

西城がガメラ星人に近づくとガメラ星人は頭を出した

ガン

すると回転しながら首をしならせ西城に叩きつけた
西城はそれを横にそらすように避けた

ガン

ガン

ガン

ガメラ星人は続けざまに首をしならせ西城に叩きつけ続けた
西城はそれをすべて避けた

ガメラ星人「がうう」

ガメラ星人は頭を叩きつけたあとに高速回転した甲羅で西城にタッ
クルした

西城「今だ！！」

ガメラ星人は左方向から向かってきた

西城はそれに合わせて右肩に突き刺さっているガンツソードを左手で掴んだ

西城「ヤバッ！」

すると西城は回転の勢いで左手を離してしまった

パシッ

その時の西城はすごく冷静だった
左手を離したと同時に右手でガンツソードを掴んだ
すかさず左手もガンツソードを掴んだ

チュイイイン

そして西城は足のスースのパワーを全開にした

ガガガガガ

西城はそのまま2、3回転回されたがそれと同時にガメラ星人の回転スピードが落ちた

西城「くそつたれが！」

西城はスーツのパワーを上げた
それと同時に回転スピードもどんどん落ちていった

ガメラ星人「ギャオ」

西城「！？」

ガメラ星人は首を西城のいる方向に向けたあとガメラ星人の大きな口が西城に向かってきた

西城（心の声）「しまった！」

西城は避けきれないとすぐに察した

ガシツ

すると誰かがそれを受け止めた

西城「あんたは」

それは河内だつた

河内「うおおお

河内もスースのパワーを全開にしてガメラ星人の頭を止め続けた
それと同時にガメラ星人の高速スピinnは止まっていた

河内「速く！とどめを」

西城「ああ！」

西城は右肩に刺さったガンツソードを深くえぐるように差し込んだ

ガメラ星人「ギヤオ！」

西城はガメラ星人の反応を見て嫌な予感がした
すると西城はガンツソードを持ちながらその場を飛びガンツソード
の上に逆立ちするような形になった

それと同時にガメラ星人の右肩から腕が飛び出て2人をなぎ払うよ
うに振りかざした

西城「避ける！」

河内「えつ！？」

西城はとつさの行動で回避できたが河内はその場から吹き飛ばされた
するとガメラ星人は両腕、両足を取り出し再び起き上がった
西城はガンツソードにぶら下がった状態でいた

ガメラ星人「ゴオオ」

ガメラ星人の口が赤く光つた

西城「おい！嘘だろ！」

ボフン

するとガメラ星人は西城のぶら下がっている右肩目掛けて火球を放つた

ガメラ星人の右腕は火球を受け吹き飛んだ
そこに西城の姿がなかつた

涼子「西城さん！」

和泉と涼子は戦闘を見ていた

和泉「あそこだ！」

和泉はガメラ星人のはるか頭上を指差した

そこには西城がいた

西城「あいつ右腕ごと俺を吹き飛ばそうとしやがった」

西城はとっさに反動をつけ右肩から空に飛び上がっていた
ガメラ星人はそれに気づくと西城を見た

ガメラ星人「ゴオオ」

再びガメラ星人の口が赤く光った

ボフン

ガメラ星人は空中の西城目掛けて火球を放った

シウン

西城「これで終わりだ！」

西城はホルスターからガンツソードを取り伸ばすとおもいつきり火球に向かつて投げ飛ばした
ガンツソードはすごい勢いで火球に突き刺さつた
だが火球の勢いは止まらなかつた

西城「うおりやあああ！！」

西城は空中から火球目掛けて蹴りをしながら落ちていつた

ぐぐつ

ボン

ザシユ

西城の蹴りは火球に刺さつたガンツソードの柄を蹴り押すと火球は
真つ二つに割れそのままの勢いでガメラ星人の右目から斜めにガン
ツソードが突き刺さつた
西城は突き刺さつたガンツソードを引き抜いた
あたりにはガメラ星人の激しい血吹雪が飛んだ

西城「終わりだ」

西城は飛び降りながらガンツソードを振りかぶりガメラ星人の首に
斬りつけた

ガメラ星人「がうう…」

ガメラ星人は西城が斬りつける前に左拳で殴りつけた

西城「！？」

西城はそれを予期していなかつた
西城はとっさに攻撃を止めた

ギヨーン

すると和泉が左腕をXショットガンで打ち抜いた
左拳は西城に被弾する直前に弾け飛んだ

西城「和泉」

西城はガメラ星人に背を向けた状態で着地した

ガメラ星人「ぐ……るう……う」

ガメラ星人は血まみれで虫の息だった

ズシャ

西城は振り向きざまにガメラ星人の首をキレイに斬り飛ばした

西城「はあ……はあ……」

和泉「終わったな」

西城「ああ……」

西城はガメラ星人の肩に刺さったガンツソードを抜くとホルスターにしました

第80話 猛攻（後書き）

ガメラ星人を倒した西城たち、ついに正体を表すかっぱ仙人。

亮「なんだ！こいつわー！」

淳「お前ら逃げろ！」

進「兄貴～～！」

かっぱ仙人「お主らではワシには勝てん」

次話乞うご期待

第81話 変体

ある大きめの橋 中央

相川3兄弟はガンツソードをかつぱ仙人に差した状態でいた

? 「ふふ」

すると誰かの笑い声が聞こえた

亮「んつ？」

進「どうした？」

亮「なにか聞こえなかつたか。笑い声みたいな」

淳「笑い声？俺たち以外に誰もいないだろ」

? 「ふふ。ははは」

亮「やつぱ聞こえたよ」

進「ああ。俺にも聞こえた」

淳「じゃあこいつが笑つたってか」

淳はガンツソードを差しながらかつぱ仙人を指差した

ブン

するとかつぱ仙人が杖を一振りした
3人はその場から弾き飛ばされた

淳「まだ動けたのか」

? 「ふふふ。はははははーーー」

亮「やつぱりあいつだって」

亮はかつぱ仙人を指差した

かつぱ仙人「お主らなかなかいい動きをするな。ははは」

3人は頭の中から声が聞こえきた

進「なんだこれ??」

進は頭を叩いたが何も変わらなかつた

淳「やつからのテレパシーだ。体に害はない」

かつぱ仙人「ほう。私の力に動じないとは」

淳は同時にその場からかつぱ仙人に向かって行こうとした

かつぱ仙人「まあ。待て」

かつぱ仙人はガンツソードが刺さつたままテレパシーを送つた

かつぱ仙人「お主たちと少し話がしたい」

かつぱ仙人は3人にテレパシーを送つた

淳「どうこいつもりだ」

かつぱ仙人「まあ。 そう言う出ない。 お主たちは現地のものだろ
ワシたちの居場所がなぜわかつた」

亮「兄貴。 こいつヤバいんじゃないか」

亮が淳に言った

淳「そんなの知るか！俺たちは勝手に送られてきただけだからな」

淳は亮の話を聞きながらかつぱ仙人に言った

かつぱ仙人「送られてきた？？ほう。 と言つことは何か輸送するも

ので送られてきたのかね？？それは誰かに依頼されてきたのかね？

進「おい。兄貴、じこつマズいんじゃ

淳「わかってる」

淳は今までの経験上かつぱ仙人のヤバさをすでに理解していた

かつぱ仙人「話すりいか。なら

すると一瞬でかつぱ仙人は進と距離をつめた
そして進の首を掴むと体に刺さったいるガンツソードを一本抜き進
に突き立てた

進「ぐつがはつ」

淳「ぐつ……」

かつぱ仙人「どうだね。話す気になつたかね」

進「がああ

かつぱ仙人は進の首を強く掴んだ

淳「ガンツだ！俺たちはガンツに頼まれたんだ！！」

かつぱ仙人は進の首から手を離した

かつぱ仙人「ガンツ？？なんだね？それは

淳「黒い球だよ。それ以上は俺たちも知らない」

かつぱ仙人「ふざけているのか

かつぱ仙人の笑顔だつた顔が一変したように淳を睨みつけた

ガチャ

進「油断したな」

ギヨーン

進はホルスターからXガンを取り出すとかつぱ仙人の顔に突きつけ
ると引き金を引いた
進は起き上がるとその場から距離をとった

ボン

淳「ナイスだ！進」

進「おうよ」

かつぱ仙人の顔がキレイに吹き飛び残った体は地面にたおれこんだ

亮「倒したなら転送だろ」

進「いや。さつき佐々木が吹き飛ばした奴がいるからまだだろ」

淳はその間にHガンを拾つた

淳「じゃあ他の場所に移るぞ」

そう言って3人は移動しようとした

かつぱ仙人「ふふ。お主らではワシには勝てんよ」

3人にかつぱ仙人のテレパシーが飛んできた
それと同時に3人の背筋がゾクツとした

進「マジかよ」

後ろを振り向くとかつぱ仙人の体が起き上がつていた

かつぱ仙人「お主たち私を本気にさせたいようだな。なら見てるがいい

するとかつぱ仙人の背中がゆっくりと割れ始めた
すると中からだんだんと何かが現ってきた

亮「なんだ！」「いつは……」

それはまるで蛇が脱皮するような感じであった

3人は自然と体が震え始めた

それはかつぱ仙人の底知れない力に3人は圧倒され恐怖を感じていたからである

するとかつぱ仙人の背中の割れ目からゆうに2メートルを超えている
である巨体が現れた

全身は屈強なる筋肉で覆われており、先ほどの老体とは打って変わつて若々しかつた

頭は長髪でかつぱ星人とは違ひ皿が乗つておらず、肌の色はかつぱ星人の緑色とは違ひ青みをおびており、背中に甲羅がついておらず
変わりに長い尻尾がついており、先端には大きな鎌のような鋭利な刃物がついていた

淳「お前ら逃げろーー！」

淳がそう言つと淳の左腕がキレイに斬り飛ばされた
淳がそれに気づくのは3秒後であつた

進「兄貴～！！」

亮「いくぞ！」

亮は淳の指示に忠実に従いその場から逃げることが最良だと感じ走り始めた
進もそうすべきだと感じ走り始めた

かつぱ仙人「逃げられないよ。俺からは」

その言語はテレパシーではなくかつぱ仙人の口から発せられた

第82話 圧倒

淳はかつぱ仙人の尻尾の刃物（刃尾）で肩から左腕を切り落とされた
すると淳は地面に膝をついた
亮と進はその背後を爆走していった

ガン

ズザツ

かつぱ仙人はその場から強く踏み込むと一瞬で2人の前に回り込んだ

進「なに！」

ガシツ

するとかつぱ仙人は両手で2人の首を掴むと軽々持ち上げた

亮「ぐがつ！」

進「がはつ！！」

かつぱ仙人が握力で首に力を加えると2人は呼吸ができなくなってきた

2人はもがく暇がなくかろうじてかつぱ仙人の腕を掴んでいるのが精一杯だった

この一連の出来事はまさに一瞬であった

ガツ

すると淳は背後を振り向くと右手に持っているHガンをかつぱ仙人に構えた

キュイイイイイン

あたりにHガンのチャージ音がなつた

するとかつぱ仙人は右腕で掴んでいる亮を淳に投げつけた

淳はそれに驚き一瞬だけひるんだ

それと同時にかつぱ仙人はいきなり後ろを向いた

すると2人はかつぱ仙人の尻尾で横からはたき飛ばされた

ガン

淳「ぐあつ！」

2人は橋の手すりに激しく叩きつけられた

淳は同時にHガンを手放してしまった

亮「兄貴！血が」

淳は叩きつけられたこともあり傷口から激しく出血していた

亮はそれをとっさに止血した

淳「バカ！目をそらすな！！」

亮「えつ？？」

グサツ

亮は背中から腹に刃尾で突き刺された

亮「がふつ……あ……に……き」

亮は刺された箇所から出血すると口から吐血した
するとゆっくりと亮の体から力が抜けていった

淳「りおおおーーうーー！」

淳は叫んだ

だが無情にもかっぱ仙人は刃尾を亮から抜くと亮はその場に力なく
倒れ込んだ

それはまさに屍であつた

淳「うおおおおおおおお...」

淳は起きあがるとかつぱ仙人に向かつていつた

バチーン

すると淳は尻尾で逆方向に簡単に弾き飛ばされた
淳は橋の柵に強く叩きつけられた

その間、かまれていた進が動いた

進は右足を強く上げ首目掛けて蹴りつけた

パシツ

すると右腕で簡単に受け止めるその足を掴み宙に高く投げ飛ばした

進はすゞ熱いで飛ばされると橋の欄に呑きつけられた

キュウウン

それと同時に進のステップが破壊されステップの丸い部分から液体が流れでた

淳「はあ……はあ……はあ」

淳はゆっくりと起きあがると力なくかっぱ仙人に歩み寄つていった

淳「ゆるせ……ねえ……りょうを……かえせ」

かつぱ仙人「おもしろこ」とを言つた。もんざん私の同胞を殺してきた奴の言ひセリフとは到底思えないな」

淳「俺たちに相手を選ぶ権利なんてないんだよ」

かつぱ仙人「何をいいいかさっぱりわからない。が。もういい。お前達は暴れすぎだ。私の多くの同胞たちがお前達に殺された。もう許されない。例えお前達が神に許しを解いても私は決して許さない。お前達全員皆殺しだ」

淳はゆっくりと歩み寄ると近くに落ちていたガンシソードを拾つた

淳「つまつかま

淳はガンシソードを右手に持ちかっぱ仙人に向かっていった

ヒュン

するとかっぱ仙人の刃尾が淳を襲つた

淳はとっさにそれを避けた

バチーン

すると恐ろしいほど速く避けた尻尾が帰つてきて淳は弾かれ飛ばされた
淳は再び橋の柵に叩きつけられた

かつぱ仙人「お前の相手はあとでしてやる。お前の大好きな弟がやられるところを見ていの！」

淳「やめろ～～！」

かつぱ仙人は進に近づいていった
進は殴られた衝撃で気絶していた
かつぱ仙人は右腕を構えた

キュイイイイイン

するとあたりにHガンのチャージ音がなった

ドン

かつぱ仙人はHガンの攻撃を簡単に避けた

かつぱ仙人が避けた場所は丸く地面がへこんだ
かつぱ仙人はあたりを見渡したすると1人の男がいた

淳「清水」

Hガンを撃つたのは清水であった

清水「淳。手こずってるみたいだな」

淳「氣をつける。そいつはボスだ」

清水「ああ。俺にもなんとなくわかる」

清水はその場から2、3歩ゆっくりと歩いた

シウン

すると刃尾が清水を襲つた

それは寸前の所で清水にあたらなかつた

清水「！？」「

それはまさに一瞬。

清水にとつてはまさに一瞬の氣の迷い、油断。

不用意にかつぱ仙人に近づいた事により訪れた命の危機

ツーウ

清水の頬が浅く切れ血が頬を滴った

清水は血が滴つてから頬が切れていることに気づいた

清水はとっさに臨戦態勢をとつた

かつぱ仙人「遅い」

するとかつぱ仙人は清水と距離をつめていた

そして左腕を振りかざした

清水はとっさに避けた

そして急いで距離をとつた

キユイイイイイン

清水はHガンを構えるとHガンのチャージ音がなった
距離をとる清水に刃尾を突き立てるように尻尾をしならせた
刃尾は清水の顔面目掛けで向かつてきた
清水はとっさに首をそらしてそれを避けた

ドン

清水のHガンが放たれたが刃尾を避ける時に狙いがそれでかつぱ仙人にはたらなかつた
するとかつぱ仙人は尻尾を戻すと同時に清水の足に背後から叩きつけた
清水はその場から勢いよく倒れた

ザツ

するとかつぱ仙人は清水の倒れているところに右腕を振りかぶつた

ガン

かつぱ仙人の攻撃で橋の地面が砕けた
そこに清水の姿がなかつた

清水はとっさに身を転がしそれを避けその場を立ち上がつた

ザツ

すかさずかつぱ仙人は追走した

それは清水の感知できるギリギリなくらい凄まじく速かつた
そして左腕で清水の腹めがけて殴りつけた

清水はHガンを投げ捨てとっさに両腕にスーツのパワーを全開にしてガードをした

ガン

清水はその場から弾き飛ばされた
そして橋の柵に叩きつけられた

清水「くつ…」

清水はどのようにかかっぱ仙人の攻撃を防ぐことができた
清水は自分の両腕を見たするかっぱ仙人の攻撃を受けたせいで激しく震えていた

第84話 蟻と軍隊

清水「なんてパワーだ。化け物か！」

するとかっぱ仙人は清水に歩み寄ってきた
清水はとっさに臨戦態勢をとった

かっぱ仙人「まずは。そうだな…指をもらうつか」

清水「なに！？」

するとかっぱ仙人はその場を無差別に俊敏に動き始めた
それは認識するのが難しいくらい凄まじい速さであった

清水「くつ」

清水はかっぱ仙人が無差別に動いているせいでの場から簡単に身動きがとれる状態ではなくなった
それでも清水は必死にかっぱ仙人を目で追った

ガツ

シユ

すると今まで動いていたかつぱ仙人が目の前に現れた
そして右腕で清水に殴りかかった
清水は目で必死に追っていたおかげか間一髪それを避けた
そしてその隙を見るやその場から走り出した
するとかつぱ仙人はその場を立ち止まっていた
清水はそれを疑問に思いかつぱ仙人と少し距離のある場所で立ち止
まつた

かつぱ仙人「次はそうだな。その右腕もあおうか」

清水「！？」

清水は疑問に思つたこいつは何を言つてゐるのか不思議でしょうが
なかつた

かつぱ仙人「まだ氣づかないのか」

するとかつぱ仙人は左手で4本の指を軽く上に投げながら言つた
清水はそれを見るや自分の右手を見た

清水「はあつ！..」

すると右手の人差し指から小指までの指がごつそりもつてかれていた

かつぱ仙人「お前、少し勘違いしてるだろ」

清水「えつ？」

かつぱ仙人「お前の考えはあれだろ決闘だと同等の条件で戦つて
いると思っているだろ」

清水「それがどうした！」

かつぱ仙人「違う。大いに違う。私とお前では力の差は歴然、蟻が
大砲をもった軍隊に立ち向かうくらいの歴然とした差、だからこれは
決闘ではないただの私の一方的なエゴにより行われる虐殺と言う
べきかな」

清水「ふざけんじやね～！..」

その隙に清水はかつぱ仙人に殴りかかった

かつぱ仙人は首をそらしそれを避けた

かつぱ仙人「本氣であてたいのなら顔のような小さい的より

するとかつぱ仙人は右腕で清水の腹を殴った
かつぱ仙人の右拳は腹にめり込んだ

清水「がはっ！！」

その勢いで清水のメガネがゆっくり外れ地面に落ちた

かつぱ仙人「ここを狙うべきだろ

そのまま右腕を振り抜くと清水は吹き飛ばされた
その間に進は田を覚ました

進「うつ。つつ」

進はゆっくりと起き上がり状況を必死で把握しようとした

進「これじゃうかつに近づけないな

腕に流れるヌーツの液体を見て言つた
そしてホルスターからあるもの出した

進「これなら

それはYガンだった

その様子にかつぱ仙人より速く淳が気づいた
すると淳はHガンを拾いかつぱ仙人に向かつていった

淳（心の声）「頼むぞ。進！」

その心の声を進は背中から感じた

キュイイイイイン

すると淳はHガンのトリガーを引いた

淳「蟻が軍隊に勝てないっていったよな

その声を聞いてかつぱ仙人は背後を振り向いた

淳「蟻も集まれば軍隊になれる」と証明してやるか。」

第85話 補足？？

かつぱ仙人「どうだね。話す気になつたかね」

進「ぐつがはつ」

力チ

進は数分前の事を思い出した

進「あの時かけた保険がまさか役に立つとはな」

進は数分前にYガンでかつぱ仙人をロックオンしていた

進「問題は目標が変化してもホーミングしてくれるか」

進はかつぱ仙人の隙を伺つた

ドン

淳のHガンが放たれた
だがそこにかつぱ仙人の姿はなかつた

ガツ

するとかつぱ仙人は淳と距離を詰めていた
そして左腕を殴りつけた

淳はHガンを捨て右腕で向かつてくる左腕の起動をずらした
かつぱ仙人は左腕の手のひらを広げると右耳をえぐりとつた

淳「ぐつう！」

淳はそれを耐えた

そして左足にスー^ツの力を全開にした
そのまま左足でかつぱ仙人の腹を蹴り飛ばした
かつぱ仙人は少しひるんだように見えた

淳「今だ！！」

その声と同時に進はY^イガンを放った
それと同時にかつぱ仙人は右腕で淳の腹を殴りつけた
右腕を振り切ると淳は吹き飛ばされた
その間にY^イガンのアンカーはかつぱ仙人に向かっていった
かつぱ仙人はそれに瞬時に気づいた
そして向かってくるアンカーを簡単に避けた

進「頼む！」

進はアンカーがホーミングするように祈った

多摩川河川

和泉「おかしいな」

和泉は西城に歩み寄つてきた

和泉「転送が始まらないぞ」

西城「他にまだターゲットが残つてゐるのかもな」

するとそこには河内が歩み寄つてきた

河内「レーダーで確認したがここから少し上流の橋に一体と河川敷の近くにも一體いる」

和泉「どうする? 援軍に行くか? ?」

和泉は西城に言った

西城「ああ。 時間も残り少ないからな。 それに……」

和泉「? ?。 どうかしたか?」

西城「妙な違和感を感じる」

河内「氣のせいだろ」

西城「だといいが」

和泉「とりあえずこのまま上流に向かっていくぞ」

そう言うと和泉たちは走り出した

それに続くように西城はついていった

多摩川ある大きめの橋

かつぱ仙人の避けたアンカーがホーミングして背後からかつぱ仙人
を襲つた

かつぱ仙人はそれを飛んで避けた

進はそれを見てガツツポーズをした

その避けたアンカーが再びかつぱ仙人を追尾した

かつぱ仙人「ぐつ！」

ヒュンヒュンヒュン

するとかつぱ仙人はアンカーに捕まつた

進「これで終わりだ！」

進はYガンのトリガーを引こうとした

かつぱ仙人「ふんっ！！」

すると軽々アンカーを引きちぎつた

進「なに！！」

かつぱ仙人「やつてくれる」

進は再びYガンをかつぱ仙人に向けた

そしてYガンのアンカーを放った

アンカーはかつぱ仙人目掛けて一直線に向かって行った

バチン

かつぱ仙人はそれを尻尾で払いのけた

その間に清水は背後からかつぱ仙人に襲いかかった

するとかつぱ仙人の刃尾が清水を襲つた

清水の右腕は右肘から刃尾にきれいに切り落とされた

かつぱ仙人「言つただろ。右腕もらうつて」

するとかつぱ仙人は尻尾で清水を弾き飛ばした

その一連が終わつたと思った矢先かつぱ仙人は進と距離をつめた

進「えつ??」

するとかつぱ仙人は進の首から頭をえぐりとつた

そしてえぐりとつた頭をすぐに投げ捨てた

淳は吹き飛ばされ地面に倒れ込んでいた

淳「ぐつう」

するとそこに何かが転がってきた
それは進の頭だった

淳「嘘だろ。進…嘘だよな！」

淳はそれが進だとすぐに理解できた

ぐしゃ

するとかっぱ仙人はその頭を淳の目の前で踏み潰した

かっぱ仙人「どうだ！俺が憎いか」

淳「うわああああ

淳はすぐさま起きあがるとかっぱ仙人に殴りかかった
するとかっぱ仙人は淳を蹴り飛ばした

淳はその場から吹き飛ばされた

かつぱ仙人「お前は生かしておいてやるよ。そのまま兄弟が死んだ事を悔やめそして苦しめ！！ハハハハハ」

かつぱ仙人は高笑いをした

淳は放心状態でかつぱ仙人の言つていることをほとんど聞きとれな
い状態であった

そのままかつぱ仙人は清水にゆっくりと歩み寄つて行つた

清水「くっそがここで終わりかよ

清水は腕を止血しながら言つた

そしてかつぱ仙人は清水の真ん前まで来ると右腕を振り上げた

清水は死を覚悟した

そして清水に走馬灯が走りかけた矢先に清水の横からすごい勢いで
ある人影が現れた

第86話 肉弾戦

その何者かはためらいなくかつぱ仙人に凄まじくキレのあるラリアットをかました

かつぱ仙人はそれを状態を地面すれすれまでそらして避けた
そこからかつぱ仙人は左腕を何者か目掛けて殴りつけた
何者かは追撃しようとしたが左腕を避けることを優先した
その間にかつぱ仙人は後ろに退いた

清水「小富山！」

その何者かは小富山であった

小富山「あいつがボスか？」

小富山は清水に話しかけた

清水「おそらくな」

小富山（心の声）「俺のラリアットを簡単に避けるとは本気で行かないとまずいな」

すると小富山はファイティングポーズをとりボクシングのようなりズムをとり始めた

小富山「ふううう…」

小富山はかつぱ仙人の顔目掛けて強烈な右ストレートを殴りつけた
かつぱ仙人はそれを首をずらして避けた

たたみかけるように左ストレートをかつぱ仙人目掛けて殴りつけた
かつぱ仙人はそれを簡単に避けた

小富山は右と左をコンビネーションさせながらかつぱ仙人目掛けて
ストレートを浴びせた

かつぱ仙人はそれをどんどん避けていった

小富山「ふう…！」

小富山は再び強烈な右ストレートを殴りつけた
かつぱ仙人はそれを簡単に避けた

するとそれに合わせて左足をかつぱ仙人の顔面目掛けて蹴り上げた
かつぱ仙人は避けれない事を瞬時に察した

ガン

小富山の蹴りは見事にかつぱ仙人にあたった

かつぱ仙人「フフフ」

だがかつぱ仙人はとっさに両腕でガードしていた

かつぱ仙人「貴様。なかなか骨があるな。うん。非常に面白い！！」

小富山「ふん！よく言つぜ」

小富山にはかつぱ仙人の言つている事が皮肉にしか聞こえなかつた

かつぱ仙人「貴様のようなものが他にもいるのか？？」

小富山「さあな」

すると小富山は再びかつぱ仙人に左ストレートを殴りつけた
かつぱ仙人はそれを左腕でガードした

かつぱ仙人「ほら！いくぞ！！」

かつぱ仙人は右腕をアッパーぎみにかちあげた

小宮山は瞬時に避けると右ストレートを殴りつけた

かつぱ仙人はそれを簡単に避けた

そこから小宮山は右と左をコンビネーションさせストレートを殴りつけていった

かつぱ仙人も小宮山に右腕や左腕を殴りつけながら応戦していった
2人はお互いの攻撃を避け合い激しいせめぎ合いが続いた
すると小宮山は再び強烈な右ストレートをかつぱ仙人目掛けて殴りつけた

かつぱ仙人は小宮山のちょっととした仕草でそれを予期していた
その瞬間に小宮山を叩く事はできただがあえてしなかった
それはさつきの一連の流れで、次に蹴りがくると予期し、その瞬間を叩こうとしたからである

すると小宮山は左足を蹴り上げると見せかけて右足で蹴ろうとした
かつぱ仙人はそのフェイクを完璧に読んでいた
それを左腕でガードする体勢をとり右腕で小宮山に殴りかかるうとした

シユツ

ガツ

すると小宮山は右足を強く踏み込んだ

そして左腕でかつぱ仙人に向かってラリアットをかましにいった

それは完璧にかつぱ仙人の首にめり込んだ

小富山「うおりやややややーーー！」

第87話 攻防

小富山は見事にかつぱ仙人の裏をかいだ
小富山は左腕を思いつきり振り抜いた

ピタツ

すると小富山の腕がピタリと動かなくなつた

小富山「！？」

かつぱ仙人は地面すれすれで背中をそらした状態でピタリと止まつ
ていた

小富山が力を加えてもびくともしなかつた

シユツ

小富山「！？」

かつぱ仙人はその状態から右腕を振り上げた
それは小富山に被弾しその場から弾き飛ばされた

コキコキ

ゆっくり起きあがるとかつぱ仙人は首をひねった
すると気持ちいいくらいいい音で首の骨が鳴つた

かつぱ仙人「油断した」

小富山「くつ」

小富山はかつぱ仙人の右腕が被弾する前にとっさに両腕でガードしていった

小富山「ガードしにこの威力。マズいな」

小富山の腕はガードしたせいかすかに震えていた

するとかつぱ仙人はボクシングのリズムを取り始めた

かつぱ仙人「たしかこうだつたか??」

かつぱ仙人は急激に小富山と距離をつめた
するとかつぱ仙人は左腕を小富山に殴りつけた
小富山はそれをとっさに避けた

かつぱ仙人「さあ！…どんどんいくぞ！…」

かつぱ仙人は右と左をコンビネーションさせながら殴りつけていった
小富山はそれを避けていった

小富山「くつ！」

かつぱ仙人の攻撃がどんどん加速していった
小富山はそれを避けながら反撃をしていった
小富山の右と左を織り交ぜたコンビネーションをかつぱ仙人は簡単
に避けていき、ひるまず小富山に攻撃し続けた

小富山「くおつ！」

するとかつぱ仙人の鋭い右ストレートが小宮山を襲つた

小宮山はそれを紙一重で避けた

するとかつぱ仙人は左足を小宮山に蹴り上げた

小宮山はそれを両腕でガードした

シユツ

するとかつぱ仙人はその場を飛び上がつた
そして小宮山に回し蹴りをした

それは小宮山にヒットし、地面に叩きつけられながら吹き飛ばされた

かつぱ仙人はそこを追走していった

小宮山はとっさに体制を立て直した

するとかつぱ仙人は小宮山のすぐそばまできていた
そして小宮山に襲いかかろうとした

ヒュン

すると小宮山はかつぱ仙人の背後から襲いかかる1人の男を見た
男はガンツソードを思いつきりかつぱ仙人に斬りつけた

キン

するとかつぱ仙人はそれを刃尾で受け止めた
刃尾でガンツソードを弾かれると男は退いた

小宮山「あれは…確か」

小宮山はその男の顔を見ると自分の記憶を探つた
かつぱ仙人は男に横から尻尾をしならせ刃尾を斬りつけた
男はそれをしゃがんで避けた

かつぱ仙人「邪魔しよつて」

男「ワルいね。ひねくれ者なもので」

その男は速水であった

第88話 潜身

速水は刃尾を避けるとかつぱ仙人に向かって走り出した

チラッ

小宮山は近くにガンツソードが落ちているのに気づいた
それを拾うと小宮山も走り出した
かつぱ仙人は2人に前方と後方に挟まれる形になった

ヒュン

ヒュン

そして2人はかつぱ仙人に向かって切り込んだ
かつぱ仙人は2つを紙一重で避けた
すると小宮山が上から横にガンツソードを斬りつけた
かつぱ仙人はそれをしゃがんで避けた
そこを速水がガンツソードで斬りつけた

カン

するとかつぱ仙人は速水のガンツソードの上に乗り抑えつけた

速水「ぐおつ！」

そこにはかつぱ仙人は速水の顔面に左ジャブをかました
その攻撃で少し速水はひるんだ
するとかつぱ仙人はその場を飛び上がった
そして2人を同時に蹴り飛ばした
2人は同時に弾き飛ばされた

かつぱ仙人「どうした？もう終わりか？？」

速水「くそが！」

速水はすぐさま体制を立て直すとかつぱ仙人に向かっていった

小富山「よせ！不用意近寄るな！」

小富山も体制を立て直すと速水にいった

シユン

するとかつぱ仙人の刃尾が横から速水の首目掛けてきた

ガキーネン

激しい金属音があたりに響いた

速水はとっさにそれをガンツソードで受け止めた

その勢いでガンツソードは強く弾かれた

再びかつぱ仙人は速水目掛けて尻尾をくねらせ刃尾を振り抜いた

速水は弾かれた勢いを殺すとそれをガンツソードで受け止めた

ガキーネン

再び速水のガンツソードは打突の勢いで弾かれた

速水「ハンパねえぞ！こいつ」

かつぱ仙人は繰り返し速水に刃尾を斬りつけ続けた
速水はそれをどうにか回避していった

タタタ

かつぱ仙人「！？」

シュン

すると小富山がかつぱ仙人の背後からガンツソードを斬りつけた
それをかつぱ仙人は簡単に避けた
すると小富山はガンツソードを投げ捨てた

ガン

小富山は強く地面を踏み込んだ
そして右腕でかつぱ仙人目掛けて渾身のラリアットをかましにいった

ガツ

小富山「なに！？」

かつぱ仙人「それはもうぐらわんよ」

かつぱ仙人は左腕を縦に構え小富山の向かってくる右腕を引っ掛け
ラリアットの勢いを殺した
するとかつぱ仙人は小富山目掛けて右腕を振り上げた
下から振り上げたかつぱ仙人の右腕は小富山の顎目掛けてきた
小富山はそれをとっさに両腕でガードした

ガン

かつぱ仙人の攻撃は小富山のガードを突き破り右腕が直撃した
小富山は激しく宙を舞つた

清水「小富山ーー！」

清水の声も虚しく小富山は地面に倒れ込むように落ちた

キュウウウウ

小富山のステッツが壊れる音があたりに鳴るとステッツの丸い部分から液体が出てきた

小富山「まさか、俺が格闘で…負けるとは…」

ダツ

するととかつぱ仙人に誰かが飛びついた
それは淳だった

淳「一緒に心中じょうぜーかつぱ野郎ー」

淳は両脚でかつぱ仙人の体に抱きつき両腕を押さえるような状態になると腕に持っているH・ガンを上に向かた

かつぱ仙人「ぐつう」

かつぱ仙人は淳をふりほどこうとしたが淳の両脚はスーツのパワーを最大限に出し、ふりほどくのは容易でなかつた

淳「数秒がまんしな！数秒後には俺と一緒にペシャンコだ！」

キュイイイイン

淳はH・ガンのトリガーを引くとあたりにチャージ音が鳴つた

第89話 失敗

淳は死を覚悟した
コンマ何秒間の間に淳の頭の中に走馬灯のようなものが走り巡る
その中には弟たちとの思い出も蘇ってきた

淳「お前たち俺もそっちいくぜ」

淳は心の中でそつ思つて いる瞬間淳は閃光に包まれた

ピカーネン

かつぱ仙人の目が激しく閃光した

眼前にいる淳は閃光をもろに受けると激しく弾き飛ばされた

淳のスースは破壊され丸い部分から液体が出ると腕や足がバキバキ
にへし折れた

速水「くつ

その閃光は速水や他のメンバーにも襲いかかった

速水はとっさに踏ん張り耐えた

殴り飛ばされていた小宮山は少し離れた所にいたがそこからさうこ

吹き飛ばされた

少し離れていたせいか淳が受けたほど勢いがなかつた
転がるように飛ばされているなか小宮山はとっさに体制を立て直した

キュイィイイン

すると遠くで離れて見ていた清水がHガンのトリガーを引いた

ドン

放たれたHガンの攻撃の場所にはかつぱ仙人の姿はなかつた

清水「！？」

清水はいきなり視界からいなくなつたかつぱ仙人を探した

ガン

するとすでにかつぱ仙人は清水の背後に回り込んでいた
そして清水の背中を右腕で殴り飛ばした
清水はその場から弾き飛ばされた

シウン

するとその間に速水はかつぱ仙人にガンツソードで切り込んできた
かつぱ仙人はそれを簡単に避けた
速水はそのまま数回ガンツソードを斬りつけた
かつぱ仙人はそれを悠然と避けていった

キュイイイイン

清水は飛ばされたあと再びHガンのトリガーを引いた

グサツ

清水「ぐつー！」

すると清水は背中から刃尾で串刺しにされた

かつぱ仙人「お前、邪魔だ」

清水から刃尾を抜くと激しい血しぶきがあたりに飛んだ

清水「がはつ」

清水は吐血すると地面に倒れ込んだ

小富山「清水！」

清水の顔に血の気がどんどん抜けていった

速水「くそが！余裕こきやがつて」

速水は横にガンツソードを斬りつけた
それをかつぱ仙人は飛んで避けた

バチーン

するとかつぱ仙人は尻尾で速水を弾き飛ばした
速水はとっさに体制を立て直した

ヒュンヒュンヒュン

そこをかつぱ仙人は刃尾で斬りつけた
それを速水はとっさに避けた

ヒュン

キン

最後の一撃をガンツソードで受け止めた

それを弾くとかつぱ仙人に向かってガンツソードを構えた

速水「本気で倒す！」

速水はガンツソードを構えた状態からかつぱ仙人に向かって鋭い一撃を切り込んだ

かつぱ仙人はそれを横に避けた

速水は続けざまにガンツソードをどんどん斬りつけていった

剣道のような鋭い攻撃をかつぱ仙人は避け続けた

ガン

すると速水の隙をついてかつぱ仙人は左腕で殴り飛ばした
速水はその場から吹き飛ばされた

かつぱ仙人「どうした！ もっと私を楽しませろ！」

速水「ちつ！」

速水は舌打ちをすると起き上がりまた同じようにガンツソードを剣道のように構えた

ガツ

ダン

速水がかっぱ仙人に向かって行こうとした瞬間、何者かが橋の柵を掴み速水の後方に着地をした

速水が振り返ると何者かは強化スースを着ていた

それは紛れもなく佐々木力オルであった

佐々木「ダンダンダンダダンダダン

佐々木はスター・ウォーズのテーマソングを口ずさみながらゆっくりと歩みよってきた

佐々木「おお！結構死んでんじやん！笑える。はは」

佐々木は笑いながらゆっくりと歩みよつていった

佐々木「あいつがボスつてことね」

佐々木はかっぱ仙人を確認すると右アームで指をさした

佐々木「お前やつひやうけビニコよね」

第90話 仙人VS狂氣

その場にはなんとも言えない緊張感が立ちこめていた
その緊張感の中佐々木は悠然とかつぱ仙人に歩みよつていった

シウン

するとかつぱ仙人は刃尾を突き立て佐々木に斬りつけた

キン

それを佐々木はなんなくブレードで弾いた

佐々木「ふつ！」

すると佐々木はいっきにかつぱ仙人と距離を詰めた

かつぱ仙人「！」

すると右アームでかつぱ仙人を殴り飛ばした
かつぱ仙人はとっさに両腕でガードをした

かつぱ仙人「ぐつ！」

ガードごしに右アームを喰らうとかつぱ仙人はその場から弾き飛ばされた

佐々木「おら！ もういつちょ！！」

するとガードの外れたかつぱ仙人を追走しかつぱ仙人の顔面を右アームで殴りつけた
かつぱ仙人は激しく地面に叩きつけられた

ガンガンガンガンガンガン

佐々木は倒れたかつぱ仙人の顔面目掛けてアームを殴り続けた

佐々木「ハツハハハハハハ」

あたりに生々しい肉の碎ける音があたりに響いた

ガガガ

アームでかつぱ仙人を掴むと地面に引きずりながら投げ飛ばした
かつぱ仙人は投げ飛ばされながら体を立て直して地面に着地した
かつぱ仙人の顔はあれだけアームで殴りつけたにも関わらず少し血
が垂れている程度だった

シユンシユンシユンシユンシユン

するとかつぱ仙人は尻尾をしならせ始めた
そして刃尾を突き立て佐々木に斬りつけた

キン

佐々木はそれをブレードで弾いた

キンキンキンキンキンキンキンキン

かつぱ仙人は連續して刃尾を斬りつけ続けた
佐々木はそれを両ブレードで弾き続けた

佐々木「ははは！たのちい～！」

すると佐々木は再びかつぱ仙人と距離を詰めた
そして右アームをかつぱ仙人に殴りつけた
かつぱ仙人はそれをとっさに避けた

佐々木「おら！どんどん行くぞーー！」

すると左ブレードをかつぱ仙人に斬りつけた
かつぱ仙人はそれを状態をそらして避けた
佐々木はブレードを織り交ぜながらかつぱ仙人にアームで攻撃し続
けた

かつぱ仙人はそれを避け続けた

ガシ

するとかつぱ仙人の左手と右アームがお互い掴みあう形になつた

ガシ

ちょっと間をおいて左アームと右手も掴みあつた

2体は両腕、両アームに思いつきり力を込めて握りあつた
お互いのパワーが拮抗し一步も譲らない状況だつた

ピカーネン

するとかつぱ仙人の目が激しく閃光した

佐々木「うおおおお」

佐々木は至近距離でそれをうけるがその場に踏ん張り止まつた

佐々木「いいね～！いいね～！！この感じ！マジで痺れるぜ！」

ガン

佐々木はつかみ合つた状況からかっぱ仙人に向かってずつきをした
かっぱ仙人はその攻撃を耐えた

ガンガンガンガン

佐々木は間髪入れずにずつきをし続けた

するとかっぱ仙人が一瞬怯んだ

それと同時に佐々木の強化スースのマスクがとれた

佐々木は右アームをとっさにふりほどくとかっぱ仙人に向かって殴
りつけた

ピカーン

かつぱ仙人の目が激しく閃光した

その勢いで佐々木の動きが少し止まつた

その隙にかつぱ仙人はその場を退こうとした

佐々木「その目…うぜえよ…！」

佐々木はとっさに右足でかつぱ仙人の腹を蹴り飛ばした

かつぱ仙人「ぐお！」

かつぱ仙人が一瞬怯んだ

そこを佐々木は左ブレードでかつぱ仙人の両目を斬りつけた

第91話 開眼

かつぱ仙人「ぐぎゃああ」

かつぱ仙人の両目は佐々木のアームのブレードで切り裂かれ激しく出血していた

かつぱ仙人は両手で目を押された

佐々木「はつ！はつ！？」

佐々木はその隙に右アームでかつぱ仙人の胸めがけて殴りつけた

かつぱ仙人「ぐおつ！」

かつぱ仙人の動きが一瞬止まつた

小富山「！？」

佐々木は一回転すると左アームで裏拳をかました

それがかつぱ仙人の顔面に直撃すると一回地面に叩きつけられたのちに弾き飛ばされた

佐々木「ははは！どうしたたいしたことね～な！はつ！は～！～！」
かつば仙人はうつぶせで倒れている状態でそこから微動だにしなかつた

小宮山「佐々木! 敵が動けないつむじかなやくとどめをせーー!」

小宮山が大声で佐々木に言つた

佐々木「あ～あーうるせえよー少しほは余韻に浸らせろ」「さうせんせう」

佐々木は一向にどぎめをせやつとしなかつた

小宮山「じやあ俺がしとめるぞー。」

そういうて小宮山はかつぱ仙人に近づいていった

佐々木「はあ！ふざけんな！！俺の点数とるんじゃねえよ！」

そう言って後ろから近づいてくる小宮山の方を向いた

ギロッ

ピュン

佐々木「！？」

すると倒れ込んでいたかつぱ仙人は頭をあげると額が割れ目が現れた
その目から閃光とともにレーザーがはなたれた
そのレーザーは佐々木の強化スーツの右アームに直撃した

佐々木「糞が！」

佐々木は右アームがつかいものにならないのを確認すると右アームを切り離した

小富山「だから言つただろ！」

佐々木「黙つてろ！カス！」

かつぱ仙人は倒れている状態から両手、両足を地面につけながら起きあがつた

4足歩行の状態から尻尾をしならせ始めた

かつぱ仙人「お前ら…全員生きて帰れると思うなよ」

佐々木「それはこっちのセリフだよ」

ヒュン

かつぱ仙人はそれを聞くと尻尾をしならせ刃尾を佐々木めがけて斬りつけた

キン

佐々木は左ブレードでそれを弾いた
するとかつぱ仙人はアームとブレードのない右側を刃尾で斬りつけた

佐々木「ちつ！」

シュン

キン

すると佐々木は右手でホルスターからガンツソードを取り出しそれ
を弾いた

ピュン

かつぱ仙人は佐々木めがけてレーザーを放つた
佐々木はそれをとっさによけた

ダッ

するとかつぱ仙人は佐々木と一緒に距離をつめたそこを佐々木はガ
ンツソードを斬りつけた
かつぱ仙人はそれを簡単に避けた
そして佐々木めがけて右腕を殴りつけた

ヒュン

佐々木がそれをよけている間にかつぱ仙人は佐々木の背後から刃尾
を斬りつけた

キン

佐々木はそれを左ブレードで受け止めた

ピュンピュン

その間にかつぱ仙人はレーザーを佐々木めがけて放った

佐々木はそれをとっさに避けた

しばらく2体の激しい攻防が続いた

ピュン

すると佐々木めがけてレーザーがはなたれた

それを佐々木は避けた

佐々木「ちつ！」

すると佐々木のガンツソードの刀身がレーザーで切断された

ガン

佐々木「ぐおつー。」

佐々木が氣をとられている間にかつぱ仙人は佐々木を殴り飛ばした
佐々木は宙を舞うと地面に叩きつけられるように落ちた

かつぱ仙人「あ、あ～どうした？ もう終わりか？」

佐々木はしばらく倒れていると急に起き上がった

佐々木「言つとくけど俺、お前許せないよ。」

佐々木はガンツソードを投げ捨てる前傾姿勢をとった

小富山「マズい。おいーお前あいつらから距離をとれー。」

小富山は佐々木の状態を見ると速水に大声で言った

速水「！？」

速水はそれを聞いても行動をとろうとしなかった
小富山はその間にその場から逃げ始めていた
それを見ると速水は少し佐々木から距離をとり始めた

佐々木「はあ、～」

佐々木は深く息をはくとその場を強く踏み込むと凄まじい速さでか
つぱ仙人に向かっていった

第92話 本氣（マジ）

小宮山「あの野郎、いきなり本氣になりやがって」^{マジ}

佐々木はかつぱ仙人に近づくと左アームを殴りつけた

ピュン

かつぱ仙人はそれを避けるとレーザーを放った

佐々木はそれを紙一重に避けると右足を蹴り上げた

かつぱ仙人はとっさに腕でガードした

そこから佐々木は縦横無尽にかつぱ仙人に攻撃し続けた

左アーム、ブレード、右腕、両足を使い相手に隙を与えたかった

それをかつぱ仙人は避け続けた

佐々木は左アームをかつぱ仙人に殴りつけた

かつぱ仙人は首をずらしてそれを避けた

するとアームを持っている左腕を外すと左腕でかつぱ仙人の肩をつかんだ

そこから勢いをつけ両足でかつぱ仙人にしがみついた

かつぱ仙人の両腕を足で押さえつける状態になつた

ピュン

ガン

するとかつぱ仙人はレーザーを放つた
佐々木はそれを察知するとかつぱ仙人の首を掴みレーザーの方向を
ずらした

そのまま佐々木は両腕でかつぱ仙人の首を掴んだ

ピュンピュン

ピュン

かつぱ仙人は何度もレーザーを放つたが佐々木が首を押さえている

ため佐々木にあたらなかつた

佐々木は首を激しく締めつけ始めた

佐々木「う、おりやあ～！」

なおも佐々木はかっぱ仙人の首をしめ続けた
だんだんかっぱ仙人の体がのけぞり始めた

ヒュン

佐々木「！」

すると佐々木の顔めがけて刃尾が襲いかかった
佐々木はとっさに首をずらして避けた

ボキッ

すると生々しい骨の折れる音があたりに響いた
佐々木はかっぱ仙人の首をへし折ると首から手を離した

ガン

そして左腕にアームを持つとかつぱ仙人の頭を殴りつけた
かつぱ仙人はそれをうけると地面に叩きつけられた

ヒュン

すると佐々木の背後から刃尾が襲いかかった
佐々木はそれを左アームで受け止めると尻尾を掴んだ
そして尻尾ごとかつぱ仙人を投げ飛ばした

佐々木「どうした？、俺をもつと気持ちよくさせてくれよ」

小富山は橋の端で2体の戦闘を見ており、速水はその逆サイドの2
体に少し近い距離で見ていた
するとかつぱ仙人はゆっくり起き上がった

ボキッゴキッ

するとかつぱ仙人は首を腕で少しいじると首の骨が元通りに機能し始めた

佐々木「まだ足りね～な」

すると佐々木は強化スーツに無数についているコードをなびかせた
するとそこにHガンが絡みついていた

佐々木はそれをアームのついていない右腕でとった
そして左アームをかつぱ仙人にめがけて構えた

佐々木の左アームの手のひらが光をおびるとかつぱ仙人の目も光始めた

ピュンピュンピュン

ピュン

パアツパアツパアツパアツ

第93話 最狂（前書き）

今回は少し長めです。

かつぱ星人編もいよいよ佳境です。
何者かも圧倒するかつぱ仙人。
最狂、最悪な佐々木カオル。
さてどちら勝つでしょうか?
感想よかつたら書いて下さい(、ヽゞ

第93話 最狂

佐々木はアームガンを放つと同時にかつぱ仙人もレーザーを放った
かつぱ仙人は体をくねらせアームガンを避けた
佐々木もレーザーを避けつつアームガンを放ち続けた

キュイイイイン

すると佐々木はHガンのトリガーを引いた

ドン

Hガンが放たれるとかつぱ仙人は飛んで避けた

ヒュン

かつぱ仙人は宙返りをすると佐々木に尻尾をしならせ刃尾を斬りつけた

キン

佐々木は左ブレードで弾くと左アームを構えた

ヒュン

佐々木「！」

パアッ

するとかつぱ仙人は佐々木の左アームの軌道を尻尾を叩きつけてず
らした

かつぱ仙人は着地するとすぐさま佐々木に向かっていった

ピュンピュン

かつぱ仙人は佐々木に急接近しながらレーザーを放つた

佐々木はそれをとっさに避けた

佐々木は向かってくるかつぱ仙人めがけて左アームを殴りつけた

かつぱ仙人はそれをしゃがんで避けた

ダッ

ガン

佐々木「ぐおつ！」

かつぱ仙人はしゃがんだ状況から飛び上がり佐々木の頸に膝蹴りを
かました

そしてかつぱ仙人は両腕を組むと佐々木に叩きつけた

かつぱ仙人のダブルハンマーが佐々木の頭に直撃するが佐々木はそ
の場に踏みとどまつた

佐々木はバランスを崩しながら左アームをかつぱ仙人に殴りつけた

かつぱ仙人はそれを簡単に避けた

キュイイイイン

その間に佐々木はHガンのトリガーを引いた

パシッ

ドン

するとかつぱ仙人は佐々木の右腕を弾いた

そのせいでHガンの軌道がずれかつぱ仙人にあたらなかつた

その攻撃で橋の柵が一部なくなつた

ガン

グサツ

かつぱ仙人「！！？」

かつぱ仙人は佐々木めがけて足を蹴りつけた

佐々木は宙を舞うとかつぱ仙人から大きく弾き飛ばされた
かつぱ仙人が佐々木を蹴り飛ばすと同時にかつぱ仙人は背後からわ

き腹を何者かに刺された

かつぱ仙人は振り向くとその何者かを見た

それは速水だつた

するととかつぱ仙人の目が閃光を帶びてきた

速水「やべつ！」

ピュン
ピュンピュンピュン

速水はとっさにガンツソードを手放すとかつぱ仙人のレーザーを回
避した

ヒュン

ヒュン

するとかつぱ仙人は尻尾をしならせ速水に連続して刃尾を斬りつけた
速水はそれをしゃがんで避けた

速水「！？」

すると速水は手元に何か落ちているのに気づいた
それは佐々木が捨てた折れたガンツソードだった

ヒュン

かつぱ仙人の刃尾が速水を襲った

カーン

速水はガンツソードをとるとそれで刃尾を受け止めた
するとその間に佐々木が起き上がった

佐々木「よくやった。小僧！」

佐々木は左アームを構えた
かつぱ仙人は瞬時にそれに気づいた

ピュン

佐々木の左アームの手のひらが閃光し始めている間にかつぱ仙人のレーザーがアームを貫いた

佐々木「ちつ！」

かつぱ仙人のレーザーで左アームがブレードごとおしゃかになった
その間に速水は背後からかつぱ仙人にガンツソードを斬りつけた
するとかつぱ仙人の背中にあたった
だが刀身が折れているせいでかつぱ仙人の皮しか斬れなかつた

ヒュン

かつぱ仙人は後ろを向きながら刃尾を速水に斬りつけた
速水はそれを避けられなかった

ガシツ

すると速水を後ろから誰かが掴み上げた
それは小富山だった

小富山は速水を掴み刃尾から速水を救った

ヒュ

するとかつぱ仙人は刃尾にスナップをきかせ速水を追撃した
するとガンツソードを持っていた速水の右腕がきれいに斬り飛ばされた

速水「ぐおあ！」

プシュー——ウ

すると佐々木の強化スーツの無数のコードから煙が出はじめた

佐々木「俺はな。この世で気にくわないことが2つある

かつぱ仙人「！？」

佐々木は煙を排出しながらかつぱ仙人に歩み寄って行つた

佐々木「一つはなめられる」と。もう一つは…

佐々木は地面に落ちている淳のHガソリンを拾つた
佐々木は両腕にHガソリンを持つている状態だった

小富山「マズい…！」

キュイイイイン
キュイイイイン

小宮山はその場から走り出した
あたりは煙で視界が悪くなつた
かつぱ仙人は佐々木を見失つた

佐々木「俺より！強いやつだ！！」

ドンドンドンドンドンドンドンド

そう言つて佐々木は橋を走り抜けた
無数に放たれたHガンが橋を覆つた

佐々木「ハハハハ！全部潰れちまえ！！！」

佐々木は空を見上げながら両手をあげたかだかに叫んだ

第94話 崩落

バチバチ

橋に落ちていたHガンが姿を消した

多摩川近辺住宅街

茨木「ちょっと肩貸してくれ」

大学生B「はい」

大学生Bは茨木と肩を組んだ

大学生B「どうするんですか?」

茨木「これを小富山に渡しにいく」

そういうと茨木はHガンを指差した

大学生B 「でもその怪我じゃ」

「? ? 「なら俺がこいつ」

すると何者が歩み寄ってきた
それは南であった

南「これを小富山へやつに渡せばいいんだろ」

茨木「ああ」

大学生B 「小富山…さんは今どこにいるんですか」

南「ああ。敵のいる所にいるだろ」

茨木「お前も行け」

茨木は大学生Bに言った

大学生B 「でも」

茨木「俺のことはいいからいけ」

南「いくぞ」

南は大学生Bに言った

大学生B「はい」

そう言うと2人は走り始めた

茨木「お前名前は？？」

その間に茨木は大学生Bに問いかけた

大学生B「及川…及川タケルです」

そう言うと2人は住宅街を駆け抜けて行つた

多摩川ある大きめの橋

ミシミシ

橋一面にHガンの攻撃のあとがつくとそのダメージで橋が崩れかけ
ていた

あたりにはまだ強化ステップによる煙がまだ残っていた

佐々木は煙をかきわけかっぱ仙人のいた場所に近づいていった

佐々木「！？」

そこにはかっぱ仙人の亡骸すらなかつた

佐々木「どこいった！？」

ピュン

すると橋の下からレーザーが放たれた
そのレーザーは縦のラインを綺麗に描くと佐々木の右腕が切断された

キュイイイイン

佐々木は左腕のHガンを構えると橋の地面に向かつてトリガーを引いた

ガツ

ヒュン

すると橋の地面を突き破り刃尾が佐々木を襲つた
佐々木の左腕は綺麗に斬り飛ばされた

佐々木「あ～らう」

佐々木はその拍子に地面に倒れ込んだ

ガツガン

刃尾が佐々木の左腕を切断するとかっぱ仙人は地面を突き破り佐々

木の目の前に現れた

かつぱ仙人「ぐあああ」

かつぱ仙人の額が光を帯び始めた

佐々木「ふつ」

佐々木は鼻で笑うとかつぱ仙人の行動に対して無抵抗だった

キュイイイイン

するとどこからかHガンのチャージ音が鳴った

だがあたりにそれを放とうとしている何者かの姿が見られなかつた
するとかつぱ仙人は佐々木から目をそらしある方向を向いた

ピュン

? 「んっつ

ドン

かつぱ仙人「！！」

するとかつぱ仙人はレーザーを放った
放たれた方向には誰もいないはずだつた
だがそこにはステルスマードの何者かがいた
それは西であつた

西がHガンを持っていた左腕がレーザーで切断された
かつぱ仙人の攻撃でHガンの攻撃がそれた
それはかつぱ仙人の刃尾から体にかけての尻尾の部分に直撃し、か
つぱ仙人と刃尾が分断された

カシャン

すると西の右腕の服の袖からXガンが出てくるとそれをつかんだ

西「くそが！」

するとかつぱ仙人が急激に西に接近した

ギョーンギョーンギョーン

西は接近するかつぱ仙人に怯まずXガンを放つた

ボンボンボン

屈強なかつぱ仙人の体の肉片が飛び散るが接近する勢いが止まらなかつた

ブス

西「つ！」

かつぱ仙人は右腕の人差し指を西の心臓目掛け突き立てた
西は少し体をずらしたが避けきれず西の右肩を貫いた
西はそのまま柵に叩きつけられた

ミシミシ

かつぱ仙人の額が光を帯び始めた

ダンダンダン

するとかつぱ仙人の背後から勢いよく誰かが近づいてきた
かつぱ仙人はとっさに振り向いた

ガブッ

それは佐々木であった

佐々木は両腕を失いながらもかつぱ仙人の首にかぶりついた

チュイイイイン

佐々木のスージが鳴ると顎にパワーが集中した

ブチブチブチ

佐々木はかつぱ仙人の喉を食いちぎった

ギロツ

佐々木はかつぱ仙人の額の片目に睨まれた
かつぱ仙人の喉から激しく出血していた

佐々木「はは。 もうみろ」

ガン

するとかつぱ仙人は佐々木目掛けて右腕を振り下ろした
それは佐々木の頭に直撃し、激しく叩きつけられた

ミシミシ

その攻撃で橋に激しいダメージが及んだ

小富山「マズい！崩れる」

小富山は速水を抱えながら橋から逃げ始めた
橋が崩れ始めるさなかつぱ仙人は首の筋肉に力を入れた
すると出血が止まつた

ガガガガガガ

ガシヤガシヤンガシヤン

しばらくして多摩川の橋が崩れ落ちた

第94話 崩落（後書き）

崩落する橋、「じ」とくなが倒されていくガソツメンバー、戦いはついに最終局面へ

第95話 傍若無人

多摩川ある大きめな橋
崩落後

南「なんだ!」「つや!」

及川「すげえ~」

南と及川は崩落した橋の前まで来た

小富山「あ…危なかつた」

すると小富山が速水を抱えながら這い上がってきた

南「あんた、小富山か??」

南は小富山に問いかけた

小富山「ああ。やつだが」

南「これをあなたに渡せと」

小富山「ふせろーーー！」

ピュン

南が話している途中に小富山が大声で言つた
すると橋の下の河川からレーザーが放たれた
南はとっさに小富山の声に反応したがレーザーに足を切断された

南「がああー足がー！」

小富山「くわーー！」

すると小富山は橋を走り出した

小富山「お前！そいつ抱えて走れ！」

小富山は及川に言った

ガクガクガクガク

及川は体が震えて動けなかつた

小富山「ちつ！」

小富山は舌打ちをすると両を抱えた

ピュンピュンピュンピュンピュンピュンピュン

するとかつぱ仙人は無差別にレーザーを放ってきた

小富山「死にたくなきやー走れ！」

小富山は及川を鼓舞するように大声で言った

及川「うああああ！」

及川は大声で自分を奮い立たせるとその場を走り出した

多摩川ある大きめな橋

崩落後

河川

ボコボコ

かつぱ仙人の喉が大きく脈打つた
するとかつぱ仙人の喉が回復した

かつぱ仙人「ぐあああ…んつ？臭いぞ…こっちか」

バシャバシャバシャバシャ

するとかつぱ仙人は河川を下り始めた

多摩川河川

河内「おい！橋が落ちたぞ！」

和泉達は佐々木達の戦っていた橋の近くまで来ていた

バシャバシャバシャバシャ

和泉「何かくるぞ！」

すると橋の落ちた土煙に紛れて何かが和泉達に近づいてきた

ピュンピュン

土煙に乘じてレーザーが放たれた

それはからうじて和泉達にあたらなかつた
すると土煙から現れたのはかつぱ仙人であつた
かつぱ仙人は右腕の人差し指を突き立てた

河内「くつ！」

すると河内に人差し指を突き刺した
それは河内の胸を突き刺した

河内「かはつ！」

かつぱ仙人は突き刺したまま河内を持ち上げた
河内は思わず吐血した

シユン

すると和泉はガンツソードを伸ばした

和泉「おおおおお」

和泉はガンツソードでかつぱ仙人に斬りかかった

ダン

するとかつぱ仙人は河内を投げつけた
和泉は河内を抱えるような状態になつた

ブン

するとかつぱ仙人は2人に回し蹴りをかました

ググッ

和泉は回し蹴りをとつさに左腕でガードした
かつぱ仙人の足が和泉の左腕にめり込むと2人は吹き飛ばされた

涼子「ガクガクガクガク」

涼子は恐怖のあまり口の震えが止まらなかつた
すると涼子は腰を抜かし座り込んでしまつた
そこをかつぱ仙人が襲いかかつた

和泉「涼子」！！」

バシャバシャバシャバシャ

すると涼子の後ろから何者かが走り込んできた
何者かはガンツソードを両手にもちながら軽く飛ぶと、かつぱ仙人
に横に斬りつけた
するとかつぱ仙人の右腕が切断された

西城「こいつがボスか??」

それは我流剣士、西城智也であつた

第96話 臭い

多摩川ある大きめな橋

崩落後

橋近辺

小富山「はあ…はあ。生きてるか?」

小富山は及川に問いかけた
2人は地面に座り込んでいた

及川「はあはあはあ」

小富山「生きてるみたいだな

そつ言うと小富山は立ち上がると、南の持っていたHガンを手にと
つた

及川「もしかして、行くんですか

小富山「ああ」

及川「俺、始めてですけどわかりますよ。なんとなく…下にいるやつをうとうやバいですよ。絶対死にますよ。それでも行くんですか？」

小富山「まあな。強いけどな。誰かがやんなきゃ帰れないからな。やるしかない」

及川「そんな、無理だ！俺も簡単に下にいる化け物に殺されるんだ」

及川は頭を抱えながら下を向いた

ポン

すると小富山は及川の肩に軽く手をのせた

小富山「兄ちゃん。いいか。不可能を可能にしてこそ男ってもんだろーなつ」

小富山はさう言い残すとその場を離れ多摩川の河川に向かっていった

西城の攻撃によりかつぱ仙人の右腕が宙を舞つた

ガシツ

すかさずかつぱ仙人は右腕を左腕でつかんだ
そして西城に投げつけた

西城「！！」

西城はその攻撃を全く予期していなかつた
西城に斬り落とされた右腕が被弾した

かつぱ仙人は西城に急接近すると左腕を振りかざした

バシャバシャバシャバシャ

ミシミシ

西城「ぐおつ！」

かつぱ仙人は自分の投げつけた右腕目掛けて左腕を殴りつけた
西城は間合いとタイミング的にかつぱ仙人の攻撃を避けられると思
つていたが、右腕のリーチ分を計算に入つていなかつた
油断した西城はかつぱ仙人の右腕ごと殴られた
かつぱ仙人の右腕はぐにやぐにやになつた

西城「くつ！」

西城は体制を立て直すと血を払つようガソードを軽く振つた
そこをかつぱ仙人は追走した
西城はガソードを片手で持ちながら身構えた
するとかつぱ仙人の鋭い右足の蹴りが西城を襲つた
西城はすかさずそれを避けた

バシャバシャバシャバシャ

するとかつぱ仙人の背後から誰かが襲いかかった
それは和泉であった

ブン

和泉はガンツソードをかつぱ仙人目掛けて斬りつけた
かつぱ仙人はそれを体をずらし簡単に避けた
すると西城はガンツソードを両手で持った

ブン

西城はガンツソードをかつぱ仙人目掛けて斬りあげた
かつぱ仙人はそれをしゃがんで避けた

和泉「おおおお！」

ブンブン

西城と和泉は同時にかつぱ仙人にガンツソードを斬りつけた
かつぱ仙人はうまく体をそらし避けた

ブン

ブン

続けざまに西城と和泉はガンツソードを斬りつけた
かつぱ仙人はそれを華麗に避けた

和泉「！」

気づくとかつぱ仙人の右足和泉の顔面まで來ていた

そのまま和泉はかつぱ仙人に蹴り飛ばされた

その間に西城はガンツソードを長く伸ばすと横一線に斬りつけた
かつぱ仙人はそれを飛んで避けた

ピュンピュンピュン

かつぱ仙人は飛びながら西城にレーザーを放つた
西城はその場から乗り出すように避けた

クンクン

かつぱ仙人は着地すると臭いを嗅ぎ始めた

かつぱ仙人「臭うぞ。お前、他の奴と違うな」

西城「どういう意味だ！？」

かつぱ仙人「しいて言うなら強さだな。お前となら楽しめそうだ」

かつぱ仙人は再び西城に向かっていった

第97話 瞬撃

多摩川河川敷

小富山「はあはあはあ」

小富山は河川敷を走りながらコントローラーを開いた

小富山「あと15分をきつたか。はたして15分以内に俺にやれる
か…」

小富山は制限時間を見るヒューダーを開いた

小富山「んっ！」

かつぱ仙人の近くに別の4つの姿がしるされていた

小富山「誰か戦っているな

西城「今までの星人と違つ。なぜ言葉をしゃべれるー?」

かつぱ仙人「言葉を発するのがそんなに珍しいか??」

そう言つてかつぱ仙人は左腕を殴りつけた
西城はそれを後ろに飛んで避けた
すると西城はガンツソードの長さを戻し構えた

西城「話しかかるんだよな?ならお前!あんまそこから動くのは進められんぜ」

かつぱ仙人「いきなりどうした」

かつぱ仙人は苦笑しながら西城に問いかけた

西城「今、お前は俺の間合いに入つた。それ以上踏み込むのは進められんって言つただけだ」

かつぱ仙人「ほう?なかなか面白い事を言うな」

そう言つてかつぱ仙人は不用意にその場を一步踏み込んだ

シユツ

西城の鋭い一撃がかつぱ仙人を襲つた

かつぱ仙人の首めがけてガンツソードがくると、かつぱ仙人は首をのけぞり間一髪それを避けた

あたりにかつぱ仙人の切れた髪の毛が舞つた

かつぱ仙人は一步後退した

かつぱ仙人「ほうー、まんざら嘘でもないみたいだな」

ピュン
ピュン
ピュン

小富山「いこいか」

小富山は西城たちの戦っている河川の近くまで来た

小富山「誰が戦つてんだ」

小富山は田を凝らした

そこには西城とかっぱ仙人が戦っているのが見えた

ガチャ

小富山はHガンを構えロックオン越しに様子を見た
すると西城はかっぱ仙人のレーザーを一步も動かず上体を動かして
避け続けていた

その間西城はガンツソードを常に構えていた

小富山の距離でも伝わるほどの緊張感が西城とかっぱ仙人の間にあ
つた

小富山「ゴクッ」

小富山は思わず唾を飲み込むと汗が頬をつたたつた

シユツ

すると西城は構えていたガンツソードを思いつきり振り切った
それはまさに一瞬であつた
西城の攻撃が終わるとかっぱ仙人の動きが止まつた

小富山「あいつ…やりやがった」

多摩川河川

西城「はあはあ…はあ」

西城は緊張感から解き放たれ肩をなでおろした
その間、かつぱ仙人は悠然と立っていた
だがその体には首から上が存在しなかつた
かつぱ仙人は西城に首を斬り飛ばされていた

第97話 撃撃（後書き）

終わったかに見えた…

だがそこからが本当の戦いであった

長く続いたかつぱ星人編
戦いはついに最終章へ

和泉「くっう」

キウウウ

和泉は蹴り飛ばされたダメージでスーツが壊れた
立ち上ると西城のいる方向を見た

和泉「倒したのか??」

ズズツ

西城「！？」

するとかつぱ仙人の動くはずのない体が動きだした
かつぱ仙人の体は左腕で西城に殴りかかった

西城はそれをとっさに避けた

かつぱ仙人はその間に自分の斬り落とされた頭を蹴り上げた
それすぐさま左腕で掴んだ

かつぱ仙人の頭の額の目が光を帯びた

ピュン

西城「ぐあつ！」

かつぱ仙人のレーザーが西城の左肩を貫いた
西城は貫かれると右腕に持っていたガンツソードをとっさに斬りつけた
かつぱ仙人の胸に大きな切り傷がついた

ピュンピュンピュンピュン

かつぱ仙人は間髪入れずにレーザーを放ち続けた
西城はそれを身を乗り出し避けた

西城「ツ。首を飛ばしてもダメか…」

多摩川河川敷

キュイイイイン

小宮山はHガンのトリガーを引いた

多摩川河川

かつぱ仙人「！？」

するとかつぱ仙人は何かを察した

ドン

小宮山のHガンが炸裂した

かつぱ仙人はそれを軽快に避けた

その攻撃で小宮山のいる方向を認識するとかつぱ仙人は頭を小宮山
目掛けたぶち投げた

多摩川河川敷

かつぱ仙人の頭は激しく回転しながら小宮山に向かっていった

ピュンピュン

スツ

かつぱ仙人の頭部がレーザーを放つとすかさず小宮山は避けた

小富山「……」

気づくとかつぱ仙人の体が小富山の田の前まできていた

ガシツ

小富山「うおあー。」

かつぱ仙人は小富山を掴むと後ろにぶち投げた

多摩川河川

西城「やべ…左手力入んねッ……」

西城は右腕で左肩を抑えてながら言った

西城「もひくは戦えねえ。はやくけりつけねえと…」

バシャーン

すると小富山が上から落ちてきた
西城の近くに落ちると上からかつぱ仙人が飛び降りてきた

グシャ

小富山「あああああああ！」

小富山の背中に着地すると背骨がバキバキに折れた
かつぱ仙人の右腕には頭を持っていた
すると西城に向かって頭を向けた

かつぱ仙人「よくも首を飛ばしてくれたな！許さんぞ！」

するとかつぱ仙人の額が光を帯びた

ピュンピュン
ピコン

西城に向かつてレーザーを放つた
西城は左手が思い通りに動かない事を悟られないように避けた

ピュンピュンピュン

西城「どうするか…これじゃ簡単に近寄れない」

西城はレーザーを避けながら叫んだ

小富山「や…こじゅうー」

すると背骨を碎かれた小富山が西城を呼んだ

小富山「心臓だ！しん… どうを狙え！」

小富山は苦しそうに言った

西城「心臓！？」

ピュンピュンピュンピュン

その間もかつぱ仙人はレーザーを放ち続けた
西城はそれを避け続けた
すると西城はかつぱ仙人に向かって走り出した

ピュンピュン

かつぱ仙人はレーザーを放った
西城はそれをギリギリで避けた
それは西城の右頬に少しかすつた
すると西城はガンツソードをかつぱ仙人に投げつけた
かつぱ仙人はそれをとっさに避けた

かつぱ仙人「！！」

その間に西城はかつぱ仙人の懷に潜り込んだ
西城はホルスターからガンツソードを取り出した

シウン

グサツ

西城はガンツソードを伸ばした

かつぱ仙人「ぐおう！」

ガンツソードはそのままかつぱ仙人の胸に刺さった
かつぱ仙人は持っていた頭を思わずはなしてしまった
だが西城の刺したガンツソードは刺さりが浅かつた
かつぱ仙人は今にも襲いかかってきそうだった

西城「つねつやあああ……」

キュウウウウ

西城のスースが呼応するとスースのパワーを全開にして突き刺さったガンツソードの柄に向かって右腕を思いっきり殴りつけた

ズシャ

プシュュ

ガンツソードがかっぱ仙人を貫通すると激しい血吹雪が舞つた

西城はガンツソードをゆっくり抜いた
そしてゆっくりと後ろに身を引いた

西城「はあはあ……」

かつば仙人の体は力なくその場に倒れ込んだ

西城「終わつた」か

第99話 変貌

多摩川河川

崩落した橋近辺

佐々木「ああ……頭くらくらしてきやがった。はやくおわんねえかな」

佐々木は空を見上げるようになれていた

佐々木「にしてもさみいへな」

バシャバシャ

すると佐々木の近くで何かが動く音がした

佐々木「なんだ?なんか動いたか?…まあいいか…にしてもさみい
へな」

多摩川河川

西城が力なく立っている所に和泉が歩み寄ってきた

和泉「やつたな！」

西城「和泉。小富山を見てやつてくれ。俺よりヒビゲー」

すると和泉は小富山の状態を見た

和泉「おっさん！大丈夫か」

小富山「あ…なんとかな…死ぬほどいてえ…けど」

和泉は倒れ込む小富山を起こした

小富山「今回そいつにだいぶやられた…今、まともに戦えるのは
西城と隼人くらいだろ」

和泉「おっさん！誰がやられたんだ！？」

小富山「そんなせかすな…死ぬほどいてえ～ッただろ…バカ…3兄弟と清水と佐々木…かな」

西城「佐々木がやられたのか！」

小富山「あ…今頃死んでるだろ（笑）」

話している間に涼子が河内に肩を貸しながら歩いてきた

河内「くつなさけない。見ているのがやつとだつた」

涼子「つぎ頑張ればいいですよ」

小富山「あいつらも…生きてたか良かつたな…和泉」

和泉「ああ」

すると小富山がコントローラーを開いた

小富山「あと8分…ガンツ！転送まだか？」

西城「それにしても遅いぞ」

バシャバシャバシャバシャ

すると何かが近づいてきた
それはかつぱ仙人の体に一目散に向かっていった

和泉「なんだあれ？？」

小富山「あれはあいつの尻尾に着いてた……」

それはかつぱ仙人の刃尾であった

西城「くつ！」

西城は走り出すと刃尾に向かって右腕でガンツソードを思いつきり
斬りつけた

すると刃尾はその場を飛び上がり回避した

そしてそのままかつぱ仙人の体に突き刺さつた

突き刺さるとかつぱ仙人の体に無数の血管が浮かび上がってきた

小宮山「マズいな……」

するとかつぱ仙人の体が立ち上がった

数歩歩くと頭を拾つた

頭を拾うとかつぱ仙人の体が変貌していった

西城「和泉！小宮山たちを連れて逃げろ！」

和泉「西城！」

西城「こいつは俺がやる！」

かつぱ仙人の青かつた体がだんだん赤みを帯びてきた
屈強だった肉体がさらに神々しいなり、右腕も元通りに戻ると落と
された首から頭が生えてきた
その顔はかつぱとは思わしくなく口や鼻がなく、あるのは大きな一
つ目だけであつた

西城「化け物が！」

かつぱ仙人「貴様もじやろ！」

それはかつぱ仙人のテレパシーによるものだった

西城「なんだこれ？？」

かつぱ仙人「貴様ほどの強さで驚くとは意外じやの～」

そうテレパシーで言つていると最後にかつぱ仙人の右腕に中指から肩まである大きく鋭利な刃物が出てきた

かつぱ仙人「ここまで手こずるとは思わんかったの～さつ終わりにするか」

西城「ツ。おしゃべりな野郎だな！」

西城は右腕だけでガンツソードを構えた

第100話　ハチミツ（繪畫版）

ひとつひとつ100話まで来ました(^-^)▽
ありがとうございます。

100話までにかっぱ星人編を終わらせる予定でしたが長引いてしまいました。

シナリオ的には半分もきこませんが、元結でできるように頑張ります。
これからも応援してくだされるととても助かります。

かつぱ仙人「まさか一つ目のキモを使うとはの〜。じゃがもつ生き
ては帰さんぞ」

西城はかつぱ仙人のテレパシーになれてきた

西城「キモ！？心臓の事か？？」

するとかつぱ仙人は左腕の手のひらを西城に向けた

ギロツ

すると手のひらに目が開かれた
その目が光を帯びてきた

西城「マジッかよ！」

西城は身を乗り出した

ピュンピュン

かつぱ仙人の手のひらからレーザーが放たれた
西城はどうにか回避するとかつぱ仙人に向かって走り出した

ピュンピュン

かつぱ仙人は向かってくる西城にレーザーを放つた
西城は難なく避けるとガンツソードを両手に持った

西城「ツ！」

西城は左腕に痛みを感じたがぐっと我慢した
そしてガンツソードをかつぱ仙人に斬りつけた
するとかつぱ仙人の首がキレイに斬り飛ばされた

ムクムク

するとすぐさま同じような頭が生えてきた

西城「ちッ！」

するとかっぱ仙人は右腕を振りかぶった

キーーン

かっぱ仙人は右腕の刃で西城を斬りつけた
西城はとっさにガンツソードで受け止めた
だが力が強く激しく弾かれた

西城「ツ！」

かっぱ仙人「そんなに左腕がキツいかね？これでも手を抜いてるの
じゃぞ」

西城「油断は禁物だぜ！かっぱ野郎」

再びかつぱ仙人は右腕を斬りつけた

キーーン

西城は再びガンツソードで受け止めた

かつぱ仙人「そりゃそりゃ。はよせんとぶつたぎっちゃうよ。ひや
ひや」

かつぱ仙人は右腕の刃を斬りつけながらテレパシーを送った
西城は受け止めるのをやめて避け始めた

西城「ツツツ」

すると西城に軽いめまいが襲つた

今までの戦闘による集中力の精神的ダメージが体にきた

かつぱ仙人「終わりじゃ」

かつぱ仙人は左腕を構えた

ピュンピュン

すると西城はその場に崩れ込むように倒れた
そのおかげでレーザーを回避できた
すると続けざまに右腕の刃を斬りつけた

パシツ

すると西城は左足で弾き起動をずらした

西城の首もとの近くに刃が刺さると立ち上がった

そして再び懷に潜り込むと胸にガンツソードを突き刺した

西城「！？」

するとかつぱ仙人は左腕で西城を払いのけた

西城は思わず吹き飛ばされた

かつぱ仙人「残念じやがここではないぞ」

かつぱ仙人は突き刺さつたガンツソードを左腕で軽々抜いた
ガンツソードをその場に捨てるに西城に向かって走り出した

バシャバシャ

バシャバシャ

シャン
シャン
シャン

バシャバシャ

ピュンピュン

シャン
シャン
シャン

バシャバシャ

西城は向かってくるかつぱ仙人から逃げ出した
かつぱ仙人は追走しながら右腕の刃とレーザーを織り交ぜながら襲
いかかった

すると西城はいきなり立ち止った

そこには最初に投げつけたガンツソードが落ちていた
それを右腕で拾うと西城はガンツソードを抜刀のように構えた
かつぱ仙人は思わず立ち止まつた

西城は構えながらガンツソードを通常の状態からさらに伸ばした

西城「さあ……どうする？ かつぱ…動いたら斬るぜ」

西城のその構えからなんとも言えないすゞい気迫が感じられた
それは最初にかつぱ仙人の首を飛ばした時とは、比べものにならな
いことをかつぱ仙人は察していた

かつぱ仙人「手負いの貴様にその刀がふれるのかね？」

西城「試してみるか？」

GANTZ部屋

00:03:48

ガンツのモニターに制限時間が浮かび上がっていた

多摩川河川

かつぱ仙人と西城の間に数秒間の沈黙が続いた
するとかつぱ仙人が動き出した

かつぱ仙人「しゃーあ！！」

かつぱ仙人は右腕の刃を西城に斬りつけた
西城はかつぱ仙人の初動に合わせてガンツソードを思いっきり振り
切った

第101話 抜刀

西城の出した渾身の一撃はかつぱ仙人の右腕の刃よりほんの少し速かつた

クッ

するとかつぱ仙人はとっさに攻撃をやめ、右腕をひねつた

ガキーン

右腕の刃の切つ先に西城のガンツソードがあたると激しい金属音が鳴った

かつぱ仙人「貴様のこの攻撃を凌げば、次を撃つ力も氣力もないじやろ」

西城「そういう姿勢が！後悔につながることになるんだよ！」

かつぱ仙人「！？」

ギギギ

激しい競り合いが続く中西城は右腕で持っているガンツソードの柄を左腕でも掴んだ

両手でガンツソードを持つとかつぱ仙人が押され始めた

バシャバシャ

ガチャ

するとかつぱ仙人の背後にある男が現れた

それは西であつた

西「ぐらいやがれ！」

ギヨーン

西はXガンを構えるとかつぱ仙人に向かって打つたあたりにかつぱ仙人の背中の肉片が飛んだ

ピュン

かつぱ仙人はとっさに左腕の手のひらを西に向けるとレーザーを放つた

レーザーは西の右胸を貫通した

西はその場に倒れ込んだ

その瞬間を西城は逃さなかつた

西城「あッああああああああああああ」

西城の左肩から出血が止まらない中最後の力を振り絞つた

かつぱ仙人「なッ！にッ？」

西城の渾身の抜刀がかつぱ仙人の右腕の刃から外れた

するとかつぱ仙人は腰元から斜めに真つ一いつに斬られた
西城はその勢いでガンツソードを手放してしまった

かつぱ仙人「まだじやよー！」

かつぱ仙人の上半身が崩れ落ちる中、右腕で反動をつけ右腕の刃を
突き刺しにいった

西城「ぐッ！」

西城はとつさに反応すると右腕でホルスターからXガンを取り出した

ガチャ

西城は構えると心臓を探した

西城「……！」

西城は見つけた
かつぱ仙人の右肩で呼応するキモ（心臓）を

ギヨーンギヨーン
ギヨーンギヨーンギヨーン

西城は必死にトリガーを引いた
そして2体が交差すると決着がついた

西城「ガフッ……」

西城は激しく吐血した

西城は右肩から腰元までの体半分を根こそぎ持つていかれた
激しい出血の中力なく倒れ込んだ

かつぱ仙人「貴様の負けじや……」

かつぱ仙人は西城にテレパシーを送った

かつぱ仙人「！！」

ボコボコボコボコ

西城は刹那の中しつかりとXガンで狙っていた
すると右肩の心臓が破壊された
かつぱ仙人の右腕がのたうち回るとしばらくして動かなくなつた

西城「やあ……みるッ……！」

GANTZ部屋

00:01:29

ちーん

多摩川近辺住宅街

カツンカツン

住宅街を悠然と歩く強化スーツをまとった1人の男がいた
それは紛れもなく最強の男、栗原隼人であつた

隼人「んっ？おわりか？？」

すると隼人はゆっくりとGANTZ部屋へ転送されていった

和泉「西城へ！」

バシャバシャバシャバシャ

遠くで様子を見ていた和泉は西城に向かって走り出した
西城の元までくると西城を腕で起こした

西城「いす……みか？……んそつは……ガフッ」

西城は吐血しながら言った

和泉「それ以上しゃべるな！転送ならすぐ始まる。頑張れ！死ぬな
！」

西城「おま……えと……あッ……て……まだ……みじ……か……いが……しぬとな……
るとな……」りおしいな……」

和泉「死ぬな！生きる！」

そう言つている中和泉は転送されていった

小富山「はあ……今度こそやりやがつた……」

小富山の近くには涼子と河内がいたがすでに転送されていた
しばらくして小富山も転送されていった

西城「ごめんなカレン……」

GANTZ部屋

和泉「西城……！」

和泉は部屋に転送されながら言つた
部屋にはすでに涼子、茨木、南、河内がいた

涼子「紫音、西城さんは？」

和泉「わからない」

そうつ言つてゐるさなか誰かが転送されてきた

速水「あッ？ 終わりか？」

続けざまに誰かが転送されてきた

小富山「……」

和泉「西城は？」

小富山「なんとも言えんな。生きてればいいが

また誰かが転送されてきた

及川「えつ！ えつ！」

及川はなれない転送でうろたえていた
続けざまに誰かが転送されてきた

西「はあ…ちッ！」

西は及川を見て舌打ちをした
また誰かが転送されてきた

佐々木「あ、～」

小富山「佐々木！生きてたのか？」

佐々木「わりいか？殺すぞ」

速水「これで終わりか？」

小富山「西城がまだだ」

佐々木「あの小僧まさか死んだか？」

河内「誰かきたぞ」

すると誰かが転送されてきた

淳「……」

小富山「淳ーーー」

小富山は死んだかに思えた淳が転送されてきたことに驚いた

淳「小富山。弟たちは……」

淳は静かに小富山に問い合わせた

小富山「残念だが……」

淳「そうか……わかった

淳は小富山の反応で察した

西「これで最後か？隼人もいるみたいだし、ガンツ採点始めろよ

佐々木「そうだ！はやくはじめよう」

和泉「もう少し待て！まだ来るはずだ」

西「西城だろ？あれじゃもう生きてねえだろ」

採点が始まりそうな中最後の1人が転送されてきた

? 「あれ？ 終わりか？」

小富山「よく生きてたな！」

和泉「西城！」

それは紛れもなく西城智也であった

ちーん

あらじGANTONの画面から文字が浮かび上がってきた

それぢわ ちいてんを はじぬる

じょひじゅわん

〇てん

よわすだぞ

たすけてもらひいすぎ

t o t a l 6 0 てん

あと4 0 てんで

終わり

涼子「たすけてもらひいすぎ…ですよね」

和泉「そんに氣にするな

和泉「おっかさん。どうしたの?」

GANZENの画面元100でんめんまへが浮かび上がつて来た

total 139
100でんめんまへから選んでトモニ

42でん

こみぢやん

total 68
あと32でん
終わり

18でん

しおん

小富山「もう決まっている」

悩むそぶりも見せず小富山は100てんめにゅーから選んだ

小富山「3番、赤木修」

第103話 赤木 修（前書き）

この小説を書き始めて約3年。

当時、自分の小説を入れて GANTZ の一次小説はたつた3つしかありませんでした。

ここにGANTZがマイナー視される中、連載をしてきました。

そして今、映画化で各メディアに取り上げられ、二次小説を書く作者が増え、皆さんに GANTZ の良さが伝わってきたんだと思います。

とても嬉しいです（Ｔ・Ｏ・Ｔ）

他の作者の方々。

これからも頑張って連載を続けて行きましょう。

そして読書の皆さん、これからも応援よろしくお願いします。

第103話 赤木 修

佐々木「赤木？誰だ？」

西城「聞いたことねえぞ」

西城「誰なんだ？赤木って」

小富山に問いかけた

小富山「俺の命の恩人であつて、昔このリーダー的存在だった人だ」

西城「リーダーねえ」

そう言つと和泉を見た

和泉「どうした？俺の顔になんかついてるか？」

西城「世代交代？いや…世代入替か」

和泉「何がいいたい？？」

西城「いや！別に何でもねえよ」

西城は笑いながら言った

ジジジジジジジジ

すると赤木が転送されてきた
身長は大柄でがつちりしたタイプ
髪型はパーマがかかっていて
顔はなんともいえない大人の渋さを感じさせていた
右手にはHガンを持っていた

赤木「んつ…？誰だおまえら」

赤木は部屋を見渡すと、知っている顔をさがして
すると小富山を見つけた

赤木「テツ！お前俺を生き返らしたのか？」

小富山「はい」

赤木「ッ。お前あれほど俺を生き返らせんなつて言つただろー・ドアホガ！」

小富山「すいません。修さんごどつじとも聞きたいことがあつて…」

河内「あの小富山さんが頭下げてゐる」

茨木「相当すげ〜んだな。あの人」

赤木「俺が死んでからどのくらいいたつてゐる？」

赤木は頭をかきながら言つた

小富山「一年以上たつてます」

赤木「今さらだな。それで聞きたいことつて?」

小富山「俺が知つてる中で一番の古株が修さんだつたんで、ワーム

について詳しい事を聞きたいんですね」

赤木「ワーム? なんじや それ?」

するとステルスマードでいた隼人が出てきた
隼人は強化スースをまとつていた

隼人「人に寄生する奴らだよ。ミッショント外でも襲ってきた。あんたなら知ってるだろ?」

赤木「誰だ？こいつ？」

強化ステップで顔がわからない赤木は、小宮山にきいた

小宮山「栗原隼人。最初にきたミッショングで100点とった。」

小宮山が言つと赤木は思い出した

赤木「ああ！天才君ね！いや～あの時は、ビビったな」

隼人「いいから話せよ」

赤木「相変わらず無愛想な奴だな。あいつらか、どこから話せばいいか」

小富山「なんであいつらは俺たちを狙うのか。気になるんです」

赤木「それは昔ミッションでいつもがターゲットだったんだ」

小富山「ならなぜ生きてるんですか」

赤木「その時のミッションは過酷でな。こっちもかなりの手練れが揃つてたんだが…。当時、チーム最強と呼ばれていた板東という男がボスを追い詰めたんだ。だが板東が隙をつかれ、やられた途端チームはガタガタになり、俺もいろいろフォローしたんだがチームはほぼ全滅。制限時間内に倒せなかつた」

隼人「……」

隼人は黙つて赤木の話を聞いていた

赤木「奴らはその事を根に持つているのか。必要に俺たちを狙つてくるようになつたってとこかな」

小富山「やつなのか。ありがとうございます」

すると赤木は部屋の中心に立った

赤木「俺の名前は赤木 修。クリア回数は6回。みんな気軽に修さんって呼んでくれ。採点中悪かった。ガンジー採点つけてくれ」

しゃつまつせ

0てん

total 0てん
あと100てんで
終わり

第104話 驚愕

かわちくん

0てん

つよそりうなのはかおだけ笑

t o t a l 6てん

あと94てんで

終わり

みなみ

12てん

t o t a l 12てん

あと88てんで

終わり

にしくん

18てん

t o t a l 58てん

あと42てんで

終わり

おいちゃん(及川)

6てん

だまされぢやだぬだよ笑

t o t a l 6てん

あと94てんで

終わり

及川「おいーそこの中坊！」

及川は壁に寄りかかっている西に向かつて言った

西「俺か？」

西は笑みを浮かべながら言った

及川「よくも騙したな。あれ全部嘘だろ！」

西「騙されるやつがワルいね。そんな甘い話、あるわけねえだろ！
俺より人生の先輩ならもつと頭使えよ」

及川「てめえ！」

及川は殴りかかるとした
それを和泉が止めた

和泉「やめておけ。口が悪いんだ。許してやつてくれ

それでも及川は止まらなかつた
和泉はそれを抑えていた

あつちやん

0てん

ざんねんだッたね笑
つざがんばる

t o t a l 63てん

あと37てんで

終わり

もじみち(笑)

42てん

t o t a l 42てん

あと58てんで

終わり

南「やるな～」

はやと

〇てん

total 31てん

あと69てんで
終わり

カオルくん

46てん

total 64てん

あと36てんで
終わり

西城を残して採点が終わった
そして西城の点数がGANTTの画面に映し出されると、部屋にいるメンバーは驚愕した

れこじょう

151てん

t o t a l 203てん

100てんめにゅーから選んで下さい

赤木「なんだー?」「いつ?」

涼子「すいこー...」

するといGANTENの画面に100てんめにゅーが表示された

淳「壊れてるだろ」

小富山「t o t a l 200越えなんて聞いたことないぞ!」

すると西城は1回目の100点の答えを出した

西城「3番 斎藤カレン」

それに赤木が反応した

赤木「カレンちゃん死んだの？」

小富山「ああ。前回の//シションで佐々木に殺されました」

赤木「なんかややこしいことになつてんな」

そう言って赤木は佐々木を見た

ジジジジジジジジ

するとカレンが転送されてきた

カレン「えッ！なんで？」

カレンは状況を理解しようとした

カレン「もしかして死んだの？」

バッ

すると西城がカレンを抱きしめた

カレン「ちよつとビビついたの？」

西城「よかつた。本当よかつた」

カレン「サイが生き返らせててくれたの？」

西城「ああ」

カレン「ありがと」

カレン

0てん

total 0てん

あと100てんで

終わり

カレンの点数が表示されると画面に再び100点めにゅーが表示された

赤木「坊や。2回目だぜ」

西城はカレンを抱きしめるのをやめると、GANTZの方を見た

カレン「もしかして…修ちゃん…」

するとカレンが赤木に氣づいた

カレン「なんで修ちゃんがいんの！誰か生き返らせたの？」

赤木「ああ。テツが余計な事しやがって」

小富山「すいません」

カレン「だよね！修ちゃん。自分は人の事生き返らせるくせに、自分の事は絶対生き返らせるな！ってずっと言つてたもんね」

赤木「まあな。そんな命がけでとつた点数を、俺なんかに使うのはもつたいたいしな」

西城「カレンは赤木さんの事、知つてるの？」

赤木「修でいいよ。修さんで」

西城「すいません」

カレン「知つてるも何も、修ちゃんは私の元彼よ」

ガンツメンバー「ええ～！！」

ガンツメンバーは西城がtotal200越えを、出した時より驚愕した

第105話 ダブルヘッダー

隼人「西城。どうした?はやく選べよ」

隼人は選択しない西城をせかした

西城「あツ ああ」

西城は今だ動揺を隠せなかつたが、GANTZに向かつて自分の選択肢を言つた

西城「2番 新しい武器をくれ」

和泉「1番じゃなくていいのか?」

西城「ああ。まだやり残した事もあるしな」

そう言って佐々木を見た

佐々木はそれに気づくとそっぽをむいた

セニジョウ

3てん

total 3てん

あと97てんで
終わり

西城「どうから出てくんだ？」

和泉「武器ならたぶんあの部屋だぜ」

和泉はガンツソードのおいてある部屋を指差した

ガチャ

西城が扉を開けるとそこにはHガンがおいてあった

西城「これか」

西城はHガンを手にとると部屋に戻った

タタタタ

すると及川が再び西に襲いかかった

西「ひつけ～な」

すると西はステルスマードになった

及川「消えた！」

和泉「おっさん」

和泉は小富山を呼び止めた

小富山「どうした？」

和泉「疑問に思つてたんだが、最後になぜ弱点が心臓つてわかつた
んだ」

小富山「あれか？あれは佐々木がボスと戦っている時、佐々木の攻撃が奴の胸を殴った時に、ボスの動きが鈍くなった時に気づいたんだ」

和泉「よく気づいたな」

小富山「奴の首が飛ばされても、動いた事で俺の予想は確信に変わった。あとは西城に感謝だな」

そう言つて西城を見た

西城「なんか照れるわ」

河内「帰るか

茨木「だな」

そう言つている間にメンバーはぞろぞろと帰り始めた

バチバチバチバチ

河内「なんだ？」

すると玄関で西がステルスマードの状態で、必死にドアを開けようとしていた
すると西はステルスマードをといった

南「なんか訳ありか？」

速水「さあな」

西「なんでドアノブに触れないんだー。これじゃまるで

あ～た～らし～い
あ～さが～きた
き～ぼ～のあ～さ～が

和泉「どうこいつ」とだ？

涼子「なんで？」

西城「今まで、こんなことあつたのか？」

小富山「俺の知る限りではこんな事初めてだー。」

メンバーが全員驚いている中、GANTZの画面に文字が浮かび上
がってきた

てめえ達は今からこの方をヤツつけに行つてトドケ

斎藤健一

特徴

つよい

かしこい

好きなもの

娘、愛情

口癖

娘

画面にはどうみても人間にしか見えない、男の画像が表示されていた

速水「人間か？」

茨木「もしかしてこれがワームってやつか？」

河内「ワームはミッション外で襲つてくるんだ。これじゃ説明が違つぞ」

小富山「ワームかどうかは直接確かめてみないと俺もわからない」

和泉「でもどうみても人間だろ！」

赤木「……」

赤木は静かにカレンを見ていた

カレン「なんで…」

西城の横にいたカレンが震えながら言った

西城「斎藤つて……」

その時の西城は、勘がえていた

カレン「なんで…おじちゃんが……」

カレンは今にも泣き出しそうな顔をしていた
ターゲットとなつたのは、死んだはずのカレンの叔父斎藤健一であ
つた

第106話 高層マンション

するとGANTZによる転送が始まった

西城「…」

続々とガンツメンバーが転送されて行く中、西城は先ほどまでいた部屋に向かった

ガチャ

西城「持つてくか…」

西城はHガンを右腕で持ちながらガンツバイクを見た
しばらくして西城は、GANTZによって転送されていった

西城「…」

そこは高層マンションが乱雑する、閑静な場所であった

ある高層マンション近く

マンションの近くでガンツメンバーが集まっていた

和泉「全員いるみたいだな」

速水「ターゲットは??.ビーム.」

速水はクールに言った

カシャン

すると西がコントローラーを開いた

西「やーのマンションの中じゃね

そつまつて画面層マンションを指差した

小富山「室内となると少數の方がいいな。誰がいく?」

淳「俺がいく!」

すかさず淳が言った

河内「俺も行こう!」

河内は拳手すると一歩前に出た

小富山「他にはいないか?」

カレンはガソツメンバーが話しているのを黙つて聞いていた

カレン(心の声)「けんちゃんは、死んだのよ...けんちゃんのはずがない。でもなんで...なんでこんなに嬉しいの...悲しいの...」

すると西が×ショットガンを担ぐよつて持つた

西「俺も付き添うぜ」

小富山「よし。行くか」

小富山は手に持っていたHガソルを地面におくと、先頭をきつてマンションを登り始めた
そのあとに3人も続いた

ある高層マンション5階

カツンカツン

小富山「どうだ?」

西「もう少し先だ」

4人はレーダーを頼りに、マンションの5階の廊下を歩いていた
西はレーダーを見ながら言った

西「レーダー」

西があるドアの前で立ち止まるが、そこには「505」と書いてあ
つた

河内「どうする？乗り込むか？」

ガチャガチャ

淳「鍵か」

ドアには鍵がしつかりかかっていた

シュン

小富山「どことな

小富山はガンツソードを伸ばした
ガンツソードを構えるとドアに向かつて斬りつけた

ある高層マンション近辺

カツンカツン

赤木はどこかに向かつて歩き始めた

和泉「修。 もんでしたっけ? どこのくんですか? ? ?」

赤木「今回、俺はバスだわ。 その辺散歩していくわ」

そう言って赤木はその場をあとにした

カレン（心の声）「修ちゃん。わざと嵐を使つてゐる…どうしよう。

どうしたらいいの」

カレンは顔に手をあてながら思った

それを西城はチームとは、ハズれた場所で見ていた

西城「カレンのおじさんなら、死んだ人間が生き返ったのか？？それじゃまるで…」

西城は思わずガンツバイクから降りると、カレンに歩み寄つていった

ある高層マンション5階

ドアがガンツソードで真つ一つになると、崩れ落ちるよつこ地面に落ちた

小富山「構えろ」

小富山は全員に支持すると淳と河内はXガンを構えた

小富山もXガンを構えるとゆっくりと505号室に入つていった

「ふう」西

西はその間にステルスマードになつた

505号室

中は照明がつこておらず、真つ暗であった

第107話 接触（前書き）

かつぱ星人編 楽しんでいただけたでしょうか笑
よかつたら感想ください

まさかのダブルヘッダー
そのターゲットは…

健二編 本格スタートです

カツンカツン

3人は土足で505号室に入ると、ゆっくりと歩み進んでいった
真っ暗な中、奥の部屋にうつすらと明かりが見えていた

先頭の小富山がそのドアを開いた

そこは余計な家具が全くなく、あるのは一台のパソコンだけであった
パソコンの電源はついたままであり、あたりはその明かりで不気味
に照らされていた

小富山「誰もいない」

淳「どうなつてんだ??」

バツ

タタタ

河内「！！」

3人が部屋に入ると、入ってきたドアへ誰かが走り去る足音がした
その姿は田では認識できなかつた

小富山「ぐつー！」

カシャン

小富山はコントローラーを開くとレーダーを見た

小富山「逃げ出したぞ」

淳「くそがー追ついだー！」

何者かは505号室のドアを開いて逃げ出した
そこには西がいた

西「あッ？お前がターゲットか？」

それは斎藤健一であった

斎藤健一はサラリーマンのような、きつちつとしたスーツを身にまとっていた

すると健一は西に殴りかかった

西はそれをショットガンを盾にして防いだ

西「スースー？」

西はガード越しに健一の拳がガンツースをまとうのに気づいた

ガン

西「ぐあー！」

西はその勢いで通路の手すりの壁に叩きつけられた

ガツ

健一は手すりを飛び越えると5階から飛び降りた

タタタ

するとその場に小富山が駆けつけた

小富山「くそッ！逃がすか！」

ギヨーン
ギヨーン

小富山はXガンを構えると闇雲に打つた

バチ

すると一発だけ健二に被弾した

小富山「くッセー！」

西「奴、俺たちと同じ周波数を変えれるぞ！」

小富山「ああー…やうやくするのが妥当だな」

そう言つと小富山は手すりを飛び越えると、5階から飛び降りた

タタタ

すると淳と河内もその場に駆けつけた

河内「大丈夫か？」

河内は西を氣づかった

淳「くセツーおつせー」

淳は手すりを飛び越えると、5階から飛び降りた
河内もすぐさま飛び降りて行った

西「……」

西は立ち上がると5階廊下をじーっと見ていた

タタ

西はゆっくりと歩き出した

ある高層マンション近辺

西城「カレン」

西城が呼びかけるとカレンは振り向いた

ダン

西城が次に言葉を発しようとした時、何者かが着地した
それは斎藤健一であった
その着地音に全員が振り向くと健一はステルスマードを解除した

健一「カレン」

健一は少し見渡すとすぐにカレンに気づいた

健一「なんで……お前が！」

カレン「おじちゃん……なの……？」

茨木「どういふことだ？？」

南「ああな……」

和泉「人間なのか？？」

すると上空から小富山達が健一を追つてきた

健一「ちちッ！」

健一はガンツメンバーをかき分けると、すぐさま逃げ出した

カレン「待つて！けんおじりやん！..」

ダン

小富山が地面に着地した

するとカレンは健一を追い始めた

西城「カレン！」

西城はカレンを呼んだが、見向きもせず健一を追つた

和泉「西城。なんか知ってるのか？」

西城「今回のターゲットは……カレンのおじさんなんだ」

ガンツメンバー「！！」

その場にいたガンツメンバーは驚愕した
その間に西城はカレンを追いかけた

涼子「そんな……」

茨木「マジか

和泉「カレン……おじさん……そんな

小富山は着地すると立ち上がり
それに続いて淳と河内が着地した

小富山「なにやつてるー追えー」

そつぱつて小富山は走りださうとした

ヒコ

すると和泉はガンツソードで小富山の行く手を遮った

小富山「どうつもりだ??和泉!—!」

ある高層マンション近辺
並木通り

カレン「はあはあ」

西城「カレン！待てって！」

並木通りを走り去るカレンを西城が追つていた

カレン「！！」

すると木の間から何者かが襲いかかってきた
カレンはとっさにそれを避けた

カレン「誰！？」

その間に西城はカレンの隣に立つた

西城「お前は」

それは一流剣士 速水祐介であった

ある高層マンション近辺

小富山「もう一度聞く！なんのつもりだ！」和泉

和泉「今回のターゲットはカレンのおじさんだ。つてことは人間だ」

小富山「おじさん！本当なのか！」

和泉「ああ」

小富山は少し考えたがすぐさま話し始めた

小富山「だがGANZOがターゲットと決めた以上。やるしかない」

和泉「本気で言つてゐるのか？相手は人間だぞ！」

小富山はノガソを拾つた

小富山「お前ら決めろ！和泉につくか。俺につくか」

和泉「ちよッ！おっせん！」

あたりには今までにない、重苦しい空気が張り詰めていた

タタタ

すると茨木が小富山の方へ歩き出した

茨木「俺は小富山に借りがある。俺はこっち側につくぜ」

すると淳も小富山の方へ歩き出した

淳「和泉、俺たちは星人、人間と言つてる場合じやねえんだよ。そういう油断が死を招くんだよ。わかつてんだろ？」

和泉「淳。あんたまで」

すると河内が和泉の方へ歩き出した

河内「小富山さん。あんたにはワルいが俺は和泉につくぜ」

小富山「河内」

茨木「南。お前はどうひでつけだ」

南「俺はいいや……勝手にやつてくれ」

ガチャ

すると淳がXショットガンを構えた

淳「なうせんるー。」

和泉「やめろ!」

南は少し笑みを浮かべるとステルスマードになつた

南「言われなくとも… みなさんがんばれよ

和泉「本気なのか

そう言い残してどこかに行つてしまつた
その間に涼子は和泉に抱きついた

小富山「ああ。 やるしかないんだよ。 我たちは

ある高層マンション近辺
並木通り

速水は右腕にガンツソードを持っていた

西城「どうもつづけだ？」

速水「俺はこういつ機会を待つてた」

西城はその言葉で速水の意図を察した

西城「カレン。先に行つてくれ。」
「いっぽは俺が止める」

カレン「……ありがと」

カレンはさう言つて健二が向かつた方向へ向かつた

シウン

西城はホルスターからガンツソードを取り出すと伸ばした

速水「俺は剣道で日本を制した。だがあの日、俺は始めて本気で負けた」

西城「まぐれだよ」

速水「まぐれで負けるか！俺はお前のその奥の深い剣の強さを知りたい」

すると速水は深く息を吸つた

速水「俺と！！決闘しろ！！！」

第109話 亂入者

ある高層マンション近辺
広場

そこには強化スーツを纏った佐々木がたたずんでいた

佐々木「予想以上に移動が速いな。少し様子を見るか」

佐々木はコントローラーのレーダーでターゲットの様子を伺っていた

バチバチ

佐々木「！？誰だ？？」

佐々木に近づく1人の何者かがいた
何者かはステルスマードを解除した
それは南であった

南「佐々木。あんた俺と組まないか？？」

佐々木「はあー？ ははは。お前一本気か？」

佐々木は笑いながら言つた

ある高層マンション

5階

505号室

タタタ

西はゆっくりと505号室の廊下を歩いていって、ドアを開いた

西「？？」

西はつけっぱなしのパソコンに気づいた
ゆっくりとパソコンに近づくと覗き込んだ

西「なんだこりや！」

そこには西にとって興味深い内容が映し出されていた

ある高層マンション近辺

涼子「あれ？新人の子は？？」

涼子は及川がない事に気づいた

河内「さあな」

河内はそつけなく言った

小富山「和泉は俺がやる。お前達は先に行け」

淳と茨木に指示すると健一の逃げた方向へ走り出した

和泉「ここは俺に任せろ。涼子と河内はカレンさんを追ってくれ」

河内「ああ」

涼子「了解」

河内と涼子も同じ方向へ向かった

小富山「まさかお前とやるはめになるとは…残念だ」

和泉「おっさん。まさかあんたが、こんな答えを選ぶとは思わなかつたよ」

シウン

和泉はホルスターからガンツソードを取り出すと伸ばした

小富山「俺もお前を殺したくはない」

するとニガンをその場に置いた

小富山「だが本氣で行かせてもらひうござ」

ポキポキ

小富山は腕と首の骨を鳴らすと、ボクシングのフットワークをとり始めた

小富山「気ぬいたら死ぬぜ」

和泉「ああ。わかってる。それと…」

和泉はガンツソードを構えた

和泉「俺も本氣で行くぜ」

小富山「ははは。面白くなつてきただぜー」

ある高層マンション近辺

広い公園

及川「はあはあはあ」

及川は必死に走つてみると公園にたどり着いた

及川「俺じゃ無理だ…こんな世界。あいつら、異常なんだよ」

するとかつぱ星人のミッションの記憶が蘇ってきた

及川「あんな化け物。もう帰りたい！」

及川は震えながら言った

「ああ。確かに一匹見つけたぜ。ここで間違いないらしいな」

すると及川の背後からある男が近づいてきた
男は携帯電話を耳にあてながら誰かと話していた

「いらねえって。俺一人で充分だ。ああ。復讐は必ず果たす」

その男はスキンヘッドであった

ワーム
スキンヘッドの男
ギアラ

ギアラは及川に歩み寄つて行つた

及川はゆっくりとギアラの方向を振り向いた

ガン

ギアラは及川を思いつきり殴り飛ばした

及川はその場から吹き飛ばされた

パタン

ギアラは携帯電話を閉じるとポケットにしまった

ギアラ「さあ。狩りの時間だ」

第110話 カタストロフィ

ギアラはスマートにスーツを着こなし、ネクタイをきつちつとしていた

ギアラ「ああ??」

ギアラは倒れている及川を覗き込んだ

ギアラ「気絶してやがる」

ギアラは呆れながら言った

ギアラ「雑魚はあとで始末するとして、問題は例の男がいるかだ」

ギアラはさう言って歩き出した

ある高層マンション近辺
並木通り

タタタ

西城の背後から淳と茨木が走ってきた

茨木「お前らなにやつてんだ?」

2人はガンツソードを構えながらジッとにらみ合っていた

淳「ほッとけ! いへぞ!」

そう言つている間に河内と涼子が追ってきた

茨木「あいつらもつこてきてやがる

淳「ちりッ!」

淳は右腕にZガンをもちながら、左腕でホルスターからXガンを取り出した

ギヨーン
ギヨーン
ギヨーン

淳は地面に向かってXガンを打った

河内「！」

涼子「えッ！」

ボンボンボン

すると舗装された地面が破裂した
あたりにコンクリートの破片が破裂した
その攻撃で涼子と河内は怯んだ

ギヨーン
ギヨーン
ギヨーン

淳は再び地面にXガンを打った

淳「いくぞー！」

茨木「あんたやるね～」

淳「淳。淳ツて呼べ

茨木「おうー淳」

そう言って2人は走り去っていった

ポンポンポン

すると再びコンクリートの破片が炸裂した

河内「くそッー！」

涼子「あやツー！」

涼子と河内は怯むが再びそのあとを追つて行つた
その間に速水と西城はジッと睨み合つたままだつた

速水「……」

西城「……」

ダッ

すると速水が西城目掛けて強く踏み込んだ

シユ

速水は剣道のように腕を振り上げると、西城に斬りつけた
西城は横に軽く避けた

シユツ

速水は続けざまにガンツソードを横に斬りつけた

キン

西城はそれをガンツソードで受け止めた

ある高層マンション近辺

ヒコ
ン

和泉は小富山にガンツソードを斬りつけた
小富山は状態をそらしてそれを避けた

ヒュン
ヒュン
ヒュン

和泉はガンツソードを何度も斬りつけた

小富山はそれを避けながら和泉と距離を詰めた

ダッ

すると小富山は地面を強く踏み込んだ

和泉「！…」

和泉の首めがけて、右腕でラリアットをかましにいった

ある交差点近辺

健一「はあはあ

健一はその場に立ち止った

健一「手回しがはやいな…さてどう逃げるか

「どうに逃げるって

健一「…」

健一は何者かに声をかけられた

バチバチ

何者かはステルスマードを解除して姿を現した
それは強化スーツを着た栗原 健人であつた

隼人「安心しろ。手は出さない。話をしにきただけだ」

健一「…」

健一は隼人に対する警戒を解かない

隼人「カタストロフィについてだ」

それを聞くと健一の顔が変わった

健一「お前、なぜそれを知ってる!」

第111話 ギアラ

ある高層マンション近辺
広い公園

カレン「はあはあ」

カレンは広い公園を駆け抜けるように走っていた

カシヤン

カレンはコントローラーを開き、レーダーを見た

カレン「ここを速く抜けなきゃ」

「見つけたぜー。」

カレン「ー?」

カレンはその声に反応した

カレン「誰ー?」

それはギアラであった

カレン「あなた?もしかしてワーム?」

ギアラ「ワーム?ああお前達は俺達の事をうつ呼ぶのか」

カレン「だから私の姿が見えてるのね」

ギアラ「まあな。それよりねえちやん。俺と遊びまつぜ」

ギアラはポケットにつこんでいた手を出した

カレン「ワルいナビ私急いでるの。また今度遊んであげる」

そう言ってカレンは、ギアラの横を通り過ぎて行いつとした

シユツ

ザツ

するとギアラは横を通り過ぎるカレンに殴りかかった

カレンはそれを避けた

ギアラは続けざまに右腕でカレンに殴りかかった

カレンはとっさに左腕でガードした

カレン「！！」

カレンのガードが簡単に弾かれた

カレン「強い」

カレンは地面にガンを構えた

キュイイイイン

その間にカレンは飛び上がり距離を取った

ドン

カレンは着地するとガーンの放たれた場所を見た
そこにギアラの姿はなかつた

カレン「！？」

するとカレンはギアラの気配を感じとつた
カレンは頭上を見上げた
ギアラは落下しながら右腕を構えた

ガツツン

カレンはギアラの攻撃を紙一重に避けた
ギアラの攻撃で地面が派手に割れた

シユツ

カレンはとつさに右足を蹴り上げた

ヒュ

ギアラは避けると、左腕でカレンの持っているマガントを弾いた

カレン「ツ」

するとカレンの眼前にギアラは蹴り込んでいた

ガン

カレンはガードする間もなく、顔を蹴り飛ばされた
カレンは激しく弾き飛ばされた

ダダダ

ギアラはカレンを追走した

ガガ

カレンは体制を立て直し、立ち上がった

ピキピキ

チュイイイン

するとカレンのステップが呼応した

ステップが脈打つ中、ギアラがカレンに殴りかかった
カレンはそれを避けると右腕を構えた

ヒュ

強烈な右ストレートがギアラを襲つた
ギアラは首をすらしてそれを避けた
するとギアラは右足を、カレン曰掛けて蹴り上げた
それに合わせてカレンも右足を蹴り上げた

ガツーーン

2人の蹴りが激しく交差した
お互いの蹴りが相殺されると、カレンは左腕でギアラの胸ぐらを掴
んだ
引き寄せるにカレンは右腕を構えた

ガン

カレンはギアラの顔を殴り飛ばした
ギアラが弾き飛ばされると、カレンは一本のタバコを取り出した
加えると火をつけた

カレン「フウ。女だからツて舐めないでよね」

カレンは煙を吐きながら言った

第112話 我流剣士VS一流剣士

ギアラ「よシと」

ギアラはその場から起き上がった

ギアラ「はは。やるねー。ちよつと本氣だしちゃおつかな」

カレン「フウー」

カレンはタバコを吸つと煙を吹き出した

高層マンション近辺

並木通り

西城は速水のガンツソードを払いのけた

西城「やめようぜ。意味がない」

速水「あんたになくても俺にはあるー。」

速水は怯まず西城にガンツソードを斬りつけた
西城はそれを避けた

西城「ツ…………」

すると西城に激しい頭痛が襲つた

「逃げるのか」「俺には守るものがある」「俺は逃げない」「強くなりたい」「お前じゃ俺に勝てない」「それでも」

西城「ああああーー！」

西城の頭の中でフラッシュバックのよつてうんな記憶が駆け巡った

速水「もうつた！」

速水はその隙を逃さなかつた

ダツ

速水は強く踏み込むと西城にガンツソードを斬りつけた

ガシツ

西城はそれを左腕で受け止め、刀身を掴んだ

西城「思い出した…なんとなく」

速水「はツ！ 剣の振り方か？？」

ガツ

速水「べーっ！」

西城は腕を離すと速水を蹴り飛ばした
そのまま速水は後ろに飛ばされた

西城「本氣でやるなら、手加減しね～からかかってこい」

速水（心の声）「やつきと雰囲気が変わった」

速水はその場から立ち上がった

速水「そう来なくちゃなー！」

速水は西城に走り込んで行つた
速水は急接近すると剣道のようにガンシソードを斬りつけた
西城はそれを体をずらして避けた

西城はその間にガンツソードをさらに伸ばした
一回転すると速水に斬りつけた

速水「なッ！」

速水はとっさにガンツソードを構えた

ガキン

速水「重い！だが！」

速水はガンツソードを強く弾かれ、体制を崩されたがすぐに立て直
した
すると西城に急接近した

速水「懐ががら空きなんだよ！」

速水は西城の懐にガンツソードを斬りつけた

シュン

すると西城は瞬時にガンツソード刀身をしまった
そして再び一回転した

シュン

シユユユ

その回転中にガンツソードを腰へ伸ばした

速水「なッ！」

ガキン

速水の斬りつけたガンツソードにあたると、強く弾かれ速水はガンツソードを手放してしまった
ガンツソードは弾かれた勢いで宙にまつた

速水「くッ！」

西城は攻撃を終えると再び一回転した

グワン

すると西城は速水目掛けてガンツソードを振りきつた
速水はとっさに飛び上がった
そして西城の一撃を回避すると、宙に舞うガンツソードを掴みに行
つた

カツ

速水「ちツ」

カラソカラソ

速水は空中でガンツソードを掴み損ねた
ガンツソードは地面に落ちた

タツ

速水は地面に着地した

ヒュン

すると西城は伸ばしたガンツソードを振り上げた

ヒュン

構えると速水に向かって振り下ろした

速水「！！」

速水はとっせに反応した

ガーネン

速水は紙一重で避けると、西城の一撃は地面に叩きつけられた

第113話 一流の構え

西城はガンツソードを持ち上げると、再び構えた

ブン

西城は横にガンツソードを斬りつけた

速水はそれをその場に伏せてやり過ごした

ダツ

速水は勢いをつけると、落としたガンツソードを拾いに行つた
すると西城はガンツソードを構えた

ヒュン

ガンツソードの柄が速水の腕をかすめると、速水に西城の攻撃が直

撃した

速水の胸にガンツソードがめり込むと、その場から弾き飛ばされた

速水「ツーもうちょっとでー。」

速水は体制を立て直すと胸を見た

速水（心の声）「スースがなかつたら即死だな」

その間に西城は速水のガンツソードを拾つた

シユツ

西城はそれを速水に投げつけた
速水はとっさにそれを避けた

グサツ

そのガンツソードが木に突き刺さった

シユユユ

西城は速水に接近するとガンツソードの長さを通常に戻した

シユツ

西城は速水にガンツソードを斬りつけた

速水「くツ！」

速水はとつさに木に刺さったガンツソードに手をかけた

キン

速水は西城の攻撃をガンツソードで受け止めた

ギリギリギリギリ

つばせり合いになると明らかに西城が押していく

チュイイイン

すると速水のスー^ツが呼応すると、両腕にパワーが集中した
速水は思いきり西城を押し返した

速水「フウウウ」

集中すると速水は両腕でガンツソードを持ち、前に構えていたガンツソードを上段に構えた

速水「無事でいられると思つなよ

西城「本氣でくるか…」

すると西城は右腕に持つて居るガンシソードを坂手に持つた

クイクイ

西城「来いよ！」

西城は左腕で挑発すると、ガンシソードを構えた

ある画層マンション近辺

和泉「…」

小富山のラコアットが和泉の首に直撃した

ガツン

和泉はす「」に勢いで地面に叩きつけられた
和泉はとつぞに体制を立て直した

シユツ

そこを再び小宮山は和泉にラリアットをかました

ヒュツ

和泉はそれをとつぞに避けた
そこを小宮山は右足を蹴りつけた

ガン

和泉はとつそにガードするとその場から弾き飛ばされた

和泉「くッ」

小富山「和泉！お前じゃ俺に勝てねえ」

ある高層マンション近辺
広い公園

淳「なんだ？あいつ」

カレンとギアラが対峙している場所に淳と茨木が駆けつけた

ギアラ「お仲間の登場だぜ」

カレン「フウー」

カレンはタバコの煙を吐いた

淳「こいつはなんだ！？なぜ俺たちが見えてる？」

カレン「ワームよ。私たちが見えてるタネはわからないけどね」

茨木「こいつが！ほんじやないか」

淳「関係ねえよ。少なくとも奴はやる気だぜ」

そう言って親指でギアラを指差した

ギアラ「じ察しで。なぜ見えるか！教えてやッてもいいぜ」

茨木「本当か！」

カレン「バカ。相手を信用しちゃダメよ。殺されるわよ」

ギアラ「いい判断だね！ねえちゃん。はは」

するといギアラはジャケットを脱ぎ捨てた

ギアラ「行くぜ」

第114話 馬鹿力（前書き）

今回指摘された点を直してみました
うまく書けていればいいのですが…

第114話 馬鹿力

ギアラ「死ねやー！」

カレン「速いー！」

風を切るように駆け抜けると右腕を構えた
ネクタイをなびかせながら向かってくるギアラに、とつさに反応す
ると右脚を蹴り上げた

ガツ

確かに手応えに少し笑みを浮かべた

ギアラ「残念」

カレン「キャツー！」

簡単に両腕でガードされているのに気づく頃には、右脚を左腕で掴

まれていた

ギアラ「言い忘れたが俺は仲間の中で1、2を争つ怪力なんでな」

カレン「ちッ」

あつむりと地面を見上げる状態になると左脚を蹴りつけた

ガシツ

ギアラ「おいおいー暴れんなよーおねえちゃん

蹴りが顔面に近づくと右腕で簡単に掴んだ

ギアラ「結構な眺めだぜ。へへ」

体に密着したスース越しに笑みを浮かべながら恥部を眺めた

カレン「ゲスが！」

ガチャ

淳「構える」

淳はかけ声をすると重量感のあるN型の銃を構えた

茨木「あッああ」

淳の声に反応するとX型のショットガンのような銃を構えた

ギアラ「いいのか?仲間を巻き込むぜ」

容易に盾にすると挑発した

淳「ちッ」

巻き込むのを恐れノガンを打つのを躊躇した

チュイイイン

地面を見上げながら呼応するガンツースーツ

ガン

ガン

両腕で思いつきり地面を掴んだ

ガガガ

力を加えると拘束された両脚をギアラから逃れようとした

カレン「なんて馬鹿力なの」

ギアラ「言つただろ。怪力だつて」

茨木「くそッ。拉致があかない」

膠着状態になりかけている場で茨木は構えるのをやめた
そしてギアラに向かつて走り出した

タタタタ

接近する中、Xショットガンを思いつきり投げつけた
眼前に近づくそれを首をずらして避けた

ガツ

両腕で脚を持っていた腕を左腕だけで持つた

ガン

まるで子供が人形を扱うかのように簡単に振り回すと、茨木に叩き
つけた

茨木「ぐっ」

その攻撃で大きく体制を崩した

シユツ

チュイイイン

カレン「左腕。貰つわよ!」

勢いのついた体を起こすと掴まれている腕に絡みついた
関節を決めるときのスースのパワーを腕に集中させた

ギアラ「ふッ！関係ねえよ！！」

カレン「えッ！？」

ヒュツ

関節技の力が加わる最中、ギアラは左腕を振り下ろした

ガーン

思いつきり叩きつけられるとあたりにコンクリート片が飛び散った
その勢いで手を離すと、カレンは解放された

淳「茨木！」

淳の合図に反応するとともに察したのか
カレンを抱えにいった

ギアラ「やせるかよ！」

悠然と近づくと襲いかかろうとした

ガチャ

Ｚガンを構えながらホルスターからXガンを取り出した
構えると躊躇なく引き金を引いた

ギョーンギョーンギョーン

とつせに後方に退くギアラを見ると、茨木は叩きつけられたカレン
を抱え込んだ

キュイイイイイン

茨木が離れるのを確認するとＺガンの引き金を引いた

ドン

ギアラ「舐めが甘いな

スマートに着こなしたスーツをなびかせながら簡単に避けていた

ギアラ「まあおめえから仕留めてやるよ。」

すのと、ギアラは悠然と淳を指差した

淳「あいつは点数に入んのか?」

独り言を呟つと、ガン構えた

第115話 同盟

あるマンション近辺
広場

暗がりの広場の薄暗く点灯する電灯の前に佇む2人の男達がいた

佐々木「はは。俺になんのメリットがある?」

強化ステッスを纏つた屈強なる男。佐々木が答えた

南「あんたも味方がいた方が何かと楽だる。ここじゃ嫌われ者みた
いだしな」

南は佐々木の雰囲気に物怖じせずに答えた

佐々木「ふツ！俺大嫌いなんだよ。チームワークとか反吐がでんだ
よ」

南「まあそう言つな。俺もチームワークなんてするたりじゃない。

あくまでこれは俺のあんたに対する奉仕だ。それがあんたはただ答えるだけだ。いいだる」「

佐々木「とんだ物好きだな。俺の近くにいて死んでも知らねえからな」

南「ああ」

佐々木はレーダーを見ると移動を始めた

南「ほんか化け物揃いの中、生き残るのに一番なのは化け物についてのこと。いざとなればこいつを盾に逃げればいい。せいぜい俺の安全のために戦ってくれよ」

頭についめく策略を思いながら南は佐々木の後ろをついていった

高層マンション近辺

並木通り

ザツ

速水は強く踏み込むとガンツソードを西城に振り下ろした
西城はとつさにそれを避けた

西城「やつをより速い！」

速水は間髪入れずにガンツソードを斬り込んでいった
速水の怒涛の攻撃を西城は次々と避けていった

シユツ

速水「！…」

速水が氣づく頃には西城のガンツソードが眼前まで來ていた
とつさに首をそりあげそれを避けると体制を崩した
西城は再びガンツソードを斬りつけた
速水はとつさに距離をとつた

速水「逆手にしたことで格段に斬り込むスピードが上がつてやがる」「

西城「お前の剣さばきは型にはまつきてる。基本も大事だが、柔軟さも大事だぞ」

速水「柔軟？どういう意味だ！」

西城「さあな…自分で考えな」

すると西城は逆手からガンツソードを普通に持つた

西城「俺の本気見してやるよー。」

するとガンツソードを持っていない左腕でホルスターからガンツソードを取り出した

シュン

西城は左腕のガンツソードを伸ばした

速水「二刀流…だと！」

西城「元々な。お前は俺の攻撃についてこれるか

すると西城は速水に向かつて走り込んでいった

ある高層マンション近辺
広い公園

カレン「予想以上に強いわね」

カレンは田の前で起きた出来事を見て思つた

カレン「このままじゃマズいわね。茨木。小富山と和泉を連れてきて!」

茨木「いいが!あんたはどうすんだ!」

カレン「こいつを止めてみる」

するとカレンは体を揺らして軽くストレッチをした

カレン「まさか淳がこんな簡単にやられるなんて…」

淳はギアラに首を捕まっていた

淳のスーツは破壊され、丸い部分から液体が出ていた

ギアラ「1人も逃がさねえよ」

第116話 完敗（前書き）

だいぶ放置しました…

申し訳ない p(、 、 q)

次は書きためて一気に更新します

第116話 完敗

ある高層マンション近辺

シユユ

和泉は起き上るとガンツソードを通常よつたりに伸ばした
するとゆっくりと小富山に近づいていった

和泉「俺だって修羅場は何度もぐぐつてきた。簡単にはやられない」

和泉は立ち止まるとガンツソードを構えた

ブン

鋭いガンツソードの一撃が小富山を襲った

小富山はガンツソードを飛んで避けると和泉に接近していった

ブンブンブン

接近する小富山に向かつてガンツソードを何度も斬りつけた
小富山はそれを軽快に避けていった

クツ

すると和泉は横にガンツソードを構えた

ボン

和泉はガンツソードを振り切つた

それを小富山は飛んで避けた

振り切つたと同時に和泉はガンツソードを投げ捨て小富山に接近した

チユイイイン

和泉のスースが呼応すると、小富山の着地と同時に小富山の顎に向かつて右膝を蹴り上げた

小富山「ツー！」

小富山はとつさに反応すると顎をガードした

ガン

小富山のガードが弾かれる、和泉は左腕で小富山の右腕を掴み引き寄せた

小富山「くツ」

チュイイイン

和泉のスースが呼応すると右腕を振りかぶった

ガン

和泉の攻撃が腹に直撃した

ガンガンガンガン

ガン

何度も殴りつけると、最後の一撃が腹に深くめり込み、振り切ると同時に小富山は吹き飛ばされた

和泉「はあ……はあ……はあ……」

ある高層マンション近辺

広い公園

ギアラは逃走する茨木を追走した

ダッ

それにカレンは瞬時に反応した
すると、ギアラに右足を蹴り込んだ

ヒュ

ギアラは上体をそらして避けた
そしてすぐさま上体を起こした

ヒュ

するとカレンは体をひねり一周すると、ギアラの顔面に向かって左足
で回し蹴りを蹴り込んだ

ガン

直撃すると、ギアラはその場から蹴り飛ばされた

ある高層マンション近辺
並木通り

タ タタ タタタ

茨木は並木通りを駆け抜けるように走っていた

茨木「早くしないとカレン一人じゃ持たないぞ！」

すると並木通りに倒れる1人の男がいた

茨木「！？。だれだ ??」

それは速水であつた

速水のスーツの丸い部分から液体が飛び出し壊れていた

茨木「大丈夫か？」

見るかぎり速水はスースが壊れている事以外無傷であった

速水「くそ……強すぎる……」

速水はつぶやいた

茨木「大丈夫そうだな」

茨木は速水を少し見ると再び走り出した

速水「完敗……だな」

その並木通りに西城の姿はなかつた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3817e/>

GANTZfiction

2011年10月21日16時02分発行